

前はイラン國に貢納してゐた。彼等はトルクメン人のうちで一番文明的で、しかも、友情に篤い。彼等はイラン北縁の肥沃な地方に住むので、屢々イラン人の襲撃を受けたこともある。

(4)、テッケ——この名は、はじめ裏海の北東岸のマンギシュラク半島で聞かれたが、千七百十八年に彼等は、カルムイク人に依りこゝから逐はれ、後、イラン國境に沿ふて、キジル・アルヴァトより南東にのびるアハル・オアシスからメルヴ・オアシスに住むやうになつた。彼等はロシア人がトランス・カスピアを侵略したとき、その防衛戦において最も重要な役割を演じたが、後、千八百八十一年のゲクテベ戦の敗北により、彼等の運命は遂ひに決せられた。

(5)、サリク——この氏族は、その全時代を通じて、ベンジデの近傍ヨラタンよりパロパミスの西部山嘴にいたる中部ムルガブに住み、史上に現はれたのは十五世紀末のことである。彼等は五つの小族に分たれた上、更に、それが幾つかの分岐に分れ、そして、人口は最近減少の傾向にある。

(6)、サロル——この氏族はトルクメン族のうちで、最古にして最高貴とせられてゐる。サロルは神話的なオグ・イズ汗の曾孫の名である。アラビア人が七世紀にオクサス地方へ侵入した時、初めてサロルと交渉を有つた。そして、このサロルが、史上最初のトルクメン人なのだ。斯くして、サロルの名は全トルクメン族の名として使用せらるゝに至つた。

サロル族はメルヴの附近にも住んでゐるが、その一部は千八百五十七年にアフガン國境に近いハリ・ルド河岸のイラン領に移つた。彼等は十九世紀にテケスとの闘争において痛く悩まされ、爾來、彼等の好戰的性質は餘

程失はれて來た。

(7)、エルサク——この氏族は、十六世紀中葉には、裏海南西岸の近くに住んでゐたが、一世紀ほどして、マンギシュラク半島に移り、そこから、ウズベク人によりウスト・ウルト高原の南方平野に追はれて了つた。十八世紀初頭において、彼等はボハラ汗に從屬し、オクサス河の左岸、主として、クワジャ・サラルよりケルキに至る地帯に住み、今では、定住生活への過渡期にあるが、農耕採用以來、彼等の好戰心と遊牧的傳説は次第に失はれつゝある。

右七氏族の他に、半定住生活をつづけてゐる多くのトルクメン人の小族は、ヴォルガ、アムダリア、ゼラフシヤン、アストラハン、シルダリアの諸地方にも住んでゐる。洪牙利のヴァムペーリはその全數を約一萬六千人と推定してゐる。

(五) サルト人

一、住地・人口・體質　　サルト人は體型はイラン的で、言葉はトルコ語を話す混血民族である。彼等は東西トルキスタンにおいて中央アジア・トルコ族の間に分布してゐるが、主として、シルダリアの兩岸、西はサマルカンドより東はタシュケントに至る地域に居住し、殊に、その大多數はフェルガナに、殘餘はシルダリア、サマルカンド地方に密住してゐる。

サルト人の數は、アジア・ロシアのトルコ族の間において世界大戰前には第二位(第一位はカザック人)を占

め、百八十四萬七千人であつた。この内譯は、フェルガナ地方に百三十九萬二千六百六十七人、シルダリア地方に三十五萬九千七百四十四人、サマルカンド地方に七萬三千六百三十四人といふ風になつて居た。

サルト人の種族性は、トルキスタンの先住民たるイラン人と闖入者たるトルコ・ウズベク人との混血兒であり、従つて、その體型は中央アジアの他のトルコ系住民とは鋭く區別せられ、寧ろ、イラン語を用ゐるタジク人に近似し、その體構も黒づんだ肌色、大きな表情的な黒い眼、眞直な鼻、平均のとれた口、眞直な齒、もじやもじやした黒い眉、甚だ剛い口髭をもつてゐる。體型の點からしても、その基本がトルコでなくて、イランであることが解る。しかし、彼等自身、その由來について何も知らない。

二、サルトの名稱と由來　ロシア人、カザック人、ウズベク人等によつて呼ばれてゐるサルト人といふのは、ボハラ、サマルカンド、フェルガナ地方に居住するタジク人にもウズベク人にも屬せざる特殊の混血民族を指すのであつて、それは勿論、人類學的用語ではない。元來、彼等の祖族はイラン人ではあるが、その民族性や種族性を喪失したものだ。一般に、この地方の定着住民は、サルト人と呼ばれることを侮辱的な名稱として好まないから、今日では、この言葉は餘り使はれない。元來『サルト』は『商人』を意味するイラン語で、已にクダトク・ピリクに用ゐられてゐる。當時イランの商人がこの地方を多く往來してゐたからではあるまいか。それで、サルト(古代トルコ語では、*sa, ma, lu* の意)は初めはイランの商人に、後には非遊牧的農耕イラン人に對して用ゐられる様になつたものと考へられる。

サルトなる名稱は時代に依り、その内容を異にした。例へば、十一世紀にはトルコ人は商人をサルトと呼び、

十二世紀にはイラン人をサルトと呼んだが、十三世紀には蒙古人の定住灌漑農民をサルトと稱し、十五世紀にはペルシャ人、タジク人をサルトと呼んだ。然るに、十六世紀にはトルキスタン地方の被征服土着民をすべてサルト人と呼ぶに至つた。斯く、サルトの意味は、その時代とその使用者によつて内容を異にしてゐる。

サルト人の近族たるタジク人は、イラン系の體型のみならず、イラン語を今尚ほ保持してゐるが、サルト人は、體型はイラン系を保持してゐるも、言葉はトルコ語を用ゐてゐる。しかし此外にも、タジク人の失つたものを、いま尚ほサルト人が保持してゐるものもある。サルト人は、他のトルコ系民族と同様、スンニ派の回教徒に屬してゐる。

サルト人は主として商業、貿易に従事してゐるが、軽い労働を仕事としてゐる者もある。

(六) キブチャク人

キブチャク人はフェルガナの北、特に、アンヂジャンやオシエ地方、上部シルダリアの南に住し、舊コーカンド汗領住民の一角を形成してゐる。彼等は中央アジアのトルコ族の原郷から來た純トルコ分子であり、恐らく、カラ・キルギーズ人の一族で、キルギーズ・キブチャク人とも呼ぶべきものではあるまいか。その一部は定住生活をしてゐるが、未だ、遊牧的な、野生的な好戰的な精神に燃えてゐる。その數は、『アジア・ロシア』誌によれば、千九百十一年において六萬七百八十五人であつた。

(七) クラマ 人

クラマ人は、チルクク河(源を天山山脈に發し、シルダリア河に流入)とヤハルト河(シルダリア河)の支流たるアングレン河の岸邊に住む定住民族である。元來彼等は、定住を餘儀なくせしめられた疲弊せるカザック人と、サルト人又はウズベク人との混血兒である。それで、その名の「クラマ」もトルコ語で「混血」を意味する。その人口はヴァムベリに依れば、七萬七千三百一人で、『アジア・ロシア』誌によれば、サルト人のうちに算入せられてゐる。

(八) ウズベク 人

一、住地・人口・名稱　ウズベク人はほぼ東經二十七度よりオクサス河(アムダリア)の東部に沿ひ、西は北緯四十一度よりアラル海に下り、トルクメン人の住地と接する地に住んでゐる。即ち、サマルカンド住民の大部分はウズベク人で、フェルガナ、シルダリア地方にも住んでゐる。トルコ分子が大多数を占むるヒヴァとボハラの汗國にはウズベク人が殊に多い。即ち、トルコ系住民が全人口の九十九パーセントを形成するヒヴァでは、ウズベク人がその六十五パーセントを占め、また全住民の六十七パーセントがトルコ系住民であるボハラでは、凡そ半數がウズベク人である。ゼラフシャン河の兩岸におけるボハラのウズベク人は南部や西部における如く農耕人口の重要部分を形成する。更にまた、アフガン、トルキスタン等の諸都市における住民の大部分もウズベク

系である。

露領ウズベク人の數は千九百十一年に五十九萬二千五百五十人で、それに、ヴァムベリの算出せる阿領ウズベク人の數約二十萬を加へると、全數約八十萬人になる。露領トルキスタンのウズベク人の數を内譯すると、サマルカンドに四十九萬四千四百三十三人、シルダリア地方に七萬六千七百八十四人、フェルガナに二萬五千二百二十三人となる。最近のソ聯邦の統計に従へば、ウズベク人の數は千九百二十六年に三百九十萬四千六百二十二人(全人口の二・六六%)、千九百三十九年に四百八十四萬四千二人(全人口の二・八六%)となり、著しく増加してゐることが分る。「ウズベク」とは人種上の名稱ではなく、政治的の名稱である。この名は千三百四十年まで金帳國(キプチャク帝國)を支配し、回教の熱心なる布教者であつたウズベク汗の名に由來する。十四世紀には、「ウズベク」(眞の王)とは此の地方における回教トルコ人のことを意味してゐたが、十六世紀初頭においてこの名は、トランス・オクシアナ侵略者にして述赤チンギスの五男シャイバン汗の子孫により私せられ、最後には、キルギズ人やサルト人に非ざる中央アジア汗領の住民を指示するために用ゐられる様になつた。

二、種族性　ウズベク人はトルコ系ではあるが、キプチャク人の如くトルコ族の原郷から來た直系ではなく、トルコ系小族と蒙古族との混血兒である。トランス・オクシアナを侵略したシャイバン汗の軍隊は主としてアラル海とウラル河の間の地域に住むトルコ系遊牧民であつたが、このトルコ系種族は征服者たる蒙古族と混血して「ウズベク」の名を用ゐるに至つた。このウズベク人は更に三十二の小族に分岐してゐる。

三、特徴

ウズベク人の一般的體型について述べることは極めて困難だ。それは、その混血の差が地方

により雑多であるからである。ウズベク人はキルギズ人よりは丈が高く、トルクメン人よりは、ずんぐりしてゐるが、カラ・カルバク人の如く、丈が高くなく、また強壯でもない。ヒヴァ・ウズベク人の頭部は卵圓形で、两眼は長くのび、鼻は厚く、口は大きく、顎は圓く、頬骨は餘り突出せず、肌色はタジク人よりは奇麗であり、頭髮はトルクメン人よりも豊富で、主として褐色だ。ボハラボハラのウズベク人はその頭髮や皮膚から推して原住民たるアーリア人との混血を示してゐるが、コーカンドのウズベク人は同地のサルト人と餘り區別が出来ない。洪牙利人のウィファルヴィは、ウズベク人について次ぎの如く述べてゐる。即ち

『ウズベク人は中背で痩せ、黄色に染まつた暗褐色の皮膚をもち、口髭はまばらで黒く、鼻は短くて眞直、鼻底は幅廣で、唇は薄くて突出し、眉毛は弓形を描いてゐるが、むしろ乏しく、口は大きく、顎はどつしりし、頬骨は突出し、全顔貌は方形をなし、耳は大きくて兎のやうで、手足は小さい……』と、是に對してヴァムベリは、かゝる一般的特徴づけは、地方的には不可能である、といふ意味のことを述べてゐる。

ウズベク人は、多くの純トルコの風習の他に、なほ多く我々の心を惹く性質をもつてゐる。即ち、その基礎的特徴は、正直 獨立・沈着で、性急を忌む。顔の無表情は彼等の作法の一つである。この性質で、彼等の、ろまさが幾分緩和せられてゐるが、然し、そのために、いつも機敏なタジク人の餌となつてゐる。ウズベク人の理想は、直言直行的な戦士の雄々しい行爲だ。従つて彼等は、タジクの商工人をさげしむ。又その知的能力はタジク人に優るといはれる。

ウズベク人の家庭生活は一般に麗はしく、タジク人よりもその妻を愛し 子供をあやす。年をとつても親はそ

の子をよく愛す。社會生活には回教が支配してゐる。が、しかし、家庭生活にはなほ遊牧生活の遺風が残つてゐて、そこでは、回教の匂ひさへ見出すことは困難である。

四、生活様式

ウズベク人の一部は已に定住し 他の一部は半遊牧民で、前者は農耕をなし、少數のものは手工業者である。彼等は特にゼラフシャン河畔に多く住み、ヒヴァのオクサス河の左岸にも少くなく、そこでは、ウズベク人は模範的な灌漑農民だ。その昔好戰的な遊牧民は、今や、柔順な農夫となつてゐる。

ウズベク人は交易または産業にも多少従事してゐるが、元來、彼等は開放的な生活を好むから、事情が許せば、遊牧生活に復歸することを望んでゐる。然し、今日、ウズベク人の間に遊牧民は少く、僅かに、アフガン・トルキスタンのオクサス河左岸においてみらるゝに過ぎない。半遊牧民の数は可成り多いが、それはウズベク人がこの生活様式を好むからで、夏になると、その家畜と共に、大氣中で生活してゐる。然し、もし、もつと早くウズベク人がロシアに隸屬してゐたならば、カザンやアストラハンのタタール人の如く、凡てが農耕に従事してゐたことであらう。

五、言語・文學・文明

ウズベク人の言語は察哈台語シガタイと呼ばれる。察哈台は成吉思汗の子の名で、元來、ウズベク語は察哈台汗時代に移植せられた北方のトルコ系侵略者の方言から生れた言語なのだ。

ウズベク文學、すなはち中央アジアの近代トルコ文學は、現在、この地方における唯一の通俗文學であるが、しかし、中央アジアのイラン文學よりはやゝ劣る點がある。それは主として、回教傳説からとつた英雄譚や騎士物語が多く、それに、遊牧民の通俗詩もあつて、多少固有の味が加味せられてゐる。史籍としては、大部分、ヒヴァ

の年代記とベルシヤ又はアラビア文學からの翻譯物である。

元來ウズベク人は、外部からの影響によつて定住したものであるから、自然、その文明も一樣ではない。即ち低地オクサスやその左岸に住むウズベク人は、ボハラ、コーカンド、東トルキスタンの同族よりも、寧ろ、トルコ風の痕跡を多く保有してゐる。それに、この種族の純正の代表者たるヒヴァのウズベク人は、古代フワリズム（ヒヴァ）國家のベルシヤ文明的多くの痕跡を残してゐる。このことは、回教採用前にすでにトルコ人が低地オクサスに住んでゐたことを立證するものだ。ベルシヤ的影響のうちには、例へば、春分の祭典がある。拜火教の痕跡もヒヴァ・ウズベク人の信仰のうちに看取せられ、また彼等は、太陽と火の治病力を信じてゐる。また低部オクサス地方のトルコ人の間には、古代イラン神話も保存せられてゐる。

ウズベク人の服装は、タジク人よりも、寧ろ、トルクメン人のそれに似てゐる。

彼等の食物は幾分他のトルコ系遊牧民と異つてゐるが、たゞ、何處にあつても、クミーズは愛飲せられてゐる。回教の浸潤した地方を除いて、結婚は父母の手に依らず、當事者がまとめあげる。カリム（結婚）は馬・牛・羊・駱駝等で、新郎から支拂はれる。聖者崇拜も、ボハラやコーカンドのウズベク人よりも、ヒヴァのウズベク人の方が少く、又、メッカに巡禮するものも稀れた。

第五節 ヴォルガ・トルコ族

緒言

元來トルコ族は、往昔、その原郷たる中央アジアから南北の二線に分れて西漸したのであるが、

北方への動きは、アルタイ山脈からウラル山麓を経てヴォルガ河方面に向つて擴がつたもので、現在のシベリア鐵道に沿ふて北西へと伸びたものに依つて代表せられてゐる。即ち、彼等はエニセイ河やオビ河の上流平原から北西の方向に進み、トボル河を越え、フィン・ウゴル民族が北西ロシアへ撤退するに従つて、西へ西へと伸びて行つたものだ。しかし、其後、彼等の進出は、ヴォルガ河の中流においてモルドヴィン、チェレミス、ズイリアンの如きフィン族や、スラヴ族等により阻止せられ、全部がヴォルガ河を越えることが出来ずして、この地方に止つたもの、これ即ちヴォルガ・トルコ族である。このヴォルガ・トルコ族は別表の如く、カザン・トルコ人、パシキール人、アストラハン・トルコ人、クンヰール人、チュヴァシユ人、メシユチェル人、テプテル人等から成り、その各々について述べれば次の通りである。

(一) カザン・トルコ人

一、住地・人口・名稱　ヴォルガ・トルコ族は、ヴォルガ河中流におけるカザンを中心として、その北・東・西に分布し、大よそ、次の十地方に分布する。即ち、カザン、オレンブルグ、サマラ、シムビルスク、ヴィヤッカ、サラトフ、ペンザ、ニジュニ・ノヴゴロド、ベルム、タムボフの諸州が即ちそれで、其他の地方にも、少數のものが處々に散在する。然し、それらの中には、十六世紀の頃、ヴィルナ、グロドノ、ポドリヤに近く、昔のリトワニア領における農奴の子孫も加はる。尙、其他レニングラードで馭者や給仕をしてゐる者もあり、また、少しは波蘭のプロック地方にも住んでゐる。

ヴォルガ・トルコ人の住居は、ロシア人のそれとは異り、窓は内庭に向ひ、支那トルキスタン人のそれと能く似てゐる。しかし、此等トルコ人の住居はロシア農民のそれよりもよほど清潔だ。

ヴォルガ・トルコ人の結婚風習において、新婦の身代金は、遊牧同族の間における如く重要なもので、新夫婦の両親たちは、往々この問題につき前以て商議する。富めるタタール人の間では、革命前、それが千留以上ののぼることもあつた。婚資の半額は新婦の両親のものとなり、他は新婦の支度にあてられる。また彼等の間で、一夫多妻も稀でなく、誕生や葬式の風習も、他の定住回教徒と同様だ。

四、文學・宗教・教育 風習

彼等の文學は、主として宗教的で、他のトルコ系民族や波斯またはアラビアのそれと同様、神學がその主要題目だ。しかし又一方、民族精神に充ちたボビラーな詩歌もあるが、オスマンリ・トルコ族の影響は餘りうけてゐない。

ヴォルガ・トルコ人は、十六世紀にイヴァン雷帝により強制的に改宗せしめられた基督教徒（彼等はケレシユと自稱す）約二萬八千人を除けば、他は凡て回教徒だ。そして宗教は彼等の間で非常に強い力をもつ。彼等はトルコやアラビアの回教徒よりも宗教心が強く、千五百五十六年にイヴァン雷帝がカザンを占領した時でさへ、その宗教心を動かすことが出来なかつた位である。カザンには十六世紀末まで回教禮拜堂もなく、タタール人は分散して生活してゐたが、其後、回教は次第に弘布せられ、十八世紀中葉にはカザンのモスクは二百五十を數ふるに至つた。これにより、ロシアの執拗な壓迫にも拘はらず、ヴォルガ回教徒の結束は愈々強化せられて來た。カザンのムラー（回教僧）は、ボハラ許りでなく、君府、カイロ、メジナ等に於ても教育せられ、會堂數は次第に増加

し、回教學校も漸次改良せられていつた。斯くして、千七百八十一年乃至千八百六十八年において會堂數は、二百五十から七百二十九に増加し、第一次歐洲大戰前には、會堂一に對して三百十人、兒童百十九人に對して學校一の割合にまで進んでゐた。

回教學校においては宗教教育のみで、これに關係あるアラビア語やペルシャ語が多少授けられ、民族語は一般に忽がせにせられてゐた。ロシア語は教へないが、自然に覚え込み、また教育普及の結果は文盲を少くし、書籍の刊行も増加し、千八百二年乃至八十五年の間に約百萬冊の書物が、カザンで印刷せられ、それが中央アジアや印度方面にまで供給せられた。これがため、ロシア治世が約四世紀間もつゞいたにも不拘、カザン回教徒のアジア的保守主義は、ロシア文化により弱めらるゝことも、又、左右せらるゝことも出来なかつた。そして單に、無教育な者のみがロシア住民のうちに吸収せられていつた。他方、カザンのムラーはケレシユの間においてさへ、ロシア僧よりも勢力があつた。事實、ケレシユは、風習や言語の點において、ムスリンよりも一層タタールの的さへあつた。それは、彼等が、ロシア人とよりも、寧ろ、チュヴァシユ人、チェレミス人、ヴォチャーク人、モルドヴィン人等と雜婚することが多かつたからである。トルコ流の物の考へ方や生活慣習は、カザン・トルコ人のうちに、尙、多く保存せられてゐる。彼等は、數世紀間のロシア治下の定住生活にも拘はらず、遂に、スラヴ化しなかつたのだ。

一般に、カザン・タタール人について言はれることは、ヴォルガ・トルコ族全體に對しても言ひ得ることだ。千五百五十六年にロシアに依る占據前にも、後にも、カザンはロシアにおける回教教育の中心であつたが、今に

おいてもなほ同様だ。

(二) パシキール人

一、住地・人口・種族・特徴　　パシキール人は歐露の南東部、ヴィヤクタ、ベルム、ウファ、サマラ、オレンブルグの諸地方、即ち、西はカーマ河と中部ヴォルガ河、東はウラル河流域との中間地帯に住む。彼等はヨーロッパの他のトルコ族よりも北にのび、トルコ族とウゴル族との中間住民を形造つてゐる。

パシキール人の数は、二十世紀初頭には七十五萬七千三百人であつたが、ソ聯の統計に従へば、千九百二十六年には七十一萬三千六百九十三人、千九百三十九年には八十四萬二千九百二十五人となり、多少増加してゐる。その大部分はパシキール自治共和國に居住する。

パシキール人は普通トルコ化したウゴル人と視られて居るが、人種的・言語的・歴史的には、ウゴル人とトルコ人との混血兒なり、とするヴァムベリーの見解が正しいとせられてゐる。彼等の言語も、その慣用法も、ともに純トルコ風のものが多い。パシキールの名稱に關してはタタール語で「パシ」は「頭」の義、「キール」はトルコ・タタール語で「昆蟲」の意なりと云ふ。元來、彼等は養蜂を營んだ種族であるから或ひは之に由來するのかも知れない。

ウラル溪谷に住むパシキール人と、平原のパシキール人との間には大きな差異がある。後者は前者よりも一層トルコ的で、即ち、中背で、大きな頭、幅廣の扁平な顔、低い鼻、突出した顎をもつてゐる。これに反して、森

林地方のその近族、即ち山地型は、長い顔、凸面形のプロフィール、高い鼻をもち、背は高く、高架索アジア族に似てゐる。パシキール人は、全體として、カザン、アストラハン、クリミアのトルコ族と區別出来ない程に近似してゐる。彼等は、概して、黒い頭髮や、黒い眼や、短頭をもつ。

パシキール人の一般的特徴は、遊牧生活を脱したばかりのトルコ人のもつ善惡兩性質を兼有してゐることである。例へば、彼等は勇敢にして個人の自由を尊重し、その親切は、昔からもつ善い性質であるが、他方、多くの悪い性質も持つてゐる。馬泥棒は彼等の間で重罪とせられてゐる。

二、生活・宗教・仕事

パシキール人は、カザン・タタール人、ノガイ人、キルギーズ人や、中央アジア

諸族の如く、回教文明に支配せられてゐる。例へば、その家屋の外見はタタール人のそれに似てゐるが、より窮乏を示し、その内部はカザン人のそれよりも、寧ろ、キルギーズ人のテントの内部に似てゐる。服装はタタール人やキルギーズ人のそれと餘りちがはない。食物は材料・料理法・名稱の點で、キルギーズ人や中央アジアの諸族のそれに似てゐる。また彼等はアイラン(バター・ミルク)やクミーズを愛飲する。家庭生活は、カザン・トルコ人のそれに似てゐる。結婚にはカリムが付物で、婚約は幼少の時になされる。が、十八歳以下の男子や、十六歳以下の女子の婚姻は稀だ。結婚式は定住トルコ人のそれよりも、むしろ、遊牧民のそれに似てゐる。娯樂においては、音楽・民謡・ダンスが主なもので、ダンスはチュヴァシユ人やマジヤール人のそれに似てゐる。

パシキール人が回教を採用したのは極めて古いが、その宗教心はさほど深くはない。例へば、女子のヴェールもないし、コーランの戒律も余り守られてゐない。しかし、ムラーは教育に熱心で、學校の數は多く、文盲は少

ない。學問はコーランの研究に限られ、その改革は仲々難しい。

元來、バシキール人は四圍の事情に依り遊牧民から定住民に變つたものだ。彼等の仕事は、伐木・養蜂・狩獵・放鷹・漁業等で、また、彼等の間には坑夫もある。然し、その本來の遊牧的性向は、餘り農耕に親しまない。養蜂は彼等の好むところだが、余り有利にやつてゐない。

三、言語・文學・歴史　バシキール語は獨立したトルコ系方言の形を具へ、上部イルティッシュ河から中部ヴォルガに至るトルコ系言語チェーンに繋がるが、その語彙や發音の點ではウゴル語系に近似してゐる。バシキール人の文學はカザン・トルコ人のそれに劣る。文獻としては、カザン方言のテキスト類の他には、戀愛・勇士・人情を唄つたポピュラーな四行詩があり、それにはバシキール民族精神がよく表現されて居る。

バシキール人に關する最初の記述は、九百二十五年にもしたイブン・フォズランの旅行記で、彼はカリフ・ムクテヂールの使者としてこの地方を旅行し、ウラル河の下流を過ぎ、この草原にバシキール人の住むのを觀て記したものだ。それに據ると、バシキール人は多神教で、多くの偶像をもつてゐる。このことはバシキール人が種族的孤立性を保持してゐたことを示すものだ。又バシキール人は十三世紀初頭に成吉思汗の軍隊と結び、封疆と旗を得て、その獨立を保障せられてゐた。

フランチェスカン派の僧リユブリュキは、千二百五十三年に、如何にしてヴォルガ河から十二日で、ヤイク(ウラル)のバシキール人の郷土に達したかを述べてゐる。バシキール人は都會も要塞も有たない戰士で、その住地としては、平地よりも山岳を好む。彼等は十六世紀中葉にイヴァン雷帝のロシア治下に屬し、千七百七十三年

にはカタリナ二世のために反軍と戦ひ、また、ロシアの爲にスウェーデン、ポーランド、トルコと戦つたこともあつた。そして十八世紀にはバシキール人の住地はずつと南にのびてゐた。

また彼等は、千七百年頃にはヴォルガ河の下流に住み、當時、その牧野はウラルにまで達してゐた。今日のキルギズ平原にも、曾つてはバシキール人が一杯住んでゐたが、千八百年頃には、エムバ河とウラル山脈の間の高原を放浪してゐた。また千七百九十八年に、ロシア政府は、バシキール人の好戦心を利用して騎兵隊を組織せしめ、キルギズ人に對してウラルを衛らしめた。また千八百十二年に、バシキール人は、第三コザック騎兵聯隊に屬してナポレオンの軍隊と戦ひ、千八百七十六年には、新たにバシキール騎兵隊が組織せられた。

(三) アストラハン・トルコ人とクンヅール人

一、住地・生活・言語　カザン・トルコ人とバシキール人の他に、ヴォルガ河口に二つのトルコ族の小群がある。その一つはアストラハン・トルコ人で、人口大凡一萬人、カルムイク人(蒙古人)と隣接して居住する。これは古代アストラハン帝國の遺物で、今日彼等は、農耕と園藝を營んでゐる。他の一つはクンヅール人で、人口約一萬二千人、カラ・アガチ(黒い木)人と自稱してゐる。一説には兩者の總數約五、六萬人ともいはれる。彼等は、十三世紀中葉に金帳國(欽察汗國)のノガイ人より分離し、千七百七十一年にカルムイク人が低地ヴォルガを去り伊犁溪谷に歸還した時、セイトフカ、コショウトフカに近いアク・トエ・ベレケ、河畔のヴォルガ河のデルタ地帯に住み始めたのであつた。クンヅール人は更に多くの小族に分岐してゐる。

彼等は、キルギーズ人とカルムイク人の住地の近くにおいて、冬は町に住み、他の季節は遊牧するといふ半遊牧的生活を営んでゐる。彼等の容姿はカルムイク型だ。そのテントは他のトルコ族の如く圓形でなく、長い。不潔と懶者の點では、ガイ人によりも、寧ろ、カルムイク人に似てゐる。

彼等がトルコ系であることは、その言語と二三の風習に依つて知られるだけだ。その言語はノガイ人に關係があり、高架索や波斯のトルコ語とは無關係である。波斯の影響はその回教を通じて窺はれる。彼等は千七百七十一年にロシアに歸服した。

二、結婚・種族性・飲食物 食物の點で、クンヅール人は寧ろ遊牧民のそれに似、主として、肉類と乳製品を用ゐ、クミーズを愛飲し、固形茶を好む。

結婚にはカリムが必要で、新郎は五百乃至千ルーブルを娘の親に支拂ふ。新婦はこれに相應した家具、テント、一對の牛、其他のものを持つて来る。新婦はクリミヤ・タタール人やノガイ人の間におけると同じ式典をもつて新郎の家にみちびかれる。クンヅール人はノガイ人に似てダンスを好み、また彼等は凡て回教徒だ。クンヅール人は種族的にはノガイ人の一氏族で、言語的には、寧ろ、カザック・キルギーズ人に近い。

(四) チュヴァシユ人

一、種族性・性格・風習 ヴァムペーリは、その體質と言語に基きチュヴァシユ人を東芬族のヴォルガ群の一に屬せしめてゐるが、しかし、一方チェレミス人のために變改せしめられたトルコ人と視る者もある。ヴァ

ムペーリに依れば、チュヴァシユ人は中背で、不器用な足取り、可成り暗褐色の肌色、多少突出した頬骨、黒い眼、低い額、黒い頭髮をもつてゐる。女の眼の狭いのと頬骨の突出が著しく、そして肌色はタタール人よりも奇麗だ。

ヴァムペーリの右の説は他の學者の意見と一致しない點がある。即ち、混血種族の歸屬を定める場合に、體質のみ、或ひは言語的證據のみに基いて、その起源を決定することは出来ない。チュヴァシユ語は遠隔の地に住むトルコ人にも解る位にトルコ的なもので、トルコ人は、文法の大體と發音を習ふだけで、チュヴァシユ語のテキストを讀むことが出来るほどである。チュヴァシユ人は、餘程昔から農耕をやつてゐて、今では殆んど、その遊牧性を失つてゐる。

チュヴァシユ人は一般に勤勉であるから、貧しいものは少い。その家庭生活は平和で、タタール人やロシア人よりも、その妻を愛するといはれる。

結婚は兩親の手に依らず、當事者間で準備せられ、二百ルーブル以内のカリムが支拂はれる。然し、時としてはカリムは拂はれずに、單に兩親の承諾を得て結婚を爲すものもある。死者には疇衣を着せ、その生前の手廻り品や、煙草、麥酒、又はその職業用具、即ち、斧、樂器などが、それと共に埋められ、女の屍には其他、針、布などが添へられる。

二、歴史・宗教・人口

「チュヴァシユ」の名は千五百二十四年に初めてロシアの編年史に現はれてくる。

チュヴァシユ人は永い間ブルガール人、蒙古人、タタール人等に苦しめられ、千七百四十三年にはロシアに歸屬

して、基督教を信じ始めた。斯くして、ロシアの善き住民となつたのであるが、しかし、彼等は概して名義だけのクリスチャンで、部分的には回教徒や偶像教徒も残つてゐる。各宗教の信徒の分布を数字的に示すことは難かしいが、カザンには基督教徒が多く、回教徒はサマラ、ウファ、オレンブルグ等に、またシズラン、クヅネツク、ペトロフスク等には偶像教徒が多い。彼等は、基督教の聖人と偶像教の神々を混同してゐる。その古代宗教はシャーマニズムで、基督教と回教の影響をうけ乍らも、それは今尙、残つてゐる。

チュヴァシユ人の数はソ聯邦の調査に依ると、千九百二十六年に百十一萬七千四百十九人、千九百三十九年に百三十六萬七千九百三十人となつてゐる。

(五) メシユチエル人とテプテル人

メシユチエル人とテプテル人は共に、カザン、ウファ、ベルム、ペンザ、サラトフ諸州に住み、その人口は、ヴァムペーリに依ると、千八百八十五年において十三、四萬人であつた。その起源はウゴル系であることは間違ひないが、トルコ族の混血が著しい。その大部分はトルコ語を話し、トルコの風習を採用してゐる。

メシユチエル人　ペンザ、カザンのメシユチエル人は、その言語・風習・宗教に至るまでロシア化せられて了つた。その大部分は農民で、回教を信ずる。

メシユチエル人の大部分はバシキールの中部地方に生活し、その風習・生活様式等にはロシア化せられ乍らも僅かに特有なところが残つてゐるものもある。彼等は熱練にして勤勉な農民で、しかも、清潔好きで、その富裕さ

は往々バシキール人に比較せられる。その容貌は、明らかに、トルコのならざることを示し、卵圓形の顔、美しい頭髮、明るい青い眼をもつてゐる。家庭は男系家長制で、妻は家事を擔當し、姑は家長について權力を有す。

テプテル人　テプテル人の大部分は、會つて、バシキールの居たオレンブルグ、ウファ、ヴィヤトカ、ベルム諸州に分布し、トルコ人と東フィン人との混血兒だ。

テプテル人を宗教別にすれば、偶像教徒と回教徒に分けられ、最近、基督教に改宗するものも多い。基督教徒は、永い間定住生活をやつてきたが、元來の怠けもので、余り巧みな農民でなく、従つて、彼らは貧しい。これに反し、偶像教を信ずるテプテル人は、善良で勤勉な農民だ。その生活にも餘裕がある。異教テプテル人の宗教は、チュヴァシユ人のそれに似てゐる。彼等は天上の至高神とその惡をこらす精靈を信ずる。彼等は死後の生命を信じ、死者には大使ひの鞭をもたせて埋葬する。主な祭式は、ケレメトと稱する惡神に捧げる年一回の供物祭だ。結婚はカリムのない時には掠奪結婚をやる。

x

會つて、ヴォチャーク人の間に、『ブスルマン』と呼ぶ回教住民のゐたことは興味深い。ブスルマンとは西紀千百年頃モルダヴィアの回教トルコ人に與へられた『バサルバン』から出た名稱で、その地方をバサルバニア又はベッサラビアと呼んでゐた。

第六節 黒海トルコ族

緒言

トルコ族がそのアルタイ原郷から西漸した経路には南北の二線があつて、黒海トルコ族の大部分はその南線を通つて西進した。即ち、彼らは、中央アジアから高架索を北上して南ロシアに侵入し、アゾフ海の北部から東はヴォルガ河、西はクリミア半島にいたる平原に分布するに至つたトルコ系民族の一派である。彼等の血管には、トルコ、モンゴル、アリア等の血が混流してゐる。従つて、その外貌・文化・風習にも之等の混合状態が窺はれる。即ち、こゝにいふ黒海トルコ族とは、いはゆる土耳其韃靼族のこととて、内外高架索地方より、ヴォルガ、アゾフ、クリミア地方に分布する謂ゆる高架索トルコ人、ノガイ・タタール人、クリム・トルコ人等の總稱であつて、その各民族の特質は次の通りである。

(一) ノガイ人

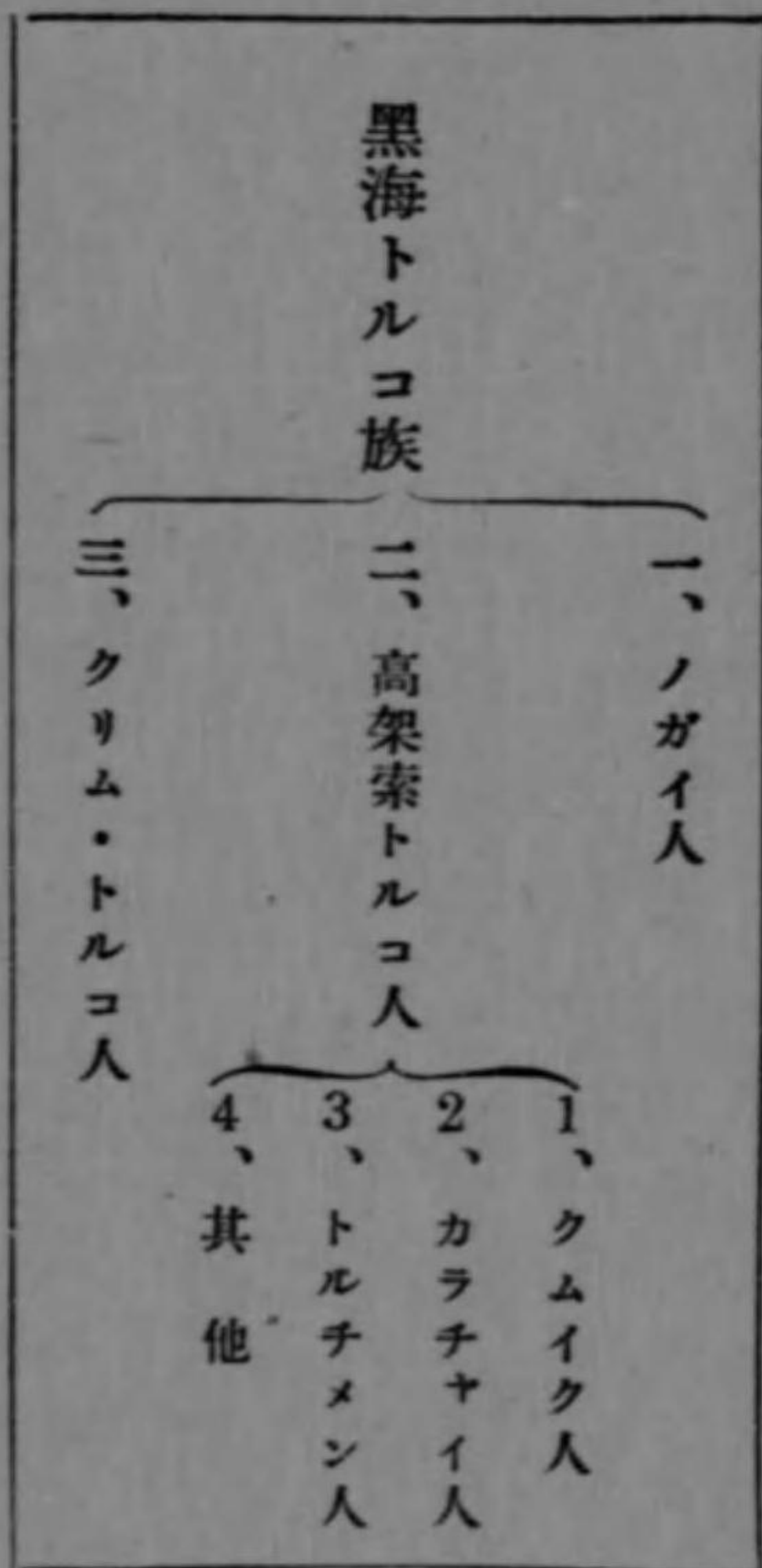
一、住地・名稱・移住 現在、ノガイ人の住地は、スタヴロポリ州を中心としてクマ河の南、テレク・コザック領とダゲスタン自治共和国にまで擴がる。彼等は、往昔、高架索地方から移住して來たカラガチンツイ人の後裔だといはれる。彼等はそこから更に南ロシアに侵入してアゾフ海岸から裏海の西北へかけて分布し、ヴォルガ河を隔て、東西の二部に分れ、その東部のものを大ノガイ人、西部のものを小ノガイ人と呼ばれたが、のち、コザック人やロシア人の壓迫により四散せしめられて了つた。

『ノガイ』の名稱は種族的のものではなく、政治的のものだ。それは千二百五十九年に波蘭を蹂躪した成吉思汗の子ノガイの名から出たもので、そこから、黒海・裏海・ヴォルガ河地方に居住する全トルコ・タタール人の名稱となつたものである。ノガイ人は歴史上、十三世紀から現在まで、常に、比較的良好にロシア人と提携して來たものゝ、彼等は絶えず中亞から侵入する好戰的遊牧民により脅威されたり、又は、ロシアの發展や壓迫のために惱まされつゝ、時と共に四分五裂するに至つたのである。

ノガイ人は、過去において屢々その住地を變へたので、往昔の住地を決定することは極めて困難であるが、歴史的には十五世紀の初頭に、アゾフ海の西、クリミア半島の北に居住してゐたことは確かである。また十六世紀の初頭エムベ河の中部に居たこの種族の一部が、カルムイク人のために追はれたことも知られてゐる。そして其後彼等は、ペーテル大帝に依り、強制的に、クマ河やクバン河の平原に住むその同族と共に混住せしめられて了つたのである。

二、遊牧群・人口・特徴 十八世紀頃、ノガイ人には次の五遊牧民群があつた。即ち

- 1、ドン河とクバン河の中間アゾフ海附近を彷徨する遊牧民群
- 2、クリミア半島の遊牧民群
- 3、アストラハンの遊牧民群……その大部分は、高架索、クリミア、バシキール地方へ移住し、今では、殆んど消えて了つた。
- 4、クバン地方におけるノルーズ人とカサイ人の遊牧民群



5、クンヅール人……ヴォルガ河の支流におけるアクテベ附近に居住。(ヴォルガ・トルコ族参照)

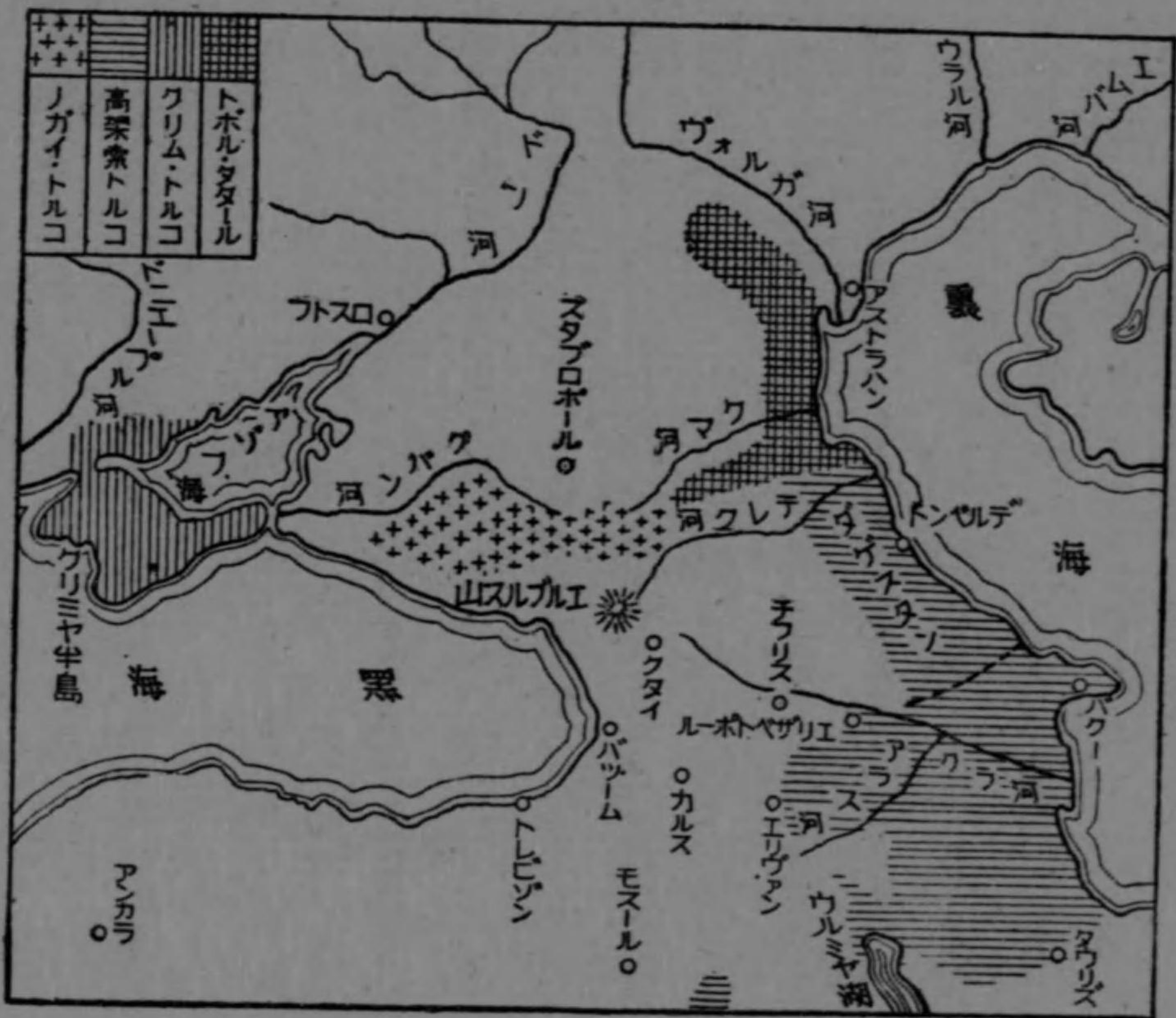
ノガイ人の大部分はスタヴロポール州に居住し、その数約八萬五千人、そのうち八萬強はテレクに、二千はダゲスタンに、またタウリダにも多少ある。そして、その總数は十萬弱となつてゐる。因みに、グラランダ教授に

依れば、ノガイ族の数は三萬六千二百七十四人で、ノガイ語を使用する者は二萬三千二百二十六人と記してある。ノガイ人はバシキール人、カルムイク人、コーカサス人、ロシア人、ポーランド人、ルーマニア人、ハンガリー人等の如き外來分子と接觸し混血してゐるにも拘はらず、その一部分は、今尙、昔の遊牧生活の面影を保持してゐる。その中でもカラ・ノガイ人は、他の多くの近族よりも、純トルコ型の體格を保持してゐる。すなはち、ずんぐりした容姿、大きな頭、小さな眼、まばらな口髭等の如き、強いトルコ的なところを残してゐる。唯、その中でも高架索人に接觸したものは、幾分、コーカサス種族に近くなつてゐる。

ノガイ人は缺點が少くて美點が多い。法律を守り、上長によく仕へ、殺人や窃盜は彼等の間にはなく、たゞ時時、家畜泥棒がみられるだけだ。彼等は、中部ヴォルガやクリミアの近親族よりも飲酒癖が少く、靜かで、無口で、トルコ的美徳の原型を具へてゐる。

三、仕事・服装・風習・宗教

ノガイ人は、今日では最早遊牧民ではないが、牧畜には専心してゐる。その



第 2 2 圖 黒海トルコ族の分布

住居は粘土の小屋、又は獸皮の天幕であり、彼等の主要な飲食物は、獸肉、アイラン(バター・ミルク)、クミーズ、チーズ等で、また彼等は非常な茶好きで、それは恰もヨーロッパ人におけるパンのやうに必要なものだ。男の服装は近隣の高架索人の強い影響を受けてゐるが、しかし、女のそれは、寧ろ、カザンやヴォルガのタタール人のそれに似てゐる。

ノガイ人の風習には餘り特色あるものが残つてゐないが、結婚に際し、カリムは三十頭以下の牛で支拂はれ、新婦は車で新しい家に運ばれる。ノガイ人は多くその妻をクリム・タタール人の間から娶る。妻は一般に輕視せられ、一夫多妻が多い。誕生や葬祭の風習には古代遊牧民の面影が多少残つてゐる。タ

ヴェルニエの紀行によれば、十六世紀末にノガイ人は、キルギズ人やトルクメン人よりも、もつと典型的なトルコの遊牧民であつた、と言つてゐる。

ノガイ人の宗教は回教であるが、彼等は名前だけの回教徒で、その信仰は出鱈目だといはれてゐる。

(二) 高架索トルコ人

黒海トルコ族のこのグループは、内外コーカサス居住のトルコ族から成るが、内コーカサスのトルコ人は北方から来た回教スンニー派に屬し、今一つのものは外コーカサスのもので、これは南から来たシーア派に屬するものだ。千八百九十七年のロシアの調査に依ると、その全数は百八十七萬九千九百八人であつたが、千九百二十六年には百七十萬六千六百五人となり、千九百三十九年には二百二十七萬四千八百五人となつてゐる。

一、クムイク人

クムイク人は、ダゲスタン自治共和國のシャンカルヤンギ・ユルトよりイェミケントに至る裏海の西岸に沿ふ高架索の北東に居住し、別名ダゲスタン・タタール人とも呼ばれてゐる。その一部は南の溪谷地方に住み、他はテレク州及び、テレク河の支流たるスンシャ河とストラク河の間の沙漠地帯に住んでゐる。彼等がこの地を占據したのは八世紀以來のことで、デルベンドは、當時、高架索におけるアリア人の住地とトルコ人のそれとの境であつた。

一、種族性

クムイク人は、ヴォルガ河の右岸から、ドン河やドニエール河に至る間に展開する草原を

彷徨したトルコ人の子孫だと言はれるが、何れにせよ、ノガイ・クムイク人と呼ばれるクムイク人の一部は、純正ノガイ人の血を直接ひくことは確かである。ノガイ人の一部は、ロシアの壓迫に依り、テレク河の左岸、現クムイク人の住地に退き、そこでカラ・ノガイ人の名で知られてゐる。クムイク族の主要部分は、その昔、北方より現在の地に移り、そこで、幾世紀かのうちに、トルコの分子を周圍に集めたもので、トルコ人のこのグループは、東部後高架索がトルコ化せらるゝまでは、トルコ人とイラン人との境界をなしてゐた。

トルコ族の流れがこの山岳地帯へ南から押寄せたのは、蒙古族の中央アジアより高架索へ侵入した後のことで、その原郷から南北二線に分れて西漸したトルコ族の鎖が此處で再び結合するに至つたのは、全く、その地理的原因に基くものだ。アゼルバイジャン人とクムイク人とは人種的には同系だが、生活様式や風習は全く異なる。蓋し、アゼルバイジャン人は文化的にはイラン系であるが、クムイク人は高架索の山岳民の隣人である關係から、昔から、古代高架索人の生活様式に従つてゐるからである。

二、人口・特徴・生活・宗教・歴史　　千八百九十七年のロシアの調査によれば、クムイク人の数は一萬八十三人であつたが、大戦後、グラランダ教授の調査に依ると、クムイク語を使用する者の数は九萬五千九百十人となつてゐる。

クムイク人は、體格の點では、クラ河やテレク河左岸のトルコ系民族よりも、トルコの痕跡が少なく、また生活様式や風習においても同様だと言はれる。

クムイク人は數世紀來定住生活をなし、主として牧畜・農耕・養蜂・漁業を営んでゐるが、また、手工業者も

あつて、男は手工を、女は金銀刺繍をやる。衣服は近隣のダゲスタン人のそれと餘り違はない。

クムイク人は、凡ての内コーカサス人の如く、スンニー派回教徒で、早くから回教を採用し、中世には異教徒山岳民の間において傳道や文化の傳播に従事し、その隣族の言語や風習に強い影響を與へた。

クムイク人は千五百五十九年にロシアに侵略され、其後、千六百四年に自由を贏得したが、のち千七百二十二年に再びペートル大帝に臣従せしめられた。

二、カラチャイ人

一、住地・言語・特徴

カラチャイ族はカラチャイ・バルカル人とも呼ばれ、エルブルズ山脈の西麓クバ

ン河畔に居住する。

彼等は、高架索人に圍まれてゐる乍ら、今日なほ西暦千三百年頃のトルコ語を保存してゐる。その方言的特徴はカラチャイ人が、北方のクマ河平原から來住したものなることを物語るものだ。

カラチャイ人は、外見上、非トルコ的で、體格は良く、大きな黒い眼をもち、肌色は美しい。彼等は高架索人のうちで、一番美しい種族と云はれてゐる。

二、仕事・風習・人口

カラチャイ人の仕事や風習は、北方及び南方の隣族とは全然異り、その主なる職業は農耕で、一部の者は家内手工により生計をたてゝゐる爲、遊牧當時の好戰的氣風を失つて了つた。彼等は、馬肉を好愛し、麥酒を飲み、又、トルコの迷信をもつ點において、古代トルコ人的な痕跡がみられる。

カラチャイ人の數は、ロシアの調査に依れば、千八百九十七年に二萬七千二百二十二、ヴァムベリに依れ

ば、千八百八十五年に十九萬八千人とあるが、現在約四萬人。グランデ教授の調査に依れば、大戰後、カラチャイ種族の數八萬八千四百三十一人、カラチャイ語を使用するもの八萬八千六百三十人とある。

三、トルクメン人

クマ河の下流に、ロシア人に依り『トルクメン』と呼ばれる、遊牧民がゐる。この種族はトルクメン人の劣化した者であつて、トルクメン人の一分枝なることは、その言語の方言的性質によつても明瞭だ。では一體、彼等は何時ごろ裏海東方の同族から分離したかといふことは明らかでない。がしかし、彼等がなほ、その種族的個性を保持してゐる點から觀れば、さして古いことではないであらう。その人口は、ロシアの調査に依れば、千八百九十七年に二萬四千五百二十二人で、現在では、恐らく、三、四萬人に達してゐるであらう。

四、其の他の小族

後高架索、即ち、クタイ、バツム、チフリス、エリザベトポール、バクター、ダゲスタン、エリヴァン、カルス諸州には、尙、色々なトルコ族の小分派がゐる。その一部分は山岳地方に、他はクラ河畔の平原地帯に住む。一番多い地方はエリザベトポール、バクター、エリヴァンの諸州で、彼等の來住の時期は、千二百年頃セルジュク・トルコ人のアゼルバイジャン侵寇の際であつて、その他の移住は、ずつと遅く、十七、八世紀頃に行はれた。然し、これら種々なトルコ人も、體格の點に於ては大差ない。

また彼等は、一世紀半もロシア治下にあつたに拘らず、その宗教・風俗・慣習も昔と同じく、熱心なシーア派回教徒で、高架索のスンニー派とも仲がよく、また、ロシア人とも餘り反目しない。一夫多妻は稀有で、婦女は

仕事をするのに覆面をしない。彼等は園藝農民として、又、牧人、工人として傑出してゐる。

高架索における此等トルコ・タタール人の總數は、ロシアの調査によれば、千八百九十七年に百八十七萬九千九百八人であつたが、二十年後の千九百十七年には約二百萬人となり、今日では恐らく二百五十萬人位であらう。

(三) クリム・トルコ人

一、住地・人口・特徴

クリミア半島の平原と溪谷は、少くとも七世紀間、アゾフ海の東からドニエール河に至る間に蟠る草原から移住し來つたトルコ人に依つて占められて居たのである。

千七百九十三年にクリム・タタール人の數は十五萬九千二百二十五人であつたが、その中、二十世紀初頭においてオットマン帝國に多く移住したため著しく減少し、約八萬人となつてゐた。然し、グランデ教授に従へば、クリム・タタール人の總數約十八萬人とある。

クリミア半島のトルコ系住民は三つのタイプに分けられる。北部平原のタタール人は本來のトルコ型の體格を保つてゐる。即ち、彼等は中背、強壯、暗黄色の皮膚、突出した頬骨、狭い斜形の眼、幅の廣い鼻孔、大きな耳、黒い頭髪、まばらな口髭をもつてゐる。クリミア山脈の北スローブと溪谷に住むタタール人は、平原のものとは全然異り、その肌色も高架索人に近く、彼等は全體として綺麗な民族だ。沿岸地方のタタール人は、先住のギリシヤ人、ローマン人、そして後には、チルカシヤ人、ポーランド人、ルーマニア人、ゲルマン人、マジヤール人等と半島に移住して來たトルコ人との混血兒である。かゝる雑多な混血の結果として、クリム・トルコ人にはその本來のタ

イブの痕跡さへも見られない位だ。彼等は、丈が高く、強壯で、黄褐色の卵圓形の顔、底光りする眼、光澤のある黒い頭髪、ギリシヤ風又はローマ風の長い鼻をもつ。山岳地方のタタール人の間にも、また沿岸地方のタタール人の間にも、かなり美しい女性が見られる。しかし、早婚と過度の労働のため、早老の傾きがある。

二、名稱・住居・服装・食物

「クリム・タタール」とは、人種的名稱と云ふよりも、寧ろ、政治的名稱であつて、隣族の基督教徒と交渉をもちつゝクリミア半島に入つたトルコ人に對して、ヨーロッパ人の與へた名稱である。元來、半島の名「クリム」はトルコ語である。

クリム・タタール人の家屋は、平原地方では煉瓦造で、山岳地方では石造だ。そして屋上にはテラスがあつて社交用にあてられてゐる。家の内部は臺所・客間・ハレムの三部に分けられ、ドームの様なトツプをもつ七角又は八角のストーヴが据ゑてある。家具は定住トルコ人又はマジヤール人のそれと似て、見たところ、秩序だつて清潔だ。家は石壁で取捲かれた内庭があり、そして其處には家畜が放たれてゐる。畜舎のあることは氣候の關係上極めて稀で、冬でさへ放飼せられてゐる。

クリム・タタール人の服装は、アナトリア・トルコ人のそれと多少異なるだけで、女の服は外見上男の服と同じである。未婚女と既婚女は、ただ前者が帽子を用ゐない點で區別せられる。人妻は冠物を用ゐ、頭髪を眞中から二つに分けてゐるが、少女は、色々の飾りをしたトルコ帽をかぶつてゐる。

クリム・トルコ人の飲食物は北部の近親族のそれよりも、寧ろ、オスマンリ・トルコ人のそれに似てゐる。彼等は少量の肉と多量の野菜を食し、コーヒーは彼等の永年の愛飲料であつて、オスマンリ・トルコ人から傳へら

れたものだ。然し、彼等は酒類を餘り嗜なまず、平原住民は、葡萄を作ることさへ罪惡視してゐる。

三、仕事・風俗・婚姻　クリム・トルコ人の仕事は主として農耕であるが、風土氣候や害蟲の關係で、それは餘り發達してゐない。土地は肥沃だが、灌漑が不十分なため、ツァール治下においてタタール人は困窮してゐた。園藝も彼等からは等閑視せられ、生活の改善よりも、寧ろ、餓死を擇ぶといふほどに怠けものだと言はれてゐる。従つて、畜牛數も概して少く、二千頭以上の羊をもつものは稀で、家畜は、春になると、山上の草地に逐ひやられる。クリミアの牧人生活は洪牙利のマジャール人のそれに似てゐる。

クリム・タタール人の中では、マジャール人の間に於ける如く、チブシーが樂人兼藝人で、その主なる樂器はヴァイオリン、フリユート、ドラム等。その歌ひ方は、オスマンリ・トルコ人の如く、緩慢で、メランコリーだ。彼等の舞踊は、その動きに面白味が少い。回教は女の舞踊を禁じてゐるため、踊るのは男だけで、その舞踊はチユヴァンシェ人のそれや、マジャール人のチャールダーシュ・ダンスに似てゐる。この種ダンスは裏海からドナウ河に至る地域に點在する全トルコ人の間に共通で、その純粹な形は、今、マジャール人の間にのみ保存せられてゐる。クリム・タタール人はチブシーの演ずるメランコリーなメロディに非常な喜びを感じる。

クリム・タタール人は三十歳前に結婚することは稀である。しかし、結婚には必らずカリムが伴ふ。そして、新婦の意思は餘り問題にされず、まれには、カリムも支拂はれず、掠奪結婚さへ行はれることがある。結婚式は他のトルコ人の間における如く、新郎の家で、數日間にわたり行はれ、その際、贈物の授受も行はれる。

四、宗教・歴史

クリム・トルコ人は可なり古くから回教徒であるが、その信仰は深くない。カザン・タ

タール人の中には文盲は極めて稀だが、クリミア全村では、ムラー（回教僧）のほかは、殆んど文盲で、コーランを讀み得る者は少い。そしてムラーも極めて低級で、この點、クリム・タタール人は不幸といはねばならない。三十年ほど前に、バクチサライに印刷所が出來、タタール語新聞が發行せられるなど、宗教復興を促進するところが多かつた。

クリム・タタール人は十三世紀にこの半島に來住し、千四百七十八年にはオットマン帝國の貢納國となり、後、十六・七世紀には獨立の汗國となつたが、彼等は、この半島を爭奪した露土兩帝國のために痛く苦しめられ、千七百七十七年にはロシアに隸屬せしめられ、最後に、千七百八十三年には全クリミア半島はロシアに併合せられた。其後更に、千八百五十四年のクリミア戦争や千八百六十年乃至六十二年及び千八百七十四年のロシアの冷酷なる法令は、遂にクリム・タタール人の大部分をトルコ帝國に逃避、移住せしむるに至つた。

(四) 高架索の民族闘争

一、緒言

由來、高架索は人種展覽會場なりと謂はれて來たほど各種民族の混住して居る地方である。一國または一地方の民族が同質的でなく、異質的な數個の民族より成る場合には、内政關係において民族闘争が旺んじて相互の融和が著しく害はれる許りでなく、その境界外にも同一民族が居住する場合には「解放せられざる同胞」の見解を生じ、そこにイレデンチズム即ち民族奪回運動が起る。一國內居住民族の異質性は輿論の不統一を來し、戦時においては敵をして後方攪亂の機に乗せしむる不利な原因ともなる。これは日露役および世界



第 23 圖 高加索におけるツラン民族の分布

大戦の末期におけるロシア大革命の一面に、宛然、民族闘争の観を呈したることに依つても窺知し得らるゝ處である。

高架索の民族問題はソ聯邦の民族問題の複雑性を其儘表現する縮圖と見ることが出来る。尤も茲にいふ高架索とは主として後高架索を指すのであるが、その主なる民族共和国はジョルジア共和国、アゼルバイジャン共和国、アルメニア共和国、ダゲスタン自治共和国等である。その総人口は凡そ七百萬人で、その中、トルコ・タタール族が二百四十萬人、アルメニア族が百八十萬人、ジョルジア族百七十八萬人、ロシア人九十一萬人、山間地方の小民族十一萬人と稱せられて居る。

複雑性より来るものであつて、更に、列強が各々勝手にこれ等の民族を自己の利益に操縦するからである。

是等全體の四十七パーセントがヨーロッパ系種族で、五十三パーセントがその他の種族である。而して是等民族は各々、民族共和国、自治共和国、自治州、自治區等を形成して居る。何故にこの狭隘なる地域に斯かる多種多様の共和国の成立を見るに至つたかと言へば、それは基本的には高架索の民族的、宗教的、文化的

二、回教徒と基督教徒

後高架索の主なる民族は回教徒のアゼルバイジャン人とダゲスタン人、それに基督教徒のジョルジア人とアルメニア人である。前二者はツラン系トルコ・タタール民族で、後二者は古代高架索の固有民族たる、所謂ジャフエティク系のヨーロッパ民族である關係から、是等二つの民族グループは、文化的にも、宗教的にも、経済的にも、政治的にも、その利害を異にするのである。従つて是等二つの異民族グループの間に、特にアルメニア人とトルコ・タタール人との間に激烈なる争鬪闘争の惹起するのは洵に當然のことである。

一體アルメニア人は、高架索の固有民族たるジャフエティク系とアリオ・ヨーロッパとの混血種族で、固有のアルメニア語を話し、三十八字より成る獨特の文字を最近まで使用してゐた。彼等は曾つて一獨立國家を形成してゐたのであるが、ロシア勢力の侵入と共に崩壊し、その影響下に今日では大分ロシア化されてはゐるが、それでもジョルジア人よりは固有の風習を保存して居る。彼等はその居住地方において政治經濟上勢力ある多數民族の言語を巧みに操り、商業を得意とし、利に敏きこと猶太人、希臘人にも優ると謂はれて居る。アルメニア人は蘇領にあるもの約百五十萬人、その中、後高架索に居住する者約三十萬人と算せらる。彼等はまた、トルコ、イラン、イラク等にも移住し、つねに集團生活をなして居る。隣接諸民族との關係は概して良好でなく、『特殊民』扱ひを受けて居る。しかし同じく高架索の古代民族にして固有の言語と獨特の文化を有する基督教徒のジョルジア人とは比較的友好關係にあるが、回教徒のアゼルバイジャン・タタール人とは非常に仲が悪い。イラン人は彼等アルメニア人を不潔、狡猾なる異教徒として彼等に政治的地位を與へない。またトルコが自國領内のアルメニア人を極端に壓迫したと云ふ歴史は餘りにも有名である。

三、アルメニヤ人 彼等の宗教は基督教でも一種特別なるアルメニヤン・カトリック宗と謂はれて居る。彼等はローマ法王出現前に基督教徒となつたもので、聖書の如きも既に當時アルメニヤ語に翻譯せられて居つた位である。故にアルメニヤは當時小アジアにおける基督教の先覺者と謂はれて居つた。

アルメニヤ人は數世紀に亘り同じ基督教國のロシアに頼つて古代大アルメニヤ王國の復興を企圖し、トルコやイラン領内の舊アルメニヤ地方を回收して國土の擴張をなさんと圖り、極力ロシアとの親交を計つてロシアの使曠に甘んじて來たのであるから、このアルメニヤ人のイレデンチズムは高架索におけるトルコ民族運動、即ちパン・トルキシズムに對しては大なる障害を爲し來つたものである。

高架索の回教徒の大部分はアゼルバイジャン共和國とダゲスタン自治共和國に在るが、彼等は人種民族的に云へばトルコ タター人である。従つてその性質はアルメニア人と正反對である、と同時にまた政治的利益も相反するのである。即ち、高架索のアルメニヤ人がトルコ領内の同族を共にロシアの傘下に集めようとするれば、高架索の回教徒は露領内のトルコ人をトルコ國に糾合しようとするのである。アルメニヤ人が高架索にアルメニヤの勢力を固める爲には、アゼルバイジャンのトルコ人が妨害をなすと考ふる如く、トルコ人はまたトルコの勢力を高架索に擴張する爲にはアルメニヤ人こそ障碍をなすものなりと考へるのである。しかも是等トルコ族は、その祖先發祥の地ツランを夢寐にも忘れることが出来ない。七百年前、蒙古の軍勢に押されて已むなく首領オスマンに從つて西方に移つたのであるが、今もなほ東方裏海を越えてその郷土トルキスタンを憶ふの時、何時の日かその地方の同胞姉妹をも糾合してと考ふる彼らの心情こそ、洵に血縁兄弟民族間における極めて自然的な憧憬と

いふ可きであらう。斯く考ふる時、青年トルコ民族の先づ爲すべきことはトルコとアゼルバイジャンの民族的統一の完成であり、その統一が完成した上でこそ、トルキスタンに對しての實踐的施策も初めて可能であらう。しかもトルコとアゼルバイジャンの間には血と文化と宗教を異にするアルメニヤが介在するのである。

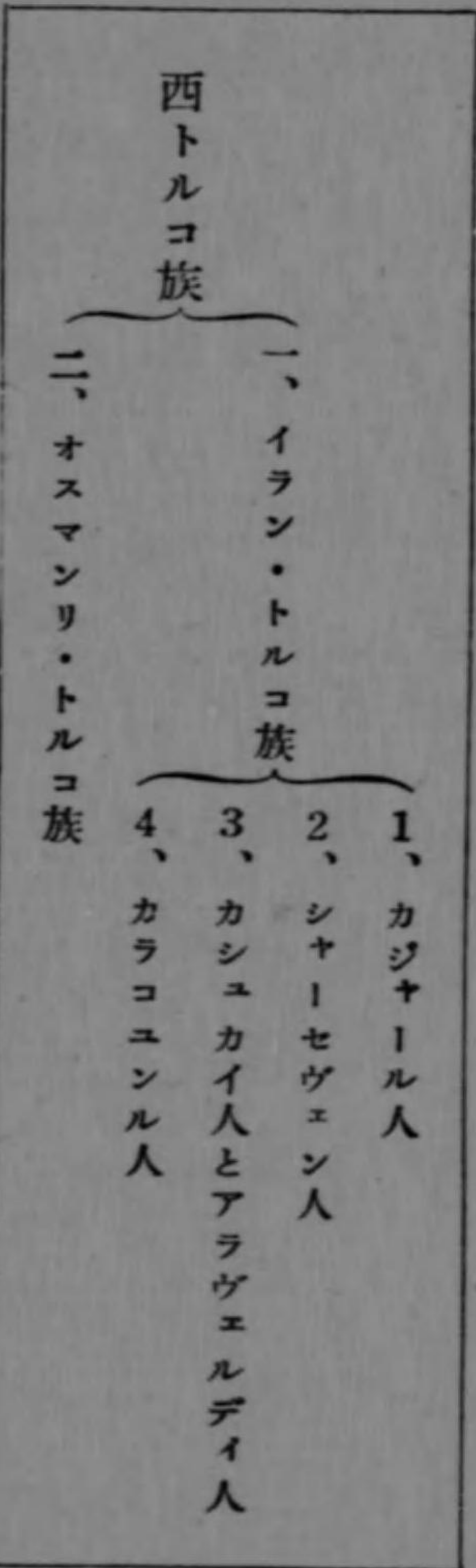
四、汎トルコ主義

これに反しロシア側よりすれば、トルコとアゼルバイジャンの結合は、汎トルコ主義實

踐の第一歩であり、それは取りも直さず露領トルキスタンの一大脅威である。故に、ロシアはアルメニヤ人を保護してトルコとアゼルバイジャンの接近を妨げねばならぬ所以がこゝに伏在する。そして由來ロシアはこの政策を實踐して來たのである。後高架索におけるトルコ民族の獨立運動は、露領内トルコ民族の獨立運動と極めて密接なる關係がある。若し、回教徒たり、トルコ民族であると云ふ觀點に立つて検討すれば、言語・宗教・文化を共通にし、民族的に同一視し得る東トルキスタン（新疆）も西トルキスタン（蘇領中亞）も之に加はる可きであるかも知れない。またこれらトルコ族の大同團結を妨ぐるほどの何等の自然的障害も見出し得ないのである。それにも拘はらず、新興トルコが現在、ソ聯邦と特殊關係にあるのは、その政治的軍事的條件の制約に基くものであつて、現在 トルコとしては或る程度親蘇的態度を執らざるを得ない境遇に置かれて居るのである。が然し、この状態は果して何時まで續くことであらう？……恐らくそれは、ポリシェヴィキの殿堂が崩壞の道を辿り、その礎石が揺らぐ時、東方の郷土を慕つて止まぬ大トルコ主義者達は蹶起し、ありし日の目標、西を捨てて東へ、カスピ海を越えてツランへ！ ツランへ！ と驍進するのではなからうか。

第七節 イラン・トルコ族

一、緒言
イラン・トルコ族とは西トルコ族のうちイラン領居住のトルコ族のことで、また西トルコ族とは、トルコ族の西アジア地方、即ち、イラン帝國およびトルコ共和國內に分布するトルコ族の總稱なのである。



る。彼等、西トルコ族はトルコ族がその原郷アルタイからトルキスタン曠原を横断して西進したトルコ族の一分派であつて、それはイラン・トルコ族とオスマンリ・トルコ族との

二大別にされ、前者は更に別表の如く、カジャール人、シャーセヴェン人、カシユカイ人、アラヴェルディ人、カラコユンル人等に分たるとが、茲には、そのイラン・トルコ族に就いて述べよう。

二、住地
元來、廣義のイラン・トルコ族は、ソヴェート領後高架索に住むアゼルバイジャン・トルコ族をも包含するのであるが、茲には、イラン領トルコ族に就いてのみ述べる。

イラン・トルコ族の分布地域は次の通りである。

1、イラン領アゼルバイジャン地方——ソ領アゼルバイジャンの南方、アラクセス及びクルヂスタンの境界からケルマンシャに向つてウルミアを過ぐる地方に於いては、後高架索の同族と接觸し、而して、イランに



第24圖 イラン・トルコ族の分布

於けるトルコ分子の主要な所在地を形成してゐる。

- 2、カムセ地方——アゼルバイジャンとテヘランの中間地域、特に、ゼンジャンの近傍。
 - 3、テヘラン地方——首都に接するダマヴエンド渓谷地方。
 - 4、ケルマン地方——ファルスに接する地方。
 - 5、イラク地方——ハマダン地方。
 - 6、ファルス地方——イスファハンと海岸に接する地方。
 - 7、ホルサン——多くは、北方のニスハプールとクチャンの近傍。
- 三、種族性
種族的および言語的にイラン・トルコ族は、その住む地方により、多少の

相異を見せてはゐるものゝ、その大部分は、セルジュク治下においてアラル海の北から南下して来たトルコ人の子孫である。彼等がツラン平原に住むトルクメン族に近いことは、次ぎの諸事實によつても明瞭である。即ち、ゴジャ・アリ及びカラバグ地方のベグチリ、ケルマン地方のカラ・ニシプール等の名前は、後高架索のケンゲールの如く、ソ領トルキスタンのトルクメン人において同様な名前を見出すのである。その他の種族名においても、トルクメン人の間では既に消滅してゐるけれども、確かに、トルクメン系のものである。例へば、アヴシヤールと云ふ種族名のごとき。アヴシヤールは多くウルミアに近く住み、シール派回教徒である。カジャール族も曾つてはアストラバッド附近の平原に住んでゐたが、今は、イラン國內の諸所に散在してゐる。イランの前シヤールたるカジャール王朝は、この種族の出身である。また、ファルス地方のカシユカイ族は、伊兒汗時代にイラン國の南部に移住したものと知られてゐる。斯くして、イラン國居住のトルコ族は、トルクメン族とオスマンリ・トルコ族との中間的連鎖をなすものである。

右の各種族は、カジャール王朝時代にはシヤールから任命せられた族長をもち、そして、その氏族は固く結合し、一定の地に集團生活をしてゐたのであるから、その祖先も明かであつたが、今では、たゞ大族のみが辛うじてその祖先を知り得るに過ぎない。そして小族にいたつては、全然、氏族の祖を知ることが出来ないほどに分散してつた。その昔、幾多の部族をつくつてゐた諸種族は、今や、歴史の嵐に凌はれ、東はアフガニスタンのパロパミス山脈から西はクルヂスタン山脈にいたる、北は高架索山脈から南はイラン灣にいたる廣大なる地域に散布してつたのである。それ故、同一種族から分れた小族の分派を、今では、高架索、ホラサン、ハマダン、ケ

ルマン……等の諸地方に見出すことが出来る。然し、その中で、餘り散在せず、而も、部分的には古風を守つてゐるものは、次ぎの四族だけである。

(一) カジャール族

この種族の頭は、イランの前シヤール王朝を構成してゐた。彼等は、曾つては、シリア國境地方に住んでゐたが、千四百年頃、帖木兒により、トルキスタンに於ける彼等の舊住地に移住すべく強制せられ、その途次、アゼルバイジャンや、イラクに残留したものである。その中の若干は、シヤール アッバス大王（一五八八—一六二八年）の時代まで、後高架索に住んでゐたが、アッバス大王は、彼等の勢力をそぐため、強制的に、アストラバッドの北方とクチャン地方に移住せしめたものである。

(二) シヤールセヴェン族

この名は種族的のものでなく、『シヤールの支持者』の意味で、イラン領アゼルバイジャンと高架索地方の雑多なトルコ分子に對する、比較的新しい民族集團の名前である。現在彼等は、夏になると、アルデビルに近いサヴェラン山の傾斜面に住み、冬には、もつと北のモガン平原に移住する。此の他に、この種族の一部はクム、テヘラン、カズヴィン、ゼンジャンの間のベルシヤ國境の内部にも見出される。彼等は、半遊牧、又は、全くの遊牧民として存在するイランに於けるトルコ分子を形成するものである。

(三) カシユカイ族とアラヴェルディ族

ファルス地方にゐる此等の南部種族は、少數を除く外、すべて遊牧民である。カシユカイと言ふ名はトルクメンの種族名にもある。

(四) カラコユンル族

この種族はコイの附近に居住し、帖木兒チムールに荒されたトルクメン人の子孫である。

一、人口 イラン・トルコ族の全人口は大凡二百萬人で、イラン全人口の約五分の一と言はれてゐる。

二、特徴 イラン・トルコ族は、數世紀間つゞいた奴隷移入の結果として發生した、雑多なアリア族(コーカシア人、クルド人、アルメニア人、ベルシャ人等)との混血兒である。特別なトルコの體型は、彼等の間に見出されないが、然し、顯著な混血體型(そのうちには、トルコの痕跡が明らかに残されてゐる)は、アゼルバイジャン人がシラズのベルシャ人と隣接する様になるや、特に顯著となつた。細心な觀察者に依れば、ベルシャ人に比してイラン・トルコ族は、餘り卵圓でない頭蓋骨、幅の廣い無表情な顔面、さして弧形でない眉、うすい眼瞼、短かくて幅の廣い鼻、廣い頬骨と顎、厚い唇、そして丈が高く、どつしりして筋骨逞しい容姿をもつてゐるといふ。他の著者の記述もほとんど似てゐるが、この記述に同意する洪牙利のヴァムペーリは、更に附け加へて曰く、

『イランの全北境に沿ふてゆくと、アゼルバイジャンとホラサンのトルコ人は、南部カシユカイ人よりも、トルコ民族的體型の痕跡を多く有つてゐる……』と言つてゐる。

イラン・トルコ族は、八世紀以上もその同族から離れて古代ベルシャ文化のうちに生活し、回教シーア派の強い宗教的影響を受けたのであるから、風習上にも大きな變化のなされたことは當然のことである。然し、南ベルシャ人に比較するときは、その本来のトルコの不器用と淡泊さが明瞭となる。この差異は、ベルシャ文化の直接的な影響を受けないタブリス、テヘラン、ハマダン等の都會人の間にも觀られるが、他方、村落のものは、明らかにトルコの民族性格の痕跡を多分に示し、その風習の二三のものは、明瞭に、平原地方のトルクメン人を支配するものと同じのものである。

この類似は、例へば、祝福の祈り、誕生や結婚の式典、接客法等々の如き家庭生活の慣習にもみられる。又トルコ人は、一般に、イラン人よりも信頼し得るものである。そしてイラン人に比して、トルコ人は男らしきにも富んでゐる。これ等のことは、ベルシャに於ける數世紀間の武人的地位にも因るもので、チャーの軍隊は殆んど全部、トルコ人から成つてゐたのは事實である。

遊牧民の間では、トルクメン人との類似點が特に多い。地方的事實と社會的壓迫にも拘らず、彼らが定住生活から今なほ離れてゐることは、この民族のトルコ的特徴を示すのに十分である。族長のみはベルシャ文化に染められ、大衆はただ外形のみこの文化に従つてゐるが、そのものの考へ方や風習は、全く、平原地方の同族と異なることはないのである。戦争と騎馬が彼等の生活の理想である。その生活の單調を癒すものは、馬と武器だけなの

だ。サーチ、ハフィズや、其他のベルシャの有名な詩人の花のやうに美しい言葉は、彼等の口に愛誦せられる。しかしその胸奥には、常に、昔のトルコ人的な幻を追ひ、古い傳統的風習に對するトルコ人の強い執着は、多少異色のある民族的現象である。

斯く、トルコ・イラン兩民族は、共通の信仰と政治的利害とに結ばれつゝも、なほも對立的である。即ち、イラン（ベルシャ）人は、今も尙、トルコ人のうちに、『シャーナメ』に書かれた如き蠻風をみいだすのであるが、他方、トルコ人は、ベルシャ人を臆病者だと考へてゐる。

三、生活様式 生活様式には、定住、遊牧（又は半遊牧）の二型がある。アゼルバイジャン、カムセ、テヘラン、イラク及び部分的にはホラサンのトルコ人は定住者であり、そして都市及び村落に住み、商工農をいとなんでゐる。然し、遊牧民は、隣族の影響をうけて次第に減少しつゝあることは事實だ。イランの北西部の住民は全部トルコ人で、アゼルバイジャン地方とカムセ地方では、都市にあつてもトルコ人が多く、そこにはイラン・トルコの混血兒さへ多い。生活を定住様式に變へたのは、カジャール王朝の支配の始まつた頃からで、當時、官吏、軍人は定住を強ひられ、終ひには、劍を鋤に代へたのであつた。

中央アジアに於ける遊牧民の意味を、そのまゝ、イランのトルコ系遊牧民に適用することは難しい。と、言ふのは、第一に、彼等は牧野を充分にもたず、従つて、その家畜數も少いからである。で、彼等は主として、羊や少數の駱駝と馬を飼つてゐる。羊は、中央アジアの肥畜種とアナトリアのものとの中間種で、その馬は平原種とアラブ種との交配種であるが、速力も持久力も乏しい。シャーセヴェン族、カジャール族、アヴシャル族等はよい馬をもつてゐる。

馬をもつてゐる。

イランのトルコ系遊牧民を觀たものは、直ちに、彼等の困窮な生活様式に氣がつくであらう。即ち、彼等は、馬毛織の長い低いテントに住み、そのテントはヨーロッパ人から、『ジブシー・テント』と呼ばれてゐるものである。その内部も雜然としてゐて、この民族が放浪性の遊牧民の化身に他ならぬことを明らかに示すのである。そのうちで、美しい風習は、古い氏族制と年長者（イル・カン）への絶對的服従である。凡ての成年男子は年長者の命により武器を執る。それで、カシュカイの『イル・カン』たちは、今日でも、イラン政府から怖れられてゐる。國權恢復に専念してゐる現皇帝レザ・シャーは、英國の手先であると云ふ名目の下に、先年この種族の討伐を行ひ、全國の行政組織を統一した。シャーの勢力のあるイランの北部地方に於てもトルコ族の勢力は可なり大きい。然し、イラン及び高架索に於けるトルコ遊牧民の長老制は、最近、その統治力により多少改廢せしめられた。

四、言語 その言語的特徴の點で、アゼルバイジャンのトルコ語は、アナトリアのオスマンリ・トルコ方言に深い關係がある。十二、三世紀には、この二方言の間に何の差異もなかつたのであるが、それは、當時廣義のイラン・トルコ人とオスマンリ・トルコ人とは同一の民族で、今日のトルクメン人に近かつたからである。古い言語的資料の比較は、この結論を確固ならしめてゐる。セルジュク・トルコ族の十三世紀頃の詩や、十五世紀後半にゐる史家のネシュリの用語は、今日のアゼルバイジャン・トルコ語に比較して、その古代的遺風が、文法と語彙の上から、今日のイラン・トルコの方言に甚だ近いことを示すものだと言はれてゐる。時のたつに従ひ、オスマンリ方言は、特別の文化的影響に因り、一層日用語から離れてしまつたが、しかし一方、アゼルバイジャン

ン・トルコ方言は無變化のまゝ、残されたのである。イラン・トルコ人は、トルクメン人よりも、容易に、オスマンリ・トルコ語を理解するのはこの理由によるのである。

五、文學

イラン文學の強い影響に因り、イラン・トルコ族の間では、本來のトルコ文學の發達するチャンスには恵まれなかつた。第一には、トルコ文人がイランでは少く、大部分、イラン語を用ゐてゐたことに因る。少數のトルコ語の詩もあつたが、それは、普通、中央アジア文化の捺印をうけてゐるか、アナトリア・トルコ人の歌謡に類似するものであつた。十八、九世紀の後高架索のトルコ詩人の作品は、既に蒐集せられ、公刊せられてゐる。さらに、英雄詩や、ツラン英雄主義の代表ともみられ、また、トルコ精神の原形である國民的英雄ケログルを歌つた史詩も蒐められてゐる。この英雄古譚は、西トルコ人に依りその平原の故郷より齎らされたものであることは疑ひない。ケログルの史詩は、ウズベク人、ヒヅアのトルクメン人、アラル海邊のカザフ人の間より、カスピ海の北東、及びシリアの西にゐるトルコ人の間にまでも知られてゐる。この史詩は言語的價値は少いが、トルコ人の國民的性格を代表する點で重要である。二、三の結婚歌、譬話、諺等々を除いては、凡て、トルクメン又は他の中央アジア系のものばかりだ。ペルシャの影響は何處にも見られず、イラン・トルコ人の物の考へ方や風習にも反對してゐる。これは、四百年來の回教シーア派教徒とスンニー派教徒との争ひにも拘らず、イラン・トルコ人は、オスマンリ・トルコ人によりも、寧ろ、中央アジアの同族に接近してゐたことを示すものである。

六、歴史

トルコ人のイラン來住の時期に就いては明言出来ない。が、然し、アヴェスタにより、我々

は、ツラン人即ちトルコ人が、イランの北方國境に居り、イランの人々と西紀前に戦つたことや、イランの北方たるホラサン、カスピ海の南岸および後高架索地方が、昔から、トルコ人の侵略に苦しんでゐたこと等を、歴史上知るのである。然し、今日のイラン・トルコ人は、大部分十一世紀から十三紀にかけ、即ち、セルジユク・トルコ人やモンゴール人の全盛時代に、イラン(波斯)を襲ふたトルコ人の子孫であることは確かである。

第八節 オスマンリ・トルコ族

一、緒言

西部トルコ族は他の同族よりも早くその原郷アルタイを離れ、トルキスタン平原を横断して西漸し、イラン高原から小アジア地方に分布するに至つたもので、その中イラン地方に分布するイラン・トルコ族については既に前節において述べたから、こゝには、トルコ共和國、主として、小アジア地方に分布する最も重要なオスマンリ・トルコ族について述べよう。

オスマンリ・トルコ族は、その言語及び風俗の點では他のトルコ族とさほど變りはないのであるが、歴史上において、彼等は他のものよりも重要な役割を演じてゐる。全トルコ族のうちで、最初にヨーロッパ人に知られたものはオスマンリ・トルコ族であつた。元來、彼等はマルモラ海の南と南東の山岳地方に住んでゐた種族で、その名のオスマンリは、そのリーダーたるトルコ帝國の創建者オスマン一世の名に起因する。今日彼等は、ヨーロッパではバルカン半島の南東隅、アジアではアナトリア、アルメニア、北シリア地方に分布してゐる。

二、人口

確實な數字をもつて小アジアの遊牧及び半遊牧トルコ人を示すことは困難であるが、ヴァム

ペーリは約五十年前純遊牧民のユリェックを大凡三十萬人と見積つた。もしこの數字が正しいとするならば、凡ての此等の遊牧民の數は現在七、八十萬人を越すことはなく、トルコ共和國全人口の五、六パーセント位であらう。トルコ共和國の總人口は約一千四百萬人で、その中トルコ人約一千二百萬人、クルド人約百二十萬人、アラビヤ人約十五萬人、希臘人約十二萬人、チルカシヤ人約十萬人、猶太人約七萬人、アルメニヤ人約七萬人、アルベニア人約二萬五千人、タタール人約一萬二千人といはれる。このうちで約七十萬のトルコ人はヨーロッパ・トルコに住し、其他はすべて小アジアに居住する。過去におけるトルコ人の侵略の目的は移住ではなく、單に回教の宣布にあつたので、ヨーロッパにおける殘留トルコ人の數はさほど大きなものではなく、バルカン半島全體で八十萬人位であらう。それに、ツラン的・東洋的トルコ人は決してヨーロッパを好まず、寧ろ、アジアを愛してゐたからである。

三、名稱

オスマンリ・トルコ人といふ名は人種的のものではなく、むしろ、系圖的のものである。この名はセルジュクや其他のトルコ人に對して、オスマン族とその子孫を意味するものである。オットマンはオスマン又はオスマンリの單なる變形で、恰もトルコマンが、トルクメンの正しい形であるのと同じだ。十三世紀頃にはトルコ人の住む小アジアの地はトルコメニアと呼ばれてゐた。マルコ・ポーロもこの名でコニア・カイサリ・シヴァス等の地方を記載してゐる。同様に中世の旅行者達はトルコ人の集合名として『トルクメン』を用ゐ、他方その個々のものを『チュルク』と呼び、そしてオスマンリの名は、回教トルコ帝國の政治的單位を示すものとして用ゐられて來た。

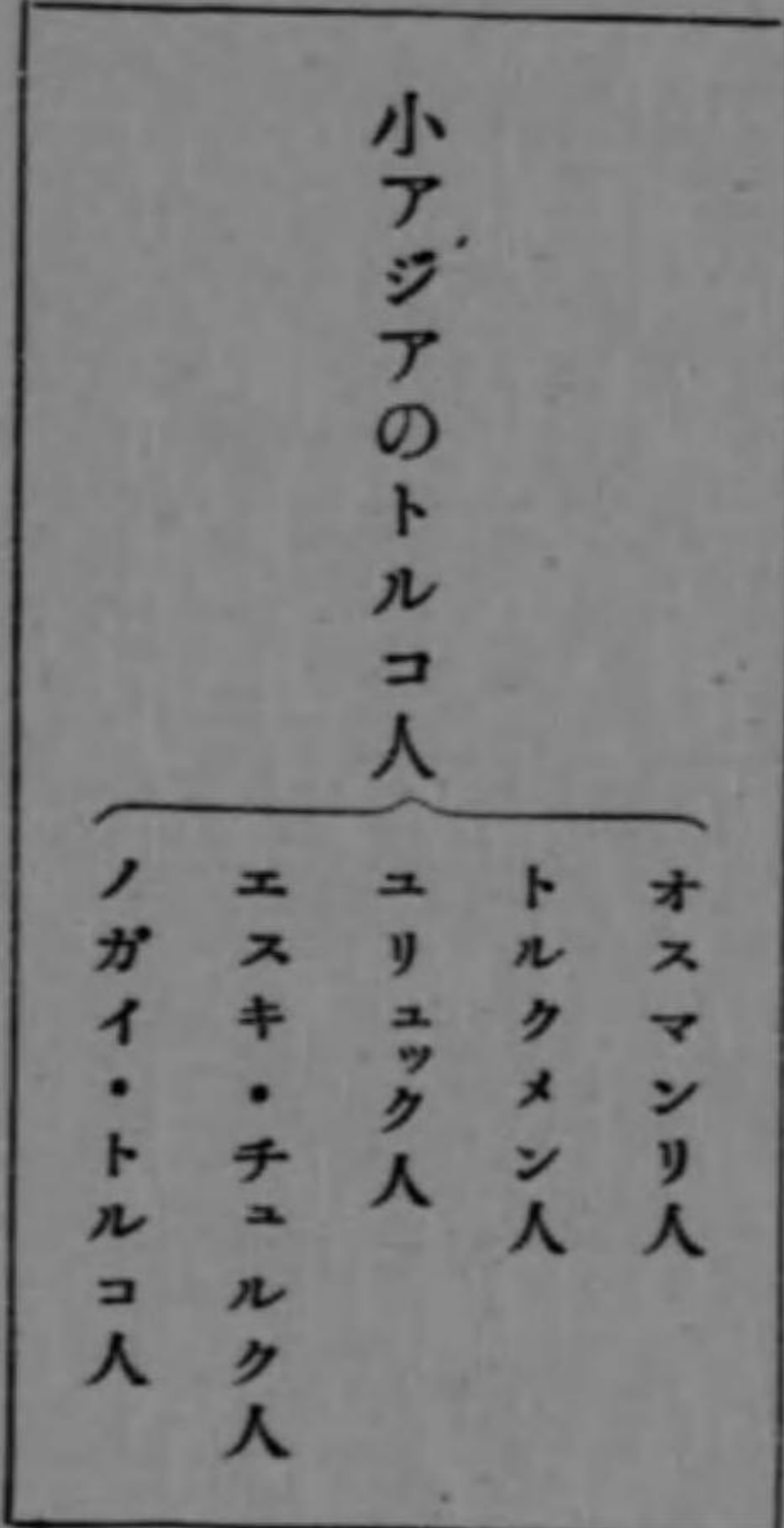
四、種族性

人類學者に依れば、今日のオスマンリ・トルコ族には純粹トルコ人の血は薄く、その體格もトルコの痕跡は少いと謂ふ。従つて、その民族性も政治的のみトルコ的だといはれる。そして人類學的には、アリア及びセムや、ギリシャ、スラヴ、クルド、ペルシャ、アルメニヤ、ゲオルギヤ、チルカシヤ、アラブ、アビシニヤ、スーダン人等の雜然たる混血を代表するものだ。従つて、そのツラン性は稀薄で、却つてアリア又はセム體型のはびこつてゐる地方もある。アルメニヤのカルラチア地方に住むオスマンリ・トルコ人の體格は、クルヂシユ盆地にみられるアリア體型を顯著に示すものである。オスマンリ・トルコ人の大部分がギリシャ的體型を示すのはアナトリアに於てだけである。この地方では移住トルコ人がギリシャ人に吸収せられ、獨特のギリシャ・トルコ體型を形成してゐるが、然し、ギリシャ的分子が優勢である。ヨーロッパ・トルコでは、イスタンブール自身でさへ、トルコ人と接觸する諸種族との混血を示し、回教オスマンリたることはケマル・トルコの復興前においても、たゞその服装・帽子・口髭・靴などの特異で解る位であつた。それ故彼等は、その外觀を代へることだけで、ボスフォルス地方のオスマンリ・トルコ人も、ギリシャ人や南歐人にすぐ化け得られるのである。同様のことはヨーロッパ・トルコ人についても言ふことができる。彼等は一般に性鈍重ではあるが、忠實にして勤勞を好み、沈着にして勇敢であるから、その團結の力は鞏固であると言はれる。

五、遊牧民

トルコ共和國にゐるトルコ人は、單にオスマンリ・トルコ人だけではなく、アルメニヤのマシケルトの戦ひで東ローマ皇帝ロマヌス四世がセルジュク・トルコのサルタンのアルプ・アルスランに破られた(一〇七一年)後、トルクメン人や他のトルコ系民族が多く小アジアに流れ込んだ。その中の若干は今もなほ遊

牧又は半遊牧的生活をつゞけてゐる。そして彼等は、オスマンリ・トルコ人よりも混血の度は低く、アジア的體型を一層よく保持してゐる。彼等は今日ユリユック人とか、トルクメン人として知られ、小アジアの西部及び南部、主として、アイダン、マラシュ、チアルベクルの諸地方を彷徨してゐる。ユリユック人はスミルナの附近より東タウルス地方に小群をなして擴がつてゐるが、曾つては剽悍なる掠奪遊牧民として、小アジアの全南西部を脅かしたものだ。『ユリユック』とは『遊牧民』の義で、定住トルコ人のあたへた名である。彼等は『チュルク』又は『チュルクメン』と自稱してゐる。ユリユックはアナトリアにゐる全種族のうち、最も遊牧的のもので、古代中央アジアの遊牧的風習をそのまま保存してゐる。彼等は夏と冬の狩獵に際し、可なり遠くまでも出掛けてゆく。土帝アブヅル・ハミドはユリユック人を定住せしめんと試みたが、あまり効果を擧げ得なかつた。



つた。

ユリユック人の體格及び言語は、オスマンリ・トルコ人のそれよりも、むしろ、後高架索のアゼルバイジャン・トルコ人に似てゐる。彼等は、オスマンリ・トルコ人がアラビア語又はベルシヤ語の借用語と置き代へたり、或ひはヨーロッパ化したりしない以前の古いトルコ語を用ゐてゐる。彼等は他の遊牧民と同様、多くの民族・部族に分かれ、その族名にもトルクメン人と同じものが多い。例へば、その族名の一としてのカジャール(イラン前王朝の名)の如き。これによつてみても、北ベルシヤの平原住民と小アジアの遊牧民との密接なる關係が知られ、且



第 25 圖 オスマンリ・トルコ族の分布

つ、そのトルコ系たることも看取せられるのである。十五世紀以降、ユリユック人はトルコ遊牧民と結合して移住的慣習をつゞけてゐたため、その種族性や言語は、小アジアの定住同族よりも純正を保つてゐる。宗教はその固有のものを失ひ、單に名だけの回教徒である。そのテンの様式はイラン・トルコ人のものとは異り、むしろ、中央アジア的のものであることは注目し値する。その詩も西トルコ人の詩によりも、むしろ、東トルコ人のそれに近い。さらに結婚の風習もアゼルバイジャン・トルコ人のそれと同じく、家畜は主として駱駝を飼つてゐる。トルクメン族はアナトリアの全面にひろがつてゐるがその主なる居住地は、中央部とタウルス山脈中の大鹽水湖附近の平原である。記録によると、彼等はすでに十二世紀頃この地方で遊牧生活をしてゐたと言はれる。彼等は背が高く、極めて強壯な種族で、體格はアジア的だ。その仕事は、村落や都市の定住トルコ人によりも、むしろ

ろ、ヨーロッパ人に似てゐる。

キジル・バシユ・トルコ人は、アンゴラ、トカト、カラヒッサル等、小アジアの北東部に住んでゐる。彼等はユリユックでも又トルクメンでもなく、その大部分はアゼルバイジャンや後高架索のイラン・トルコ人の子孫であつて、附近の定住トルコ人とは體格および風習の點で異り、冬は小屋ですごし、農耕をいとむ半遊牧民である。彼等は『エスキ・チュルク』と自稱してゐる。その婦女は不自由な境涯に置かれ、その宗教は偶像教的で、回教シーア派と異教との結合をみせてゐる。

半遊牧または全遊牧的トルコ人の他の小部分のものは、アンチ・タウルス山脈のアヴシャル地方に住んでゐるが、彼等はイランのホラサン地方から渡來したものである。

その他に、アダナの附近に會つてノガイ・トルコ人が二萬家族ほどゐたが、千八百八十五年には已に二千人に減少してゐた。このノガイ・トルコ人の断片はクリミヤ戦争後、ロシアから小アジアに移住して來たものである。

六、言語

オスマンリ・トルコ族が小アジアに移つてきた時、彼等は中央アジアの天山山脈からウラル山脈地方で話されてゐたトルコ語と殆んど同じトルコ語の方言を用ゐてゐた。このことは初期のオスマン史家の取扱つたトルコ人の名前や、史詩クダトク・ピリク（一〇七〇年）や、ガズネヴィド編年史に散見する固有名詞等によつても明らかだ。しかし、回教は、トルコ族のうちで特にオスマンリ・トルコ族に對してその言語文學に大きな影響をあたへたので、十五、六世紀頃においてその文學語には、多くのベルシヤ語やアラビヤ語が交り、このベルシヤ・アラブ的影響は、トルコにおいて汎ツラン運動の擡頭した青年トルコ黨の盛んな時代から、トルコ共

和國の初期にまで及んだのである。ケマル・アタ・トゥルクは千九百二十八年十二月アラビヤ文字を廢止してローマ字を採用し、更に千九百三十二年にはトルコ國語改革委員會を組織して外來語を排除し、所謂トルコ語なる國民的言語の創造運動を起し、着々それを實行しつゝある。しかし部分的にしろ、今日トルコ固有の精神を多少とも保存してゐるものはアナトリアの民謡だけで、その俚諺や譬喩は、トルクメン人やウズベク人のそれと似た形式をもつてゐる。やゝトルコ精神の残つてゐるのは『シャルキ』（愛の歌）であるが、これでさへ、アラビヤやベルシヤのモデルに従つた點が多いのみならず、シャルキの音楽でさへ、純ベルシヤ的のものだと言はれる。古代トルコのメロディは今日たゞ、ユリユック人の間にだけ見出されるのである。

小アジアの定住トルコ人の方言は北・西・南の三つに分けられるが、その差は大したことはない。その言語學的分類に従へば、北および西の方言を話すものは強いギリシヤ的影響をうけ、南の方言を用ゐるものは中央アジアのトルコ族に近いことを示すのである。その語彙は、文語及び官府語におけるよりも、ベルシヤ語やアラビヤ語の影響が少ない。是等の方言の詳しい研究は小アジアの現住民と中央アジアの現住民との關係を一層明らかにするものである。

七、文明

數世紀に亘るトルコの回教文化は、小アジアの風土とギリシヤの知的影響により可なり改變せられ、所謂オスマン文明なるものを生んだ。回教とキリスト教との深刻なる對立にも係はらず、回教はビザンチン文化の影響を相當深くうけた。トルコ人の社會が遊牧的鬭争生活を基本としてゐる間はベルシヤ・トルコの世界觀の指導者がつゞいたが、然し、トルコ人がヨーロッパに進出して、彼らの間にギリシヤ・キリスト教への

歸依者が現はれた時、アジア的回教文明は次第に改變せられ、かくして建築様式はイラン中亞風よりビザンチン風に變つて來た。即ち、セリム一世（一四六五—一五二二年）は顔を剃り、短いジャケツを用ゐる始めた。一般大衆の慣習も漸次ギリシャ・ビザンチン風に化せられて來た。トルコ風の食物や服装がギリシャ風に改變せられたのは、アナトリアの氣候との關係から生じたものであつたと思ふ。

八、社會史

トルコ人の社會史には三つの隆盛期がみられる。その一は、シリアの侵略によりオットマン帝國が鞏固化せられ、ベルシャの色彩が強くなつた時代である。この時代において日常生活と文學はベルシャの強い影響をうけた。その一としてはベルシャ語の侵入である。第二は所謂アラビア時代である。この時代に、アラビア系住民をオスマン・トルコが征服してゐたので、アラビアの影響はオスマンの言語と社會生活に深く染込んだ。即ち、オスマン・トルコ社會は全く回教的となり、俗語でさへアラビヤ語で言はれるにいたつた。第三はオスマン・トルコ族がヨーロッパに根ざした時代で、その住民のうちには、多くのギリシャの血が流れ込み、それにビザンチンの知性も加はり、諸種の制度も回教アジアに反するものとなつたが、他方、これに依り回教トルコ帝國は強大となり、アラビア、ベルシャ、インド、アフガニスタン、中央アジア等の回教徒はオスマン・トルコをもつて彼ら同宗徒の指導者と視るにいたつたのである。

九、古代トルコの風習の遺物

十三世紀中葉以來、モザイク文明の中心であつたコンスタンチノーブルに於て東西文明の融合が行はれたが、それと同時に、多くのアジア的トルコの風習は消え失せてしまつた。ベルシャ文化の採用は、十六世紀以前においてオスマン人をしてトルコ族自身を卑下せしめ、トルコ人、即ち野蠻人

と思はせるに至つた。また回教は常に國民性の脱化を計つたが、然し、オスマンリ・トルコ人の間では大いした成果を收めたとは云へない。といふのは、彼等がその原郷から齎らした古き風習は未だに残つてゐるからである。例へば、アナトリアの内部、特に、トカト、シヴァス、エンギュリュ地方のトルコ人は、子供が生れると、キルギーズ人のやうに鹽をまき、油をぬる。結婚式もキルギーズ人と同様で、カリムも他のトルコ族の如く一般物的ものである。更に又、外貌は全くギリシャ化したオスマン・トルコ人が、今尙、カラマンの溪谷において牧野をもち、昔のまゝの羊飼ひをしてゐるのである。

一〇、特徴

オスマン族をトルコ人として特徴づけるものは、主として、その道德性である。それは強い回教の影響にも係はらず、純トルコの基礎を示すものである。その容姿や體格はギリシャ、アルメニア、チルカシヤに似て、眞實のトルコ人とは思はれないほどだが、その重々しい堂々たる風采、眞面目さ等々は、草原でテントに住む同族に似てゐる。アナトリアの農夫は正直で、勤勉で、その君主と信仰に對して忠實である。家庭生活も圓滿で、やはらかに、反面、戰場では強い戦士となる。異人種との混血も是らの良い性質を失はしめ得なかつた。アッチラや成吉思汗や帖木兒の如き嵐がアジアから吹き寄せても、そこに毅然としてトルコ人は六百年もつゞいた國家を堅持し來つたのであつた。オスマン・トルコが斯くも永い間持續し得た原因として種々擧げられようが、その一は、オスマン・トルコ族が他の同族よりも一層西に進み、ある程度西歐文化を採用したからである。そして、如何にしてこのトルコ人が永い間、異民族の上に君臨し得たかの原因は、恐らく、アラビア人と

の混血、回教と基督教との或る程度の文化的融合の結果ではあるまいか。オスマン族はその原住地から勇氣・質

素・長老精神を齎し、それに回教文明をつけ加へた。そしてオスマン族が世界史にあらはれた時、多くのギリシヤ・スラヴ的要素の吸収により、想像以上に西洋文明に近づいてゐたのであつた。それで、その支配階級ですら漸次にその古代トルコの民族性を失つてゆくのであつた。オスマン族は西洋化によりこの事實を得た。そしてそれに、回教の統一力も加はり、君主と信仰への従順も強化せられ、大なる謀叛も起らず、スルタンは永くその權力を把握し得たのであつた。然るに、世界情勢の進展と共に、隷屬國においても、オスマン國自身においても腐敗と窮乏さが次第に蔓延して來た。とはいへ、オスマン族は、その同族と摩擦しつゝも、なほトルコ同族の結合を計つてはゐたが、遺憾乍ら、彼等には確たる政見もなく、且つ、回教は彼等をして漸次、國民性を脱化せしめ、それとともに東方の同族を忘れさせるに至つた。そして遂に、西方に於けるトルコ族の前哨は、その故國トルキスタンより切り離されて了つたのである。

一一、歴史

政治史的にみてオスマン族の出發點は、その氏族の始祖エル・トグラウル、むしろ、その子オスマン（一三二六年歿）が建國した時代とせられてゐるが、しかし我々は更にそれより二百年前にさかのぼり、トルコ人がセルジュクの名に於てアルメニア、アナトリア及び北シリアに多數渡來した時代に歸るべきであらう。イランの著者ミルチョンドは、カザール平原すなはちカスピ海の北東をトルコ人發祥の地となし、ボハラの北のエンド近傍をサマランドに對抗するセルジュク侵略の出發點となしてゐる。西紀初代において東方の學者達は、セルジュクをトルコ人と同一視し、西漸したオグズとなしてゐる。此等の記事は、セルジュクとその子孫が現在のトルクメン人と血族であつて、十一世紀前まではカスピ海の北よりヴォルガ河にいたる平野を占めてゐ

たことを物語るものである。

オスマンの相續者は極めて迅速に小アジアの西北部からヨーロッパの東南部を併呑した。そして當時トルコ勢力の境界はタウルス山脈であつた。オスマン族のスルタンはシリア及びエチプトをセリム二世治下において征服し、その領土を擴張した。

ギリシヤ系都市のトルコ化を研究してみると、トルコ語がアナトリアに非常に早く滲み込んだことが解る。ビザンチンの諸帝が對トルコ戦争を開始する二百年も前、すでにトルコ化は始まつて居た。當時のトルコ化運動は主として、ギリシヤ人とアルメニヤ人に對してであつて、南方のセム族や、東方のクルド族、北方のコーカシヤ族に對しては左程ではなかつた。千三百三十四年ごろには、小アジア西部のフィラデルフィアだけが尙ギリシヤ性を多少残して居た。トルコ族のうちで最も力強くトルコ化政策を實行したものはオスマンであつた。といふのは、セルジュク族はむしろ政治的進出について考へたが、住民のトルコ化については顧慮しなかつたからである。トルコ人の小アジアへの流入は、先づ沿岸地方へ、次いで、小アジアの内部及びバルカン南部に於てギリシヤ人を驅逐したので、アナトリアは住民不足となり、回教トルコ人により補充しなければならなかつた。それ故、十四世紀末にアナトリアは、今日よりもトルコ化してゐたとも言ひ得られる。

一二、トルコ族の未來

千九百十七年の帝政ロシアの崩潰までは、オットマン帝國外のトルコ族の三分の二はその政治的獨立を有せず、回教文化を保持しながら、ツァールに左右せられつゝ次第にロシア化せられ、その文明の餌食となつて居た。然し、オットマン帝國は絶えずアジア回教文明を擁護し、西洋文明の羈絆から脱却

せしめんことを努めたのであるが、その成果は中々擧げなかつた。然るに、千九百十七年のロシア革命はトルキスタン回教徒大會の決議に基き、トルキスタン共和國の樹立を宣言した。そして當時、露獨間に條約さへ結ばれ、バツム、アルダハン、カルス等の後高架索地方は民族自決を實行した。他方當時、イスタンブールよりの汎ツラン主義的プロバガンダは、電撃的に中亞同族の心を貫き、遠く東部シベリアのトルコ系民族ヤクト人をも動かした。勿論これは其後、ソ聯の巧妙なる『民族自決』政策により換骨脱體されたのであるが、しかし若し將來、歐亞に互つて分布する先天的に好戦民族たる全トルコ民族が、組織ある統一の下に若返るといふような時が來るとしたら、それは單に、ロシアおよび英領インドの脅威であるばかりでなく、實に、全アジアの問題なのである。

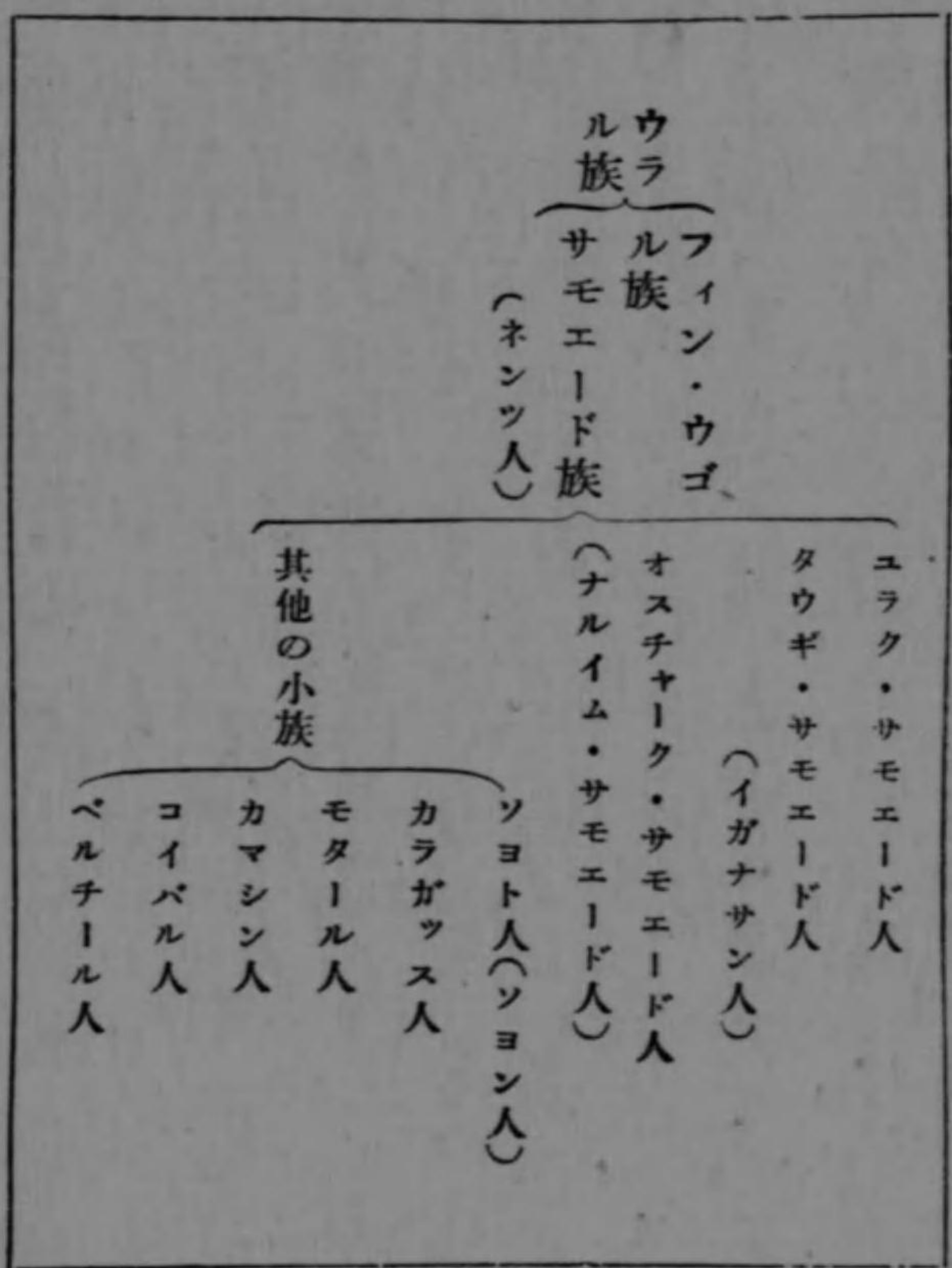
第七章 サモエード民族

一、總論

サモエード族はウラル・アルタイ語族中のウラル語族に屬し、その體質や言語はフィン族とも異り、古シベリア族たるユカギール人にも似てゐると言はれるが、また蒙古型も可なり濃厚である。ツラン族のこの分派は數字的にこそ小さいが、白海からカタンガ河にいたる歐亞兩大陸の海岸、北は北氷洋より南はサヤン山脈にいたる廣大な地域を覆ふてゐる。彼等の主なる住地は、北氷洋海岸の邊陲の地ツンドラ地帯で、古代の旅記には、『サモエディア』はベチョラ、オビ兩河間の地域とせられてゐたが、しかし今日では、サモエード人の住地は一層東方にのびてゐる。即ち、西方では、アルハンゲル州のメゼン郡、東方では、中部シベリアのタイミール半島にいたる地域を占めてゐる。

會つて彼等は、さらに南部のアルタイ地方にまで伸び、その東はサヤン山脈、オビ及びエニセイ河の上流にまで擴がつてゐたのであるが、四世紀ごろ、トルコ・タタール人により北方へ逐ひやられ、またその後さらにオスチャーク人によつても逐はれ、そこで彼等はオビ、エニセイ河に沿ふて北氷洋に下り、その海岸線を傳ひつゝ、西は白海に、東はタイミール半島にまで分布するに至つたものである。

フィンランドのツラン學者カストレーンに依れば、千八百五十年頃にはエニセイ河の水源地方にサモエード語と同じ系統の言語を話すトルコ化したサモエード人が居たといふ。また南方からトルコ・タタール族に逐はれた



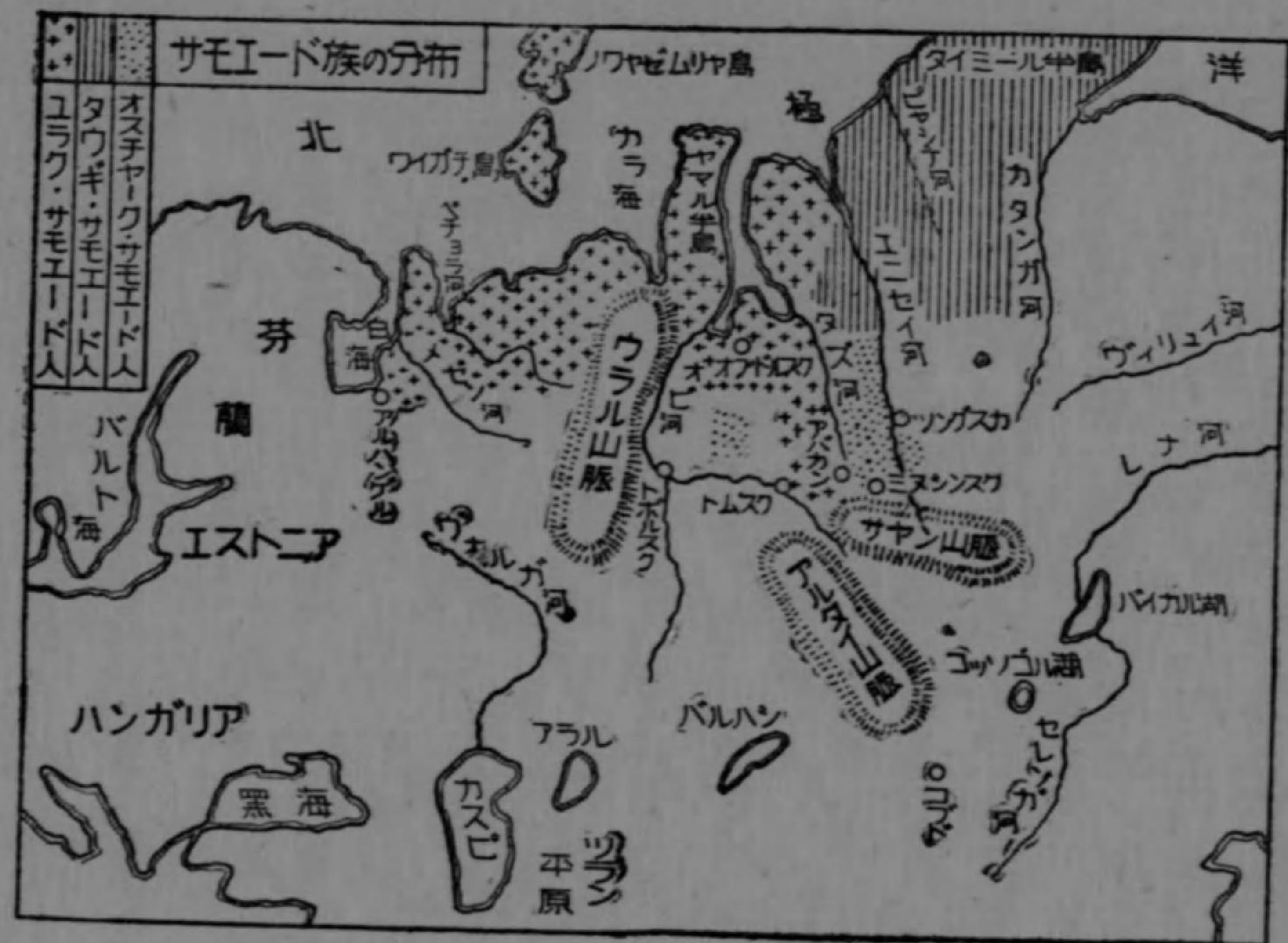
サモエード人の一部は、オビ河畔のオスチャーク人の住地に侵入し、彼等と激しい闘争をつづけたことがその傳説にのこつてゐる。

二、種族別 サモエード族はその方言によつて次の四部族に分けられる。

ユラク人 ユラク人はサモエード族中の重要な部族で、『ネネチエ』又は『ネンツ』と自稱し、蒙古化したサモエード族の一派で、白海よりエニセイ河にいたる海岸地帯に住む。彼等は強健にして勇敢な種族で、主として馴鹿遊牧民であり、北

氷洋圏内のツンドラ地帯を彷徨してゐる。そして彼らは極めて大膽で、漁業と狩獵を營み、その生活の中心地はオブドルスク附近とメゼン灣附近で、その方言は五つに分れてゐる。固有ユラク人はカラ海岸からノーワヤゼムリヤ島の南部に住んでゐる。

タウギ人 一名イガナサン人 タウギ人はユラク人の住地の東方、タイミール半島に住み、エニセイ河口からカタンガ河口にのびてゐる。彼等も亦ツンドラ地帯における馴鹿遊牧民で、その主なる住地はビヤシーナ河上流にして、南隣のツングース人と接してゐる。



第 26 圖 サモエード民族の分布

オスチャーク・サモエード人 オスチャーク・サモエード人は右二種族の南部、即ち、ツンドラ地帯より南の

オビ及びエニセイの中流なるトボルスク及びエニセイスク森林地帯に住んでゐる。彼等の大部分は森林遊牧民で、狩獵を業とし、時にはエニセイ河で漁業を營むこともある。彼等はツンドラ住民の如く馴鹿を用ゐることに、馬や犬を使ひ、ユルタといふ小舎に住む。この種族の一小部分は北方のタズ河畔で、僅かの馴鹿を飼育してゐる。彼等の主要住地はトムスク縣のナルイム地方で、一名ナルイム・サモエードとも呼ばれ、非常にロシア化し、その人口の四分の三はロシア語のみを話し、他の地方のものはオスチャーク・サモエード方言を話してゐる。

其他の小族 これらの三部族の他に、シベリアの南部にサモエード系の幾多の小族があり、彼らは、サモエード族の原郷たるアルタイ及びサイヤン山脈地方、即ちオビ及びエニセイスク間の地域、南はトムスク及び

エニセイ兩州に住む。これらの種族は凡てタタール化せられ、その本来の性質を失つてゐる。彼等は千七百年の中頃までサモエード語を用ゐてゐたが、其後、數十年にして全くタタール化してしまつた。今それらの例として、次に二三の斷片的小族を擧げる。

1、ソヨト人(ソヨン人) 彼等はアルタイとサヤン兩山脈地帯に住し、その一部は、外蒙のゴブド河の水源よりコスゴル湖およびセレンガ河にいたる地域に分布してゐる。彼等は寒帯の山間にあつて黒貂・栗鼠・熊等を捕へ、その毛皮と生活必需品を交換して生活してゐる。馴鹿を狩獵用および役用につかひ、馬を使ふことは稀だ。彼らは氣候の變化に従ひ移動し得らるゝ仕組みのユルタに住み、その一部のはブリヤート蒙古語を用ゐる。宗教はラマ教で、他の一部はシャーマン教徒である。彼らはかつてはトルコ化したか、今では、蒙古化しつゝあるサモエード族の一斷片である。

2、カラガツス人 この種族はサヤン山脈の北方傾斜面に住し、千九百十一年に僅か四百五十人にすぎず、當時すでにサモエード的特徴を失つてゐたと云はれる。

3、モタール人 彼等はカラガツス人の北方に住み、隣族のツワ・タタール人やソヨト人と融合し、また一部のは支那に入つて消滅して了つた。

4、カマシン人 この種族はエニセイスクのカンスク郡におけるモタール人の北方に住み、農耕と牧畜により生計をたて、その言語はタタール語との混合語を用ゐてゐる。

5、コイバル人 彼らはエニセイ河の上流に住み、その昔、サヤン山脈地帯をはなれ、アバカン平原に移つた。

彼らはミヌシンスク地方のタタール人と區別することがむづかしいほど混血し、その生業は牧牛である。

6、ベルチール人 彼らはアバカン平原に住み、農耕および牧牛を業とし、その言語はタタール形態をとり、宗教は名義だけのクリスチャンである。

三、名稱 ロシア人の用ゐる Samojed といふ名のもつ意味は明らかでないが、その最初の部分 Sanno はラップ人やフィン人の用ゐる Same あらひは Suomi から來たものではあるまいか。彼ら自身は hazava (人の意) と自稱し、オスチャーク人は彼等を orgoy とか vorkho と呼んでゐる。この名は『ウゴル』に關係のあることを暗示する。サモエードの名はすでに千九百十六年のロシアの編年史に現はれてゐる。現在ソ聯邦においては、サモエード人をネンツ人、その言語をネンツ語と呼んでゐる。

四、人口 サモエード族の数は詳かでない。曾つては大民族であつたが、既述した如く、すでに衰退の道にあり、今日では大凡二萬人内外にすぎないといはれる。千九百十一年の『アジア・ロシア』によれば、次の通りである。

ユラク人	七、〇五七人
タウギ人	一、三七〇人
オスチャーク・サモエード人	六、五五九人
合 計(シベリア・サモエード人)	一四、九八六人

この數字に更に、ヨーロッパ・ロシアに住むユラク人六千人を加へると、總計二萬一千人となる。それにタタ

ール化せられた南シベリアのサモエード人を合すると、大凡二萬二千人になるのである。

五、身體的特徴

一般に體格の點においてサモエード人はウゴル・オスチャーク人に似てゐる。その眼は狭く、肌色や毛髪はフィン・ウゴルよりも暗色で、身長は概して低く、男は平均五呎二吋、女はそれ以下だ。頭は中顔で、毛髪は黒く、眞直で、光澤がある。皮膚は蒼黄色で、兩眼は狭く、斜形で、各々がはなれてゐる。頬骨は突出し、顔面は圓形・扁平・幅廣で、鬚は少く、鼻は扁平で開き、唇は厚く、筋骨逞しく、スラヴ・ロシアの血が混入してゐる。一般に、西部よりも東部の居住者の間に純血のものが見られる。ベチョラ河の西方に、チユートン及びスラヴの影響をうけ、すでにアーリヤ型に變つてゐるサモエード人のゐることは注意に値する。

彼らは一般に智的で、精力的で、温順で、元氣で、社交的で、正直であるが、しかし、浪費好きで、不潔で、沐浴したことがないし、襤褸になるまで更衣しない。女子は不淨なる者とせられ、馴鹿の皮でつくつた圓形のテント(チユム)のある場處には入ることを許されない。

六、生活

サモエード人の主要な職業は馴鹿の飼養・狩獵・漁業等で、該民族の北漸以前には農耕も營んでゐた。馴鹿飼養者たるユラク人とタウギ人は遊牧民で、冬は南方に、夏は北方に移住する。ヤマル半島居住の裕福なサモエード人は五千以上の馴鹿をもつてゐる。オスチャーク・サモエード人は専ら狩獵をこととし、漁業をなすものは少い。

往昔、サモエード人は弓矢を用ゐてゐたが、今では、燧發銃フロントロックを用ゐて居る。サモエード人の用ゐる道具の多くは、獸骨と石から作られてゐるが、金屬製のものとしては、斧・小刀・錐等がある。

サモエード人はオスチャーク人の如く、毛皮をベレゾフやオドルスクに持ちゆき、そこで、生活必需品と交易を行ふ。しかしこの交易は、多く、ツンドラ地帯の猶太人といはれるズイリヤン人の手により行はれてゐる。

サモエード人は一般に遊牧民ではあるが、定住の能力ももつてゐる。それで、アルハンゲル州のコジュヴァでは、定住して大麥をつくり、牛を飼ひ、漁撈をやつてゐる者もある。

七、服装と食物

衣服は男女とも馴鹿の皮からつくられ、男女ともお守りを持ち、このお守りは多く熊の牙である。主なる食物は馴鹿の肉だ。しかし、ある地方では、ライ麥のパンを食ふ。彼らは又、噛み煙草や喫ぎ煙草が好きで、ウォッカも飲む。

八、習慣

一夫多妻は彼等の間に禁ぜられてはゐないが、多くは一夫一婦だ。結婚における身の代金は多く新婦に拂はれる。サモエード人は馴鹿の皮とその妻を交換したり、他人の妻と妻の交換をやることがある。基督教がはいつてから、埋葬を行ふことはサモエード人の風習となつたが、しかし、葬儀の傳統的方法是屍を木箱に入れてツンドラ地帯に遺棄することであつた。サモエード人は、オビ河の河口の彼方に死者の國、すなはち黄泉よみの國があると信じてゐる。

九、宗教

彼らは名ばかりのクリスチャンで、本來はシャーマン教徒で、偶像を崇拜してゐる。従つて彼等は舊來の神を信じ、木製の偶像に供物をあげ、シャーマン僧タヂベイと呼ぶを崇拜する。ことに彼らは、基督教の神は馴鹿については無知と考へ、その家畜の問題については必らずその民族本來の神に訴へる。彼らの民族神のうちで、『ヌム』は生命の主であり、『アア』は惡魔で、その他色々の神がある。すべての神の儀式には、

ヌムの代理たるシャーマンの臨席が必要とせられてゐる。サモエード人は殿堂をもたず、山のあるところを神聖な場所としてゐる。ヴァイガチ島はとくに神聖とせられ、信心深いサモエード人はそこに埋葬せられんことを願つてやまない。彼らの主要な偶像は『ケーセ』で、それはヤマル半島にある。

一〇、言語

サモエード人は言語的には、他のツラン族よりもフィン族と最も密接な関係をもつてゐる。この兩者においては膠着語的現象は、蒙古、ツングース、トルコ諸語の關係におけるよりも發達してゐる。更にこれら兩民族の語彙は一層密接な關係をもつており、またその膠着語的性質は民族のヨーロッパ化とともに印歐語的屈折的性質により侵蝕されつゝあるが、然し、その程度には自ら一定の限度がある。サモエード語は三つの主要な方言に分れ、それが更に、二十の俚語に分けられる。

一一、歴史

サモエード人は歴史上あまり重要な役を演じてゐないし、またその由來についても餘り知られてゐないが、しかし、彼らの原郷がアルタイ及びサヤン山脈地方にあつたといふことは、十八世紀においてサモエード語を用ゐて居た南サモエード族の殘族が、それらの山嶽地帯の北方傾斜面に住んでゐたことから發見せられ、明らかになつたのである。サモエード族の主體が、何時この地方から北方のツンドラ地帯へ移住したかに就いての確然たる時期は解らない。史家ネストルに依れば、十一世紀頃すでに現在の地域にサモエード人が住んでゐたと云ふ。彼らの北方移住の原因は、四世紀に、南シベリアを侵略したトルコ人の壓迫によるものだといふ。彼らの一部はエニセイ河に沿ひ、他はオビ河に沿ふて北上した。この民族の移動がトルコ族の壓迫によるのだといふことは、現在、南方にゐるサモエード人の居住する處には必らず有勢なトルコ分子が發見せられ、サモ

エード人はその民族性・國民性を失ふほどにトルコ化せられてゐるからである。

サモエード族は芬族と常に接觸して生活してゐたことが分る。彼らの傳説に依ると、サモエード人は芬族と鬭争のシーソー・ゲームをやつてゐたと云はれ、又、ウゴル・オスチャーク人は、上部オビ河地方より北氷洋海岸にサモエード人を追ひやつたと傳へられてゐる。サモエード人がフィン人を追ひ拂つたと思はれる地域はウラル山脈の西方である。

サモエード人に關する知識は主としてロシア人により傳へられてきた。シベリアにおいては、エニセイ河の東とカン河の南にゐるサモエード人の三族(ツウビン、モタール、カマシン)が居住するといはれる。彼らは少數だが、好戰的で、常にロシアの支配に反抗して來た。ツウビン人は最初千六百二十九年にロシアに納貢してゐたが、千六百五十四年以後には不規則となつてしまつた。これらの三族は森林サモエード人で、その主な仕事は狩獵で、巧みな射手である。今日ツウビン人は殆んど消え失せたが、その殘部は、民族の僅かな痕跡のみを残すカマシン人を除き、他は全部トルコ化して了つた。然し、*Чибчи* の名は今日でも残つており、コイバル人も自ら『ツウバ』と自稱し、一方、アルタイの諸族も、黒林タタール人をツウバと呼んでゐる。支那人によつて用ゐられるいはゆる *Dubo* なる名がサモエード人と同一であることは疑ひもない。ただにその名ばかりでなく、支那人のいふ『ドゥボ』はやはり狩獵と漁業をいとなんでゐるのである。

サモエード人とロシア人との交渉は古いことで、既に十一世紀にノヴゴロドに上貢し、十六世紀以來彼らは、ロシア法律に依り、ツンドラ地帯で保護せられてきた。ロシア文明が北方に進入してきた時、彼らは逃れてその

狩獵地を南に求めた。ロシアの法律は壓制的ではなかつたが、成年のユラク人男子は一磅位の税金を支拂はされた。また千八百三十五年に、彼らはその長老をいたゞく自治制を布いてゐたが、千八百九十二年にはその制度も更に發展し、年々、冬期には首腦者の集會さへ行はれてゐた。

サモエード人は亡びゆくツラン種族の一つである。彼らは、天然の恩恵の少い北へ北へと追ひやられ、次第に貧困となりつゝある。そしてその言語・宗教・習慣等も、漸次、ロシア化せられて來たが、現在では、さらに赤化されつゝある。

第八章 歐洲に於けるツラン民族

第一節 フィン・ウゴル民族

一、總論 東歐・中歐・巴爾幹におけるツラン民族の主要なる分派はフィン系とウゴル系の二群、すなはちフィン ウゴル民族である。フィン系の代表民族は芬蘭人とエストニア人により、またウゴル系はマジヤール(洪牙利)人によつて代表せられてゐる。フィン族の大部分は、東バルト海、北極洋、白海の間地域に、また他の一部はヴォルガ河の中流に近いヨーロッパ・ロシアに住んでゐる。ウラル地方のその故郷の舊名ウグラにより、その名をえたウゴル系の代表マジヤール人は、現在、中部ドナウ河地帯に住んでゐる。フィンランド人は近代初頭に現在の地に移住到着したのであるが、マジヤール人はそれよりずっと以前、すでに九世紀末から現在のドナウ盆地を占據してゐた。

二、人口 フィン・ウゴル派の全人口は約一千六百萬人で、その殆んど全部がヨーロッパに住んでゐる。ウゴル系の人口は、北西シベリア(ウラル東側オビ河畔)に住む二萬五千人のヴォグール人やオスチャーク人を除けば、マジヤール人の一千萬人が該族を代表する最も主要なものである。フィン系は、ウラル西麓に住む約六萬のベルム人、ウォチャーク人、シルヤーク人(ズイリヤン人)等を除けば、主として芬蘭、カレリア、インゲ

ルマンランド、エストニア、並びにスウェーデン及びノルウェー（ラップ人）等に分布し、その總數約六百萬人といはれてゐる。フィン・ウゴル派の一部は、今日なほ、その狩獵及び遊牧民的風習を保つてゐるので、平原を避け、河川や湖水に近い森林地帯に住んでゐる。

三、言語

フィン・ウゴル派は、相互間に甚だしい差異のない同質の言語單位を形成し、文法と語彙は、他のツラン分派とは異つてゐる。合成語をつくる傾向は、この語群の殆んどすべてに通ずるのであるが、特に、フィン語とマジヤール語において著しい。しかしフィン・ウゴル派の他の小民族の言語においてはロシア語の影響を著しくうけた結果、この傾向は殆んど消失し、或ひは極めて不完全な形で残つてゐる。母音調和もフィン語とマジヤール語においては完成されてゐるが、他の語においては不完全である。斯様にフィン・ウゴル派のうちには、隣接民族の影響をうけ、その固有の言語を失つて了つたものもあることを忘れてはならぬ。

四、肉體的特徴

體格の點においてフィン・ウゴル派は中等程度で、強壯で、背はやゝ低く、前こゝみの傾向があつて、短頭である。その皮膚は灰色である。また眼は灰色か碧色で、毛髪は輕鬆、髭に乏しい。身心ともにエネルギーに富んではゐるが、行動は極めて緩慢で保守的、猜疑心が強く、無口で、やゝメランコリーなところがある。

マジヤール人を除けば、他のフィン・ウゴル系民族は好戰的性質が乏しい。またその特徴のよい方面としては忍耐力が強く、勤勉で、外來客に對しては非常に親切で、客もてなしがいい。

五、文明

文化發達のステージは、フィン・ウゴル派の間では可成り原始的なものがある。フィンラン

ド人や、マジヤール人や、エストニア人等は、早くから西歐文明と接觸してこれを採用し、そして少くとも都市においては、ヨーロッパ文化の段階に追従しつゝも、しかも反面、自己の民族的個性を保有してゐるヨーロッパにおける唯一のツラン民族である。フィン・ウゴル派の他のもろもろの小種族は、たいてい農牧に従事してゐるが、彼等は多く大ロシア人の間に點在する断片的の小種族であるため、時の流れにつれ、隣接するスラヴ民族に解消して了つたものも多い。フィン・ウゴル系民族のうち、文化の低い段階にある種族は、オスチャーク人、ヴォグール人、ラップ人等であつて、彼等は今日なほ遊牧をこととしてゐる。彼等は主として異族結婚をなす氏族に分れてゐる。彼らの間では、女子は甚だ卑められ、僕婢視せられ、宗教的儀式に列することさへ許されない。家屋の形式は極めて原始的で、中央の爐をめぐつてスクリーンを形成するやうに、獸皮や芝士で覆はれた柱が寄せ集めて建てられてゐる。冬には穴倉生活をするものもある。また履物は一般に冬は長い雪靴、夏は普通の長靴を用ゐる。物の計算は可成りうとい。ヨーロッパ文明の影響をうけない種族は、今でも單純な家長支配の形態を保つてゐる。しかし、これらの遊牧民も今日では次第に定住するやうになつて來た。

六、宗教

遠隔の地に點在する少數の種族を除けば、フィン・ウゴル派は大體キリスト教を採用してゐる。しかし、ウゴル系のオスチャーク人やヴォグール人、並びに東フィン系のチェレミス人等は、未だヨーロッパ文明の影響を左程うけてゐない。フィンランドの『カレワラ』詩にも見られる如き、多くの偶像教的信仰は、ほんの名目だけのキリスト教徒のうちに残つてゐる。神はこゝでは、自然現象を代表する諸靈である。フィン人、ラップ人、チェレミス人の間には森の神がある。なほ『神』のフィン名 Yumata は『天』を意味する。ま

た祖先崇拜も残つてゐる。オスチャーク人は精霊に犠牲をさしげ、また死者の像をつくる。死者の像は、またフィン・ウゴル派の墓や塚にも見出される。ヴォグール人はまた木の偶像に禮拜を捧げ、そしてこの偶像に犠牲がさしげられ、時として、偶像の唇は血で塗られる。またキリスト教と偶像教との混同も見出される。チェレミス人は、聖母マリアに犠牲をさしげてゐる。また彼等は、病氣は悪霊に憑られたからだと思ひ、その治療に禁厭や呪文が用ゐられてゐる。かかる宗教的風習は、フィン族の詩「カレワラ」のうちに散見することが出来る。種々な病氣に對し必要な魔法的治療方法は、妖術者——中央アジアのウラン族のシャーマンに相當する——が心得てゐる。彼は、悪魔を拂ふ者であると同時に、また神と人の仲介者でもある。その仕事は世襲であつて、その儀式にはドラムが重要な役割をなす。

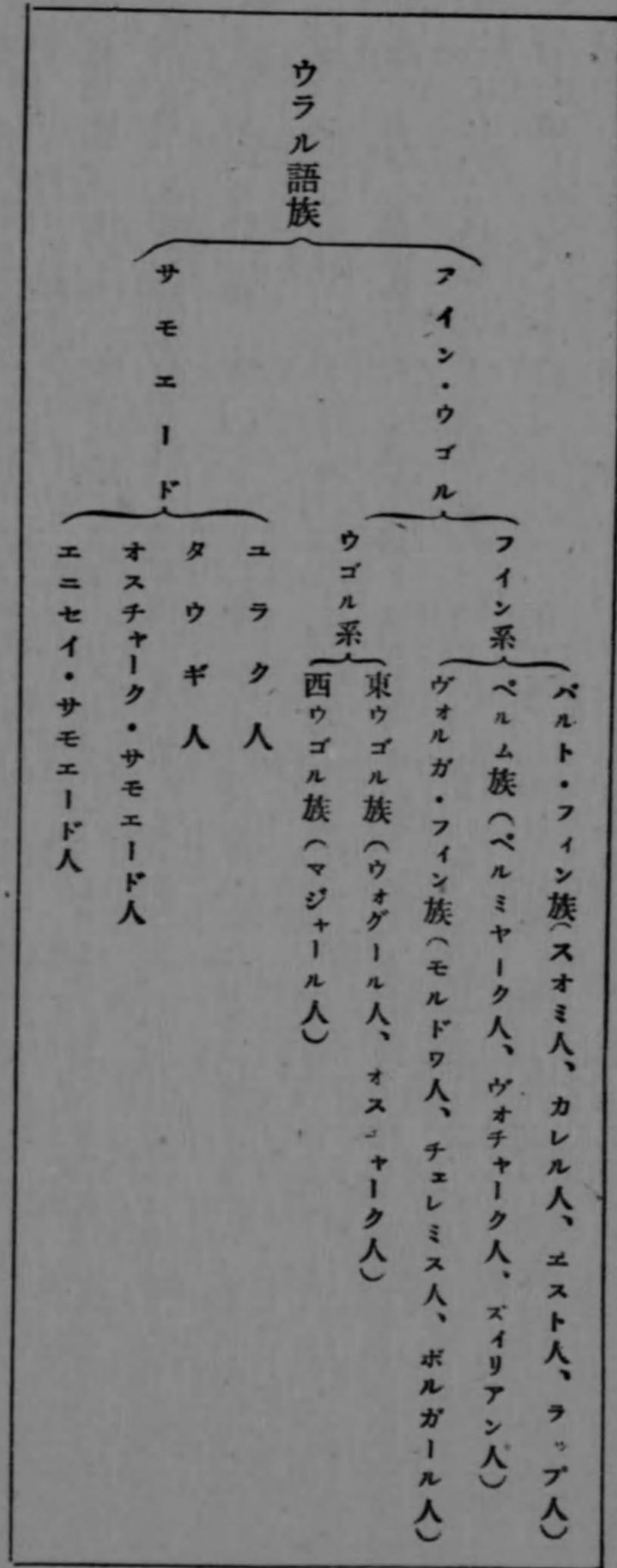
以上述べたところから察しうる如く、本來のフィン・ウゴル系民族の宗教は、自然崇拜、祖先崇拜、魔法使ひの三要素に歸着せしめられるであらう。

七、歴史

フィン・ウゴル系民族の大部分は、書かれたる歴史をもつてゐない。彼等民族の歴史は、その口碑によつてのみ、過去のかすかなる推察の光りを我々は見出すに過ぎない。ヨーロッパ歴史において重要な役割をなしたフィン・ウゴル系民族としては、ただフィンランド人とハンガリー人だけである。フィンランドの學者によつて蒐集せられた言語學的、考古學的、土俗學的資料の結果は、此等の種族の移住の徑路に關する輪廓を明らかにすることが出来た。即ちそれによれば、フィン・ウゴル系民族は、往昔、ウラル山脈の東方に共棲して共通の言語を話してゐた。そして當時、彼等は獵師でもあり、また漁夫でもあつたのであるが、しかし、農民では

なかつた。其後、ウラル山脈の西側ヨーロッパ・ロシアに移住し、ヴォルガ河やオカ河の地方に住み、そこで初めて隣接諸民族から農業技術を學んだものらしい。其頃、彼等は新石器時代の生活をしてゐたものと想像せられる。また西紀前六百年頃にはイラン族と接して金屬の使用法を學び、また百位數、千位數等をイラン人から借用したのもらしい。さらにその後、西紀前四百年頃には、既にヴォルガ河畔に交易の道も開けてゐたことであるから、この道を通つて今日のいはゆる西フィン人は、ヴォルガ河畔からさらに北西に移住を開始したものと思はれる。そしてキリスト誕生の頃には、彼等は既に、バルト沿岸地方においてレット人やリトワニア人と接觸し、その後さらに、スカンヂナビア人とも知り合ひになり、そして此等の兩民族から、物質や文化思想に關する幾多の言語を借用したものである。それ故、フィン人の用ゐる王室、政治、金屬等の名稱は、大體、スカンヂナビア語からの借用語である。フィン人は西紀七百年頃、現在のフィンランドの地域を占據したのであるが、その後ヴォルガ河に沿ふて南から北上して來たスラヴ族——後世の大ロシア人が、フィン人をさらに北方へ追ひやり、そして遂に西フィン人を東フィン人やウゴル人から、全く分離せしめてしまつたのである。キリスト教は西紀一千年頃、西フィン人に採用せられたのであるが、その改宗に際してフィン人とスウェーデン人との間には、長い間政争や宗教戦争がつけられた。そして西紀千三百年頃には、フィンランド人は全くキリスト教に改宗してしまつて居た。それから以後千八百九九年にロシアの支配に移されるまで約五百年間は、西フィン族はスウェーデンの統治下にあつたのであるから、自然、スウェーデン文明の影響を多分に受くるに至つたのは當然のことである。

斯くして、西部の兄弟から切り離され、取り残された東フィン人とウゴル人は、ウラン族の他の分派たるトル



コ人やタタール人と接觸するやうになり、そして多少タタール化せらるゝに至つた。そのために二、三の種族はタタール語を用ゐる様になつた。然らざるもの、例へば、モルドヴィン人や、ナエレミス人や、ヴォチャーク人等も亦、タタール單語の多くを借用するやうになつた。

いはゆる東フィン人の大きな集國地といふのは、ヴォルガ河畔のマグナ・ブルガリア、即ち、大ブルガリア王國がそれであつた。この國は、千二百三十八年に蒙古族の侵入に依り瓦解せしめられるまで存続してゐたのであるが、祖國の崩壊とともに此等ブルガリア人の多くは、さらに西方に向つて移動し、その後、バルカン半島に移住して、ここで全くスラヴ化して了つた。そして彼等本來の言語と民族の血は、たゞ今日のブルガリアの名のう

ちらにのみ残存するに過ぎないまでになつたのである。

ウゴル派の代表的民族たるマジヤール人も亦、ヴォルガ河畔を離れてから西漸して、九世紀頃にはドニエー



第 27 圖 歐洲に於けるツラン民族の分布

ル河とドナウ河の間の地域、即ち、今日のベッサラビヤ邊りに暫時留り、そこからさらに西進し、カールバート山脈を越えて、パンノニア及びダチアの古代ローマ領を侵略してこゝに定住するに至つたのである。それから以後今日まで約十世紀間、このカールバート山脈とドナウ河の間に蟠る盆地、いはゆるハンガリー平原を占據し、こゝに

對白人の聖陣を築き、アジア民族の前哨として孤軍奮闘を續けてゐる。

八、フィン・ウゴル民族の郷土

フィン・ウゴル族は、現在、アルタイ山脈地方から北西のスカンヂナ

ア半島へかけて分布してゐる。彼等の發祥地についてはいろいろな説がある。アルタイ地方説、ウラル地方説、東南ロシア説、高架索説などもあつて一定してゐない。しかし、スラヴ族やチュートン族がヨーロッパ・ロシアに這入つて來たのは歴史時代になつてからで、比較的新しいことであるが、フィン・ウゴル族はそれよりずっと以前、すなはち有史以前に中央アジアからキルギズ草原を横断してヨーロッパ・ロシアに入り、それから、ヴォルガ河畔に沿ふて北上したものである。勿論、その際、南露の黒土帯にも擴がつたものと思はれる。その分布地域の北部は、例へば、ドヴィナ、スハナ、ワーガ、オネガ等の如く、河や湖に『ナ』或ひは『ガ』の語尾のある名稱の地は、大體、ラップ人の住地であつたことを語るものであり、また『マ』或ひは『リヤ』の語尾ある河名はヴォチャーク人の郷土であり、また『ワ』の語尾のつく河名は大抵ベルム族の郷土であつた。例へば、モスクワの如き會つてフィン系ベルム族の居住地であつたことを證するものだ。これによつてみても、フィン族は、昔、ウラル地方から、ヨーロッパ・ロシアの北半分へかけて廣く分布してゐたことが明らかである。また固有フィン人の自稱名スオミと、その隣族であるラップ人の自稱名とが同源であることよりして、ラップ人とフィン人とは同族であることが判る。かくてフィン・ウゴル民族は、アジア人種中の北方派に屬することは一般に認めらるゝところであるが、その後、チュートン族やスラヴ族に西と南から押されて、次第に、今日のやうな北寄の位置を占むるやうになつたものである。

芬蘭の學者カストレーンに依れば、フィン族中のベルム群は會つてはウラル山脈とドヴィナ河との間の地を占め、ドヴィナ河から西にはウエスト族やチュード族が居り、その北方にはヤミ族やカレル族が住んでゐた。このカレル族の一派で、その北隣にゐたのがベチヨル族であつた。またベルム族の南方にはチェレミツ・モルドワ群がゐたと述べてゐる。以上の記述と現今の分布から推しても、フィン・ウゴル民族の古い郷土は、尠くとも、アルタイ山脈とウラル山脈との間であつたことが、容易に推定し得られる。

第二節 西フィン族

一、緒言

第二次歐洲大戰の勃發當初、ソ聯軍がフィンランドに侵入した時、ハンガリーのフィンラン

ドに對する同情的氣分は非常なもので、その議會においてハンガリー・ナチス黨の指導者メスコ・ゾルターンは、自由解放のためにフィンランドを援助すべしと演説をしたのに對し、全議員は一齊に拍手を送り、フィンランド萬歳を絶叫した。蓋し、フィンランド人はハンガリー人同様、東洋人種であるとの氣分が國民全體に横溢してゐるため、ソ聯のフィンランド攻撃に對しては之を不快視するものが多いからである。また他の報道に依れば、當時、エストニアから芬蘭の祖國防衛戦に義勇兵として志願するものが非常に多かつたと云ふことである。これは眞にさもあるべきことで、これら三兄弟民族の間には、かねて親善提携の契りを固くするため、『フィン・ウゴル文化會議』なるものがあつて、会場は三國交替に三年毎に開催して同族間の文化的民族的因縁を温めてゐる。それ許りでない。血を同じくする民族に生を享けた喜びと譽れとを祝福するため、毎年十月の第三土曜日、若しく

は日曜日をして『血族の日』と定め、三近親民族間に民族的祭典を行ふ。當日は、學校・教會・公會堂・ラジオ等においてツラン同族に關する講演や催し物などをしてゐるほど親しい間柄にあるからである。芬蘭とエストニアの主要人口を形造る芬族^{フィン}とはいつたい如何なる民族なりや、その分布・由來・文明・身體的特徴・言語・職業等々について一通り説明したい。

(一) フィン族

一、概観

芬族はウラル・アルタイ民族中のウラル派のフィン・ウゴル族に屬する。そしてフィン・ウゴル民族の分類表により明らかなる如く(表参照)、芬族は東フィン族と西フィン族に分けられるが、いま問題になつてゐるフィンランド人、カレリア人、エストニア人等は西フィン族の弟妹である。茲には主として西芬族について述べる。

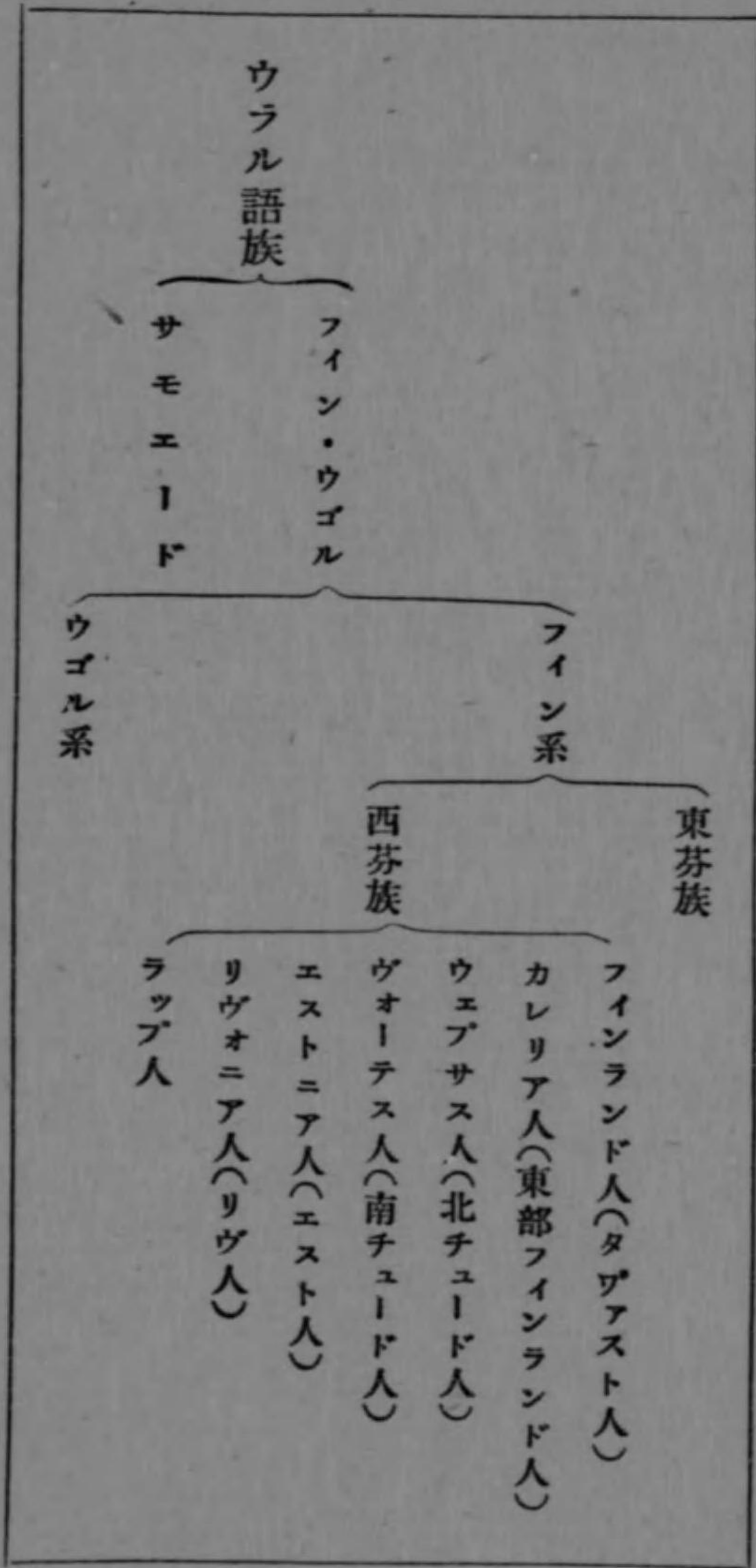
『フィン』なる名稱は、ローマの歴史家タチトゥス(西紀百年頃)が、その著『ゲルマン族の國土』において今日のリトワニアに相當する地方にフェニニ Fenni 國を位置せしめてゐるのに由來する。そして彼によれば、當時フェニニ人は文化の低い狩獵民族で、貧しい幕舎生活をなし、獸皮を衣裝とし、いまだ馴鹿飼養の知識もなく、また雪靴も使用してゐなかつたとタチトゥスは記載してゐる。その後一世紀半ほどして埃及の學者プロレミーは、フェニニ人の國土をウイスツラ河の東部と記載してゐるところからみて、芬族はキリスト紀元初頭、已に東ヨーロッパのバルト海近くにまで進出してゐたことが分る。即ち、芬族はキリスト紀元初頭、その原始故郷たるウラ

ル地方から北方へ移動し始め、タチトゥスの時代に今日の北部及び中部ロシア、並びにバルト沿岸にまで擴がつたものと考へられる。それ故、多くのフィン系地名が是等の地方に發見せられてゐる。その後には於いてもフィン族の他の分派がウラル山脈の東方、イルティッシュ河の東部にまで分布してゐたことが知られてゐる。これらに依つてみても、フィン族は有史前、即ち、チュートン族やスラヴ族の移住する以前、既にアジアから歐露に入り、北は北氷洋より南は南露の黒土帯にまで分布したものであるとプロレミーは説いてゐる。斯くして八世紀頃には今日すでに消滅して了つたフィン系諸族がまた中部ロシアに住んでゐたのであるが、それが基督教の普及とともに益々ロシア人に吸收融解せしめられて了つた。往古、フィン人がドン・ヴォルガ兩河間の地峽の南方にまで擴がつてゐたことの證左は、『ヴォルガ』とはその芬系民族のモルドヴィン名の『ラウ』に由來することからでも分ると言はれる。

二、初期の文明

芬語の中にはチュートン語の借用語が可なり多い。これは芬語がチュートン人と知合になつた時代に於けるその文明の状態を知るために重要である。この證左により、風習や神話的觀念も亦、チュートン系隣人からの借用物なることが分る。しかし、今日迄の研究では、芬人とチュートン人との地理的接觸が史前時代にまで溯るかどうかと云ふことは、明らかでない。ア・ハックマンに従へば、フィン人は今の芬蘭地方に移住した時、既に鐵の使用を知つてゐたし、またチュートン人は芬人の宗教たるシャーマニズムより深い感銘をうけ、その魔術の能達に驚いたことが知られてゐる。チュートン人がその北方隣人と交易關係に入つたのはさして古いことではない。當時既に毛皮納貢のことさへ設けられてゐた。

三、芬人とラップ人 古代チュートンの學者は、フィン人なる名をスカンヂナビアの北部に住むラップ人にまで範圍をひろげてゐた。當時ラップ人は、文化的にまた民族的に、フィン人から全くかけ離れてゐなければならぬ。

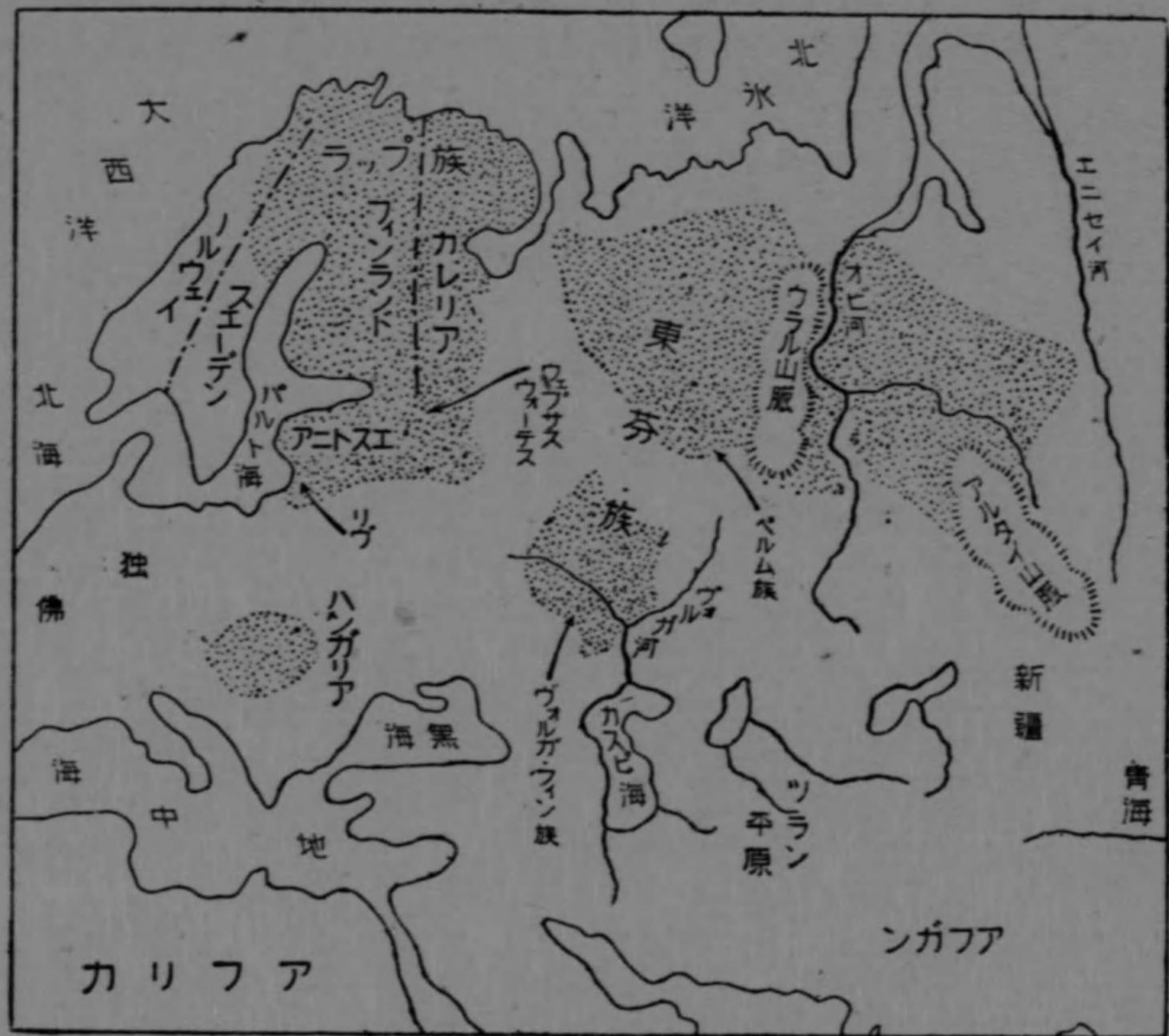


のノルウェー語で Finnar) 又はフィン人と呼んでゐる。

(二) 芬 蘭 人

数字的にまた文化的に、フィン族を構成する最も重要な主幹民族はフィンランド人である。その國語ではフィンランド國をスオミ Suomi と呼んでゐる。彼等は主としてフィンランド共和國に住む。芬蘭は第一次歐洲大戰

で、その初期においては芬蘭のフィン人と、言語及び體格において區別することが難しい位であつた。それが、アングロサクソンの史詩人ベオウルフのいふ所謂フィンナ・ランドであつたのだ。諾威では今日ラップ人のことを Finnar (古代



第 28 圖 フィン・ウゴル民族の分布

まではロシアの大公國として露帝によつて支配せられてゐたが、千九百十七年に自治共和國となり、その後レーニン政権となつてから、獨立を宣言し、立憲共和國を形成して今日に至つてゐる。西部フィン族の住地はボスニア灣とフィンランド灣の中間に位置し、更に、北方においてはラップランドの廣大な地域を含んでゐる。その上に、彼等はオロネツ、アルハンチエル、ノヴォゴロド、ペトログラード、ドヴェール、ヤロスラヴル等のロシア隣接地方、および諾威と瑞典の二三の地方にも散在してゐる。西部フィン族は更に二個の分派に分けられる。即ち、タヴァスト人は芬蘭共和國の南部と西部を占め、他方、カレリア人は、その北部と東部の隣接地に居住する。

一、人口　西フィン族の数は芬蘭共和國に約三百二十萬人（芬蘭總人口三百七十萬人中、約一割が瑞典人、約一萬が諸成人）、及び隣接のソ領にカレリア人として約四十萬人分布してゐる。また、多くのフィン系移民が北米にも生活してゐる。現在その數百萬人以上に上ると言はれる。これあるが故にアメリカが芬蘭に同情し、又、芬蘭はアメリカに對し戦債を滞りなく支拂ひ、以つてアメリカの同情を求めつゝあつたのである。

二、言語　フィンランド語は基本的にはツラン的で、特に、母音調和の特色は十分に發達してゐるが、その語彙と構造においては、深くスカンヂナビア語の影響をうけてゐる。その現在の形態は、アリア語の類型により改作せられたるツラン系材料より成り立つてゐる。また單純な用語にはスウェーデン語そのまゝを借用してゐるものもある。文法は、非アリア的の棄却と、アリア的特色の採用により、大分、變更を加へられてゐる。多様な名詞形と動詞形とは、もはや、附着せしめられる接尾辭をもつ單なる語根ではなくなつて、ギリシャ語やラテン語の語格變化における如き語尾をもつ語根となつて了つてゐる。形容詞も變化せられ、その名詞と一致する。動詞は助動詞の仲介を以て複合時をつくる。そこにはまた關係代名詞と分詞の夥しい補充がある。

三、文學　フィンランド語による最古の言語學的資料は、十三世紀の初頭に編まれた單語、特に人名・地名表である。フィンランド語の書物は、千五百四十四年までは現れなかつたが、古代遺物の研究と同様に、母國語の研究は、遂にフィンランド語を以てする多くの著作の公刊を結果するに至つた。フィンランドの民謡と神話詩の蒐集が刊行せられ、そして今では、豊富な近代文學も存在する。

四、身體的特徴　フィン人は、その身體的特徴において、スウェーデン語を日用語とするスカンヂナビア的特徴をもつ住民に反し、強健な、勇敢な、背の低い、殆んど圓い頭をもち、その顔は、まるまるとして強健である。額は低く、顔面は扁平、頬骨は突出し、兩眼は多く灰色で、多少内部へ傾斜してゐる。鼻は短くて扁平、口は突出し、唇は厚く、顎鬚は脆弱でまばらである。頭鬚は、もと黒色であつたことは疑ひもないが、今は褐色か紅色、時には金髪もある。肌色は褐色系である。フィン人は道德的に廉直、親切、篤信で、従順であるが、多少鈍感、短氣で復讐心が強い。彼等は、人格的自由と獨立心の鋭い感覺をもつて目立つてゐる。此等の身體的ないし道德的特徴の多くは、他のツラン族諸派と共通する點が多い。ツラン的標準外と思はれる諸性質は、彼等のうけたスウェーデンの血の可なり大きな混入に歸せられるであらう。

五、文明　フィン人は元來、狩人又は漁夫として遊牧生活を送り乍ら、餘程以前にヨーロッパ文明の影響に屈したものだ。彼等は、現在、牧人・農民・商人として、或ひは其の他、近代ヨーロッパ國家のいろいろな仕事に従事してゐる。彼等の文化は今日、スウェーデン人のそれと同一水準にあると言ひ得る。彼等は早くスウェーデン文明を採用し、その政治組織の下に數世紀間生活してきたのであるが、スウェーデンの影響をうくる以前に原始フィンランド人は、何等の政治組織をもたず、相互に獨立分離した社會をなして生活してゐた。フィンランド人は、普通、村落として考へられる集合的家屋の村落ではなく、その畑や牧場の中央に立てられた分散的農家に住んでゐることは、今日のフィンランド田園生活の特色である。これは廣い草原を必要とし、個々に隔絶して生活してゐた遊牧時代の名残りなのである。

六、宗教　古代フィン人の宗教は、空氣の神「ウッコ」、水神「アクティ」、其他の如く、大自然の擬人化

せられた諸力の信仰であつた。スウェーデン人に接觸してから、フィンランド人に對する基督教化が十二世紀に始まり、十三世紀にはそれが全国的となつた。

千五百二十九年に、瑞典王グスタヴス・ヴァサは芬蘭人にプロテスタントのルーテル派を採用せしめた。ロシアの宗教政策は、其後アレクサンダー三世治下に於いて、フィンランド人を希臘正教化せんと色々努めたが、しかし、ルーテル派は依然國教として残り、今日に至つてゐる。

七、歴史

フィン人の現在の地域への移住は、西紀第四世紀に始まり、そして七百年頃には、現在の地を完全に占據して了つてゐたのであるが、彼等が此の地へ到達した時には先住民としてラップ人がゐたものと思はれる。芬蘭人が眞にヨーロッパ文明と接觸し、これを認識したのは、第十二世紀中葉におけるキリスト教採用以後のことである。

初期のフィン人は勇敢でまた攻撃的であつた。といふのは、彼等のスウェーデン沿岸への間斷なき攻勢の結果、千百五十七年に瑞典王エリク九世の侵略を招き、エリクは芬蘭を征服し、その住民に基督教を宣布した。其後フィンランドは、漸次、その獨立と原始偶像教に復歸したが、千二百九年には英國の大僧正トーマスが來て傳道をなし、而してフィンランドをスウェーデンより分離せしめ、直接、ローマ法王に所屬せしめたが、其後千二百四十九年には、有名な瑞典人ビルゲル・ヤルはフィンランドに對して十字軍を起し、キリスト教容認のためにフィンランド人の西派たるタヴァスト人と戦ひ、遂に、フィンランドを征服して了つた。斯くしてスウェーデン人は、フィンランド人に諸種の文化を普及し、その法律によりスウェーデン人と同様の市民權をも與へた。瑞典王グス

タヴス・ヴァサとその後裔は、フィンランドに學校を建て、教會を増築し、學藝を奨励し、印刷を採用せしめ、もつてフィンランドの文化昂揚に貢獻した。十六世紀の初頭、グスタヴス・アドルフ王はフィンランド議會を開設して、貴族、僧侶、市民及び農民の四階級を設けた。斯くしてスウェーデンのフィンランド侵略は、露瑞直接國境を接することとなり、ロシアとの間斷なき戰爭をかもし、その戦ひの結果は、フィンランドは常に激しい被害を蒙るのであつた。ピーター大帝は、スウェーデンよりフィンランドを幾度となく、ひきはなさんと試みたが、遂に千七百十六年にそれが成功し、更に千七百二十一年にはフィンランド東部のヴィボルグはロシアに割譲せられた。其後フィンランドの失地恢復のための戰爭は二回も失敗に終り、千八百八年には露芬兩國間に再び戰爭が起つたが、千八百九年には全フィンランドとオーランド島の割譲によつて終結した。然し、これに依つてフィンランドは戰敗國としてロシアの領土となつたのではなく、その自由憲法と基本諸法を保持しつゝ、大公として露帝をいたたく、半獨立大公國となつたのである。然し、アレクサンデル三世治下の末、ロシアの汎斯拉ヴ運動は、フィンランドをオルトドックス化し、專制政治下に置かんとした。其後ニコラス二世の即位するや、憲法闘争は愈々劇甚となり、千八百九十九年の『二月宣言』は事實上フィンランド議會の立法力を停止せしめ、ロシア官吏とロシア語は強制せられ、而も、千九百三年にはロシアの支配者は、事實上の專制政治を施し始めた。即ち、二十世紀初頭より芬蘭に對する露化政策は次第に激しくなり、芬蘭の軍隊を改組するとか、國內にロシア人を移住させるとか、などなど極めて露骨に露化政策を強行し、その指導者とみられたボプリコフ總督は、遂に芬蘭の志士により射殺されるといふ事件も起つた。斯くして千九百五年十一月には國民的反抗心はその絶頂に達し、

遂に全国的の反露ストライキが勃發するに至つた。次いで日露戦争當時には芬蘭人は擧つて日本の勝利を祈り、當時、同國の志士にして我が對露策謀に協力したのもあつた位だ。その後フィンランドの要求はある程度ツァー政府により容認せられたのであるが、千九百八年か、十年に露芬兩國間の軋轢は再び燃え上がり、ツァー政府は芬蘭議會の權能を剝奪せんと試みて遂に成らず。第一次歐洲大戰當時フィンランドの青年はドイツの援助を得て國軍を組織して對露戦線に活躍したくらくらである。其後間もなくロシアに革命が起り、フィンランドは千九百十七年十月ケレンスキー内閣時代に自治共和國となり、續いて同年十二月六日レーニン政權時代には完全獨立國となつたのである。爾來、フィンランドには反共的色彩の強い中産農業地主が國の中堅となつてゐたため、その政策は反露反共的であつたと言ひ得られよう。

(三) カレリア人

カレリア人は、フィンランド人の二分派の第二のものである。彼等は、だいたい白海とラドガ湖の流れ込、フィンランド灣の東端とを繋ぐ間、即ち、フィンランドの東部と北部オロネツ(オネガ湖に近い)、ヴォゴロドとツヴェールを通つてアルハンチェルの南部に至る地帯を占めてゐる。カレリア人の三つの小さな姉妹的群はレニングラードの北部と北西部を含む所謂インゲルマンランドにも發見される。カレリヤ人は、西紀千百年に芬蘭からこゝに移住してきたと信じてゐる。更に、カルガ(モスコの南)、ヤロスラヴル(ツヴェールの東)、ヴラヂミルとヴォルガ河の南のタムボフに於ても、信すべきカレリア人の痕跡がみられるが、それは全くスラヴ化せられて

しまつてゐる。カレリア人は、元來、フィンランド人と異つた民族ではないが、しかし、彼等は永いこと、別種の民族であるかの如く考へられてゐた。それは彼等が東方の僻地に住んでゐた爲、スウェーデンの影響を受けること少く、むしろ、ロシアの影響を多分に受けてゐたからである。またロシア内においても邊陲の土民として文化の影響を左程うけてゐず、従つて、ヨーロッパ文明の採用も少く、西部の住民よりも、固有の風習を保持してゐる。今はソヴェート共和國內に形ばかりの自治共和國をなしてゐる。

一、人口 カレリア人の人口は現在約四十萬人で、そのうち約八萬人はオロネツに、約二十二、三萬人はノヴォゴロドとツヴェールに住んでゐる。此外に、全くスラヴ化した者はこゝに含まれてゐない。大戰後フィンランドがロシアから獨立した時、カレリアがソ聯側に取り殘されたため、フィンランドはそれ以來常にこれが回収に意を注いでゐる。このカレリア人の住むカレリア地方や、その弟妹族の住むインゲルマンランド地方(ソ芬國境から三十哩位隔るレニングラード附近)を合併せんとする所謂大フィンランド主義者達の運動を怖れて、ソ聯は四、五年前、ソ芬國境地帯のカレリア人を極東と中央アジア方面へ、恰も家畜を逐ふが如く移住せしめて了つたといはれる。

二、言語 カレリア人の言語は、タヴァスト人、即ち、西フィン人のそれと同一である。然し、それが純粹のフィンランド語であると言はれる所以は、スウェーデン語の影響が少いからのことである。

フィン人の國民的大史詩、口傳文學の華ともいふべき『カレワラ』は、千八百三十三年にエリアス・レンリヨットに依り、カレリア人の間、主として、東部フィンランドとオロネツで蒐集大成せられたものである。これに依

つてフィンランド語は一層文學的目的に用ゐられるようになり、そして多くの卓越せる作家が現はれる様になつたのであるが、フィンランドに於て最も構想の豊富な作家は、千八百六十一年に生れたヨハニ・アホである。フィンランド語に關する重要な著述としてはレンリヨットの『芬瑞語辭典』と、ドンネの『フィン・ウゴル語比較辭典』(獨文)の二つである。

ロシア人居住地に近く住むカレリア人は、一般に露語を話す、カレリア人相互間では自國語を話す。

三、身體的特徴

カレリア人の體質的構造はホッソリしてゐるが、フィン人よりも一層均齊を得てゐる。疑ひもなく、ロシア人との雜婚によるもので、幾分ロシア人に似てゐる。その眼は普通青く、頭髮は黒又は赤味がかり、そしてその眉毛と伍して短くなつてゐる。その前額は低い。カレリア人はフィンランド人よりも進取的で、活潑で、社交的であるが、しかし、持久力に乏しい。

四、職業

カレリア人の従事する職業は雜多だ。農業は多く營まれてゐるが、其他、最も利潤のある職業としては、伐木、材木運搬、製材所への筏流し等。河川や湖水の漁業は、フィンランド人もカレリア人も共通の仕事で、また、カンダラクシャ灣(白海の北西分枝)で鮭・鯡・海獸の獵をもやる。千八百九十二年に係蹄禁止法が制定されてから、森林内の狩獵はめつきり減つた。行商も芬蘭人がカレリアの村々に店を開くやうになつてから之も減つて了つたといふ。

五、住居と食物

カレリア人の家屋は、耐久性ある基礎の上に建てられ、梯子で出入する。家屋内は廊下でつゞく住居と物置を分けてゐる。地上には羊舎と牛舎がある。カレリア人の主要食料は、魚類と野菜であるが、

小麦粉も使ふ。斷食日には鹽漬茸や、蕪茸や、ポトや、シチュウにした食用茸を食す。ブラガと呼ぶ手製の麥酒をつくるが、ヴォトカは飲まない。

六、宗教

芬蘭人がルーテル派プロテスタントであるのに對して、カレリア人は、ロシアの影響により希臘正教に屬してゐる。カレリア人は十三世紀に基督教に改宗した。

ロシア年代史は、千二百二十七年にヤロスラヴ大公が、多くのカレリア人に洗禮を施すため牧師を派遣したことを記録してゐる。また千三百五十一年の法王敎書に依れば、それ以前に、カレリア人は已にカトリック敎を信じてゐた。この敎書は、ロシア人がカレリア人を強制的に改宗させたことも報じてゐる。

七、歴史

タヴァスト人とカレリア人の言語は同一である。とはいへ、カレリア人は常に西方のタヴァスト人から分離してゐるばかりか、往々、鋭い敵對心さへ抱いてゐた。カレリア人の歴史は、十二世紀にスウェーデンの芬蘭侵入までは知られてゐなかつた。カレリア人のことが最初に問題となつたのは九世紀のことだ。即ち西紀八百七十七年に、ラブランドの諸威人ハロルド・ハールファガルの臣下が、フィンランドの使者の訪問をうけ、彼等の國フィンランドを荒廢せしめたカレリア人に對抗するための援助を乞ふたと云ふことを述べてゐる。更に又、カレリア人が他のフィン系諸族と共に、瑞典王エリク・エドムンドソン(八三三年歿)に納貢してゐたことの古話がある。又ノヴォゴロドのロシア人は已に十二世紀頃、カレリア人から貢物を取立ててゐた。尤もそれは武力をもつて強制したものらしい。それがためカレリア人は、千八百八十七年にノヴォゴロドの納貢吏を殺害し、そして反抗を續けてゐたことが記載してある。然し、ノヴォゴロドのロシア人とカレリア人の間には屢々

烈な闘争もあつたが、又、両者は味方し合ふこともあつた。例へば、千四百十三年にはカレリア人がフィン人を侵寇したことも擧げられてゐる。また彼等はノヴォゴロド側に味方してスウェーデン人と戦つたこともあつた。そして、千三百二十三年には和平が成り立ち、ノヴォゴロドのロシア人はカレリアの大部分をスウェーデンに分割したが、その後ピーター大帝は、千七百二十一年にカレリアをスウェーデンから奪取して之をロシア帝國の一部として了つた。

初代ロシア編年史の著者ネストル（八世紀）は、希臘よりドニエプルとロヴァト兩河に沿ひイルメン湖にいたり、ヴォルチョフ、ラドガ湖とネヴァ河よりフィンランド灣に至るまでの通商路——ノヴォゴロドもその徑路に當る——を擧げてゐるが、カレリア人も此等の地域に住んでゐたのだから、その土地を通過する交易に干渉したことは勿論だ。フィンランド灣岸の都市ピェルコは、この交易の中心地にして中世に於ては、ロシア人とハンザ同盟都市との交易の仲繼倉庫として相當榮えたものである。

(四) バルト・フィン 四族

右に述べたフィンランド人やカレリア人の外に、ラドガ湖から西方バルト海沿岸には相互に密接な關係をもつ所謂バルト・フィン人の四族がある。是等について次に簡単に述べてみよう。

1、ヴェブサス人 ヴェブサス人は又チュード人も呼ばれ、ロヤト河の上流（ラドガ湖の東）に住み、オロネツ管區のオネガ湖の南西にまで分布してゐる。ヴェブサス人とカレリア人とは十三世紀中葉以後に、クピンスク湖の北東（ヴォロゲダ部落の北方）地方に一緒に住んでゐたことの文献がある。それから百年ほどして、オネガ

の南東隅に僧院を建てたロシアの僧侶は、チュード人（ヴェブサス人）とラップ人とが、この湖水の近くに住んでゐたことを書き残してゐる。ヴェブサス人は、恐らく、ピェロゼロ湖（北緯六十度、東經三十八度）の近くに住むものとして、ロシアの編年史の述べてゐるヴェス人を代表するものだ。彼等は、現在、凡そ二萬五千人で、往昔の大民族のほんの名残りをとどめてゐるに過ぎない。ヴェブサス人とヴォーテス人とエストニア人とは言語の共通性をもつてゐる。

2、ヴォーテス人 ヴォーテス人は又南チュード人と呼ばれ、多分、昔のペテログラード周圍の地域たるインゲルマンランドの土着民であつたと考へられる。彼等は北からはカレリア人に依り、南からはロシア人によつて追はれ、現在は、その西北部に残存するに過ぎない。

彼等に關する記録の最初のもものは、千六十九年のネストルに依るものであるが、凡そ四十年前の統計によれば、インゲルマンランドのカレリア人と合して、やつと一萬四千人しかゐなかつたといふ。

3、エストニア人 エストニア人は、昔のリヴォニアの北、エストニア地方、サリス河の南部地方及びダゴ、オエゼル兩島に住んでゐる。近接せる昔のペテログラード、ブスコフ、ヴィテブスク諸地域の東部には、その小さなグループが今もなほ點在してゐる。彼等が外國人に知られてゐる Estii 又は Esti なる名稱は、タチトゥスが全く異つた種族に用ゐたものであつたが、その用ゐた Aestii に由來するものらしい。エストニア人は自己を呼ぶに Ma mes、その國を Viro と呼んでゐるが、その大部分は農民だ。

西フィン族としてはフィンランド人に次いでその數多く、總人口約百五十萬を算する。彼等は千八百十七年に

解放せられるまではロシアの農奴であつた。然し、千八百五十九年の反露暴動以來、やゝその状態も改善せられたが、その完全獨立前までは依然ロシアの壓迫下に苦しんでゐた。しかし、彼等の住地は他の同族よりも餘程西に寄り、文化の高いドイツ人やロシア人と接觸することが多かつた關係上、自然、文明の程度も高い。

エストニア語には二つの方言がある。その一はレヴァル方面で用ゐられてゐる北部方言で、他はドルバト地方で用ゐられてゐる南部方言である。その最古の言語學的資料は、十三世紀初頭の地名・人名の蒐集である。十九世紀以來、特に華々しい構想を以て注目せられる様になつたエストニア文學の最初の萌芽は、遠く十六世紀に溯ることが出来る。

4、リヴォニア人 リヴォニア人は、西リヴァランド（又はリヴォニア）及び北クールランド地方の古代フィン系住民で、彼等は、今では殆んどレット人に吸収せられてしまつた。中世に於ては、好戰的な掠奪民族として記載せられてゐる。その言語も、語彙の大部分をレット語より借用してゐるばかりか、造語法及び文章法にも、そのレット語の影響が少くない。リヴォニア語は、二十五年ほど前まで、凡そ二千の人々に、昔のクールランドの北西海岸の狭い細長い地帯で用ゐられてゐた。現在は殆んど廢語同様である。

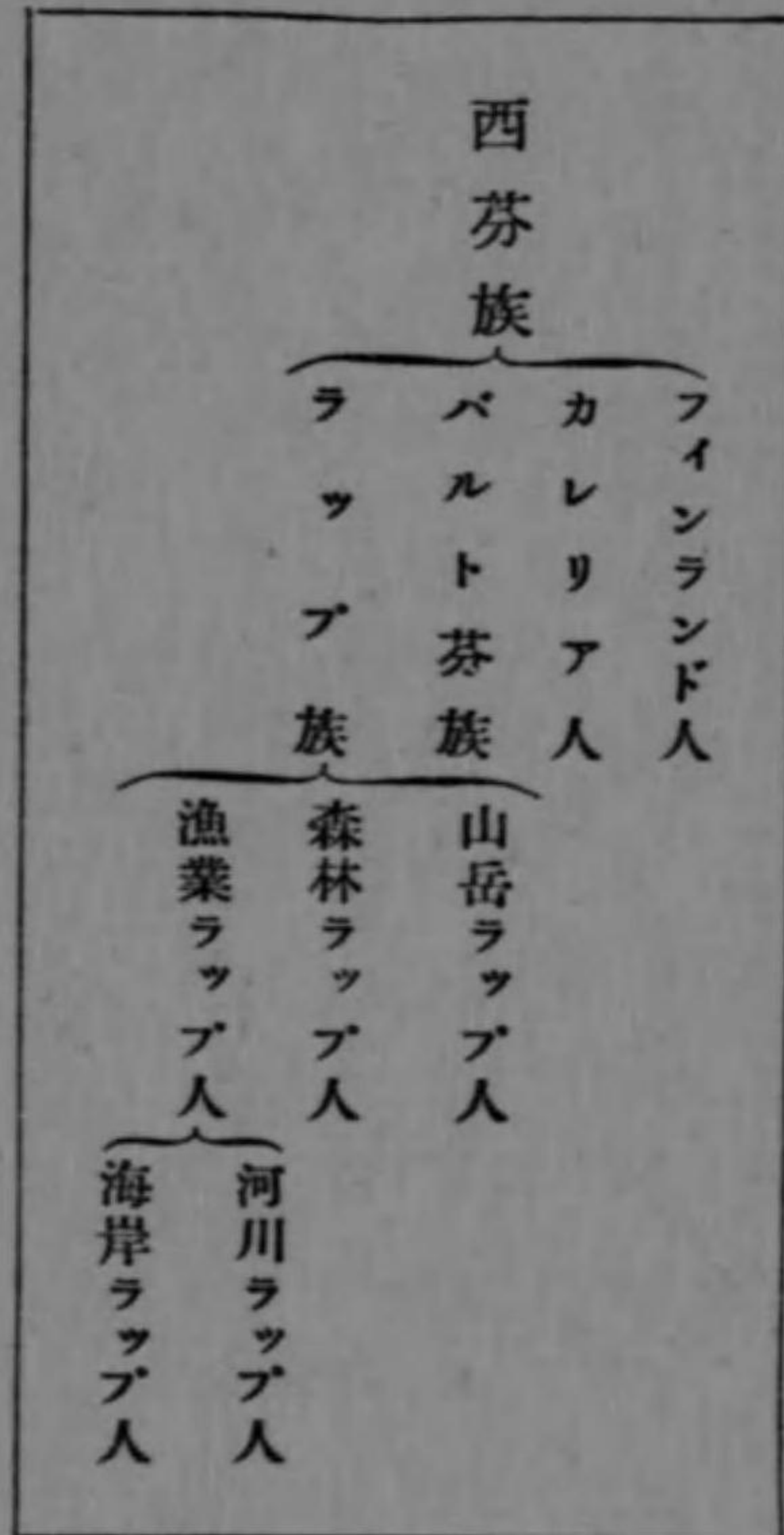
第三節 ラップ族

一、總論

ラップ人の國土ラップランドはスカンヂナビア半島の基部地方で、北緯六五——七一度に亘り、諾威の東部から白海の沿岸に及ぶ地方で、面積約三十八萬五千方呎（日本内地面積と略ぼ同じ）。ラップランド

といふ名稱は何んら政治的區劃の意味をもつことなく、諾・瑞・芬・露の諸國に及ぶラップ人の住む土地を漠然と指示したものである。この地域は、諾威ではフィンマルケンの管區トロムセエの高原地方とノルドランドに及び、瑞典ではノルボッテンとヴェステルボッテンの兩行政区（アゼレ、ウメオ、ピテオ、ルレオ、トルネア等のラップ地方）、其外に五行政区がラップマルクと呼ばれてゐる。芬蘭ではエナレ湖周圍のウレオボルグ行政区の北部、露西亞ではコラ半島におけるアルハンゲル管區の西部である。瑞典におけるラップ人の南境は中部スウェーデンにまで及んでゐる。土地は殆んど生産的價値なく、高地は常に白雪を戴き、低地は一帶の荒蕪地で、ツンドラをなす部分も廣い。最高點は瑞典内にあつて、海拔二千百三十五米ある。瑞典領においては鐵鑛が発見されて以來、開拓が進んでラップランド中最もよき地方となり、ポトニア灣のルレオ港からゲリヴァラ及びキルナバラ鑛山を経て諾威海岸のナルビク港に至る鐵道も開通してゐる。ソ聯のこの方面への進出が鐵鑛の獲得を狙ふのだと言はれるのもこれが爲である。人口凡そ十萬と稱せられ、その内、純粹のラップ人は約三萬五千（諾威一八九一年約二萬八千、瑞典一九〇四年約一萬、ソ聯一八九七年約二千、芬蘭約四千）、現在諾威ではその數が増加しつゝあるも、他の地方では減少の傾向さへある。瑞典においては彼等はその遊牧生活を漸次やめ、瑞典人のうちに融け込んでゆくところもある。ラップ人は古北極人種に屬し、先史時代にはスカンヂナビアの大部分および芬蘭の全地域に分布してゐたものである。

ラップ人は言語的には芬族の西派と密接な關係があるが、人種的には可成り疑はしい位置にあることに就いては、前章において已に述べたところである。



ラップ人の住む地域は、スカンディナ비아半島の北、北極圏内にあり、太古、フィン人に依りそこへ逐ひ込まれたものである。

ラップ人は瑞典人からはラッヘル Lappel、露西亞人からはラバリ Lappari、諾威人からはフィンネル Fin-ner、芬蘭人からはラッパライセト Lappalaiset と呼

ばれてゐる。しかし、彼等自身はサブメラダース Sabmeladars (沼澤住民) 或ひはサメラツ Samelats と呼び、その國土を Sabmi, Sabme, Sami, Same などと呼んでゐる。これらからみて、ラップとは恐らく外人の附した名稱であらう。

二、ラップ人の分類

ラップランド人は山岳ラップ人、森林ラップ人、漁業ラップ人の三種に分けられ、その分布状態は彼等の居住する地帯の自然に従ふのである。山岳ラップ人と森林ラップ人は遊牧民で、この種族の代表的なものである。山岳ラップ人はその放浪生活において森林地帯における秋の住家がその中心點であつて、彼等は秋、そこに積み重ね式の倉庫を建て、そして十一月の初め、そこから東又は南方の森林地帯へと放浪を始める。瑞典では時として都會を訪れ、そして五月の初旬その倉庫に歸つて来る。しかし氣候が暖かくなると、山にあがつて家畜を牧し、チーズの貯蔵を準備する。そして十月には餘分の馴鹿を屠殺して冬のためにその肉を鹽漬にする。諾風では山岳ラップ人の生活はみじめなもので、冬は教會の近くに宿り、そして海岸をさまよ

ふ。山岳ラップ人の冬期の食物は美味しい獸肉や馴鹿乳や、チーズや、ライ麥で作られた菓子等である。森林ラップ人の遊牧生活の範圍はさほど廣くない。彼等は決して自己の地域外へは移住しない。その土地で相



第 29 圖 ラップ族の分布

續した權利や、毎年訪れる幕舎地をもつてゐる。四月か五月になると、その馴鹿を放牧する。しかし、蚊の出はじめる眞夏になると、再び馴鹿を集める。八月末にまた放牧するが、十月になると、もう一度集める。そして森林ラップ人の生活は山岳ラップ人のそれと同様だ。

山岳ラップ人の他に、諾威には河川ラップ人と海岸ラップ人とがある。河川ラップ人はその多くがフィン人の子孫で、牛を飼ひ、さゝやか乍ら土地も耕してゐるが、しかし、馴鹿の世話に山岳ラップ人に委任してゐる。海岸ラップ人は、色々な點からしてフィンマルクの海岸住民から區別することはむづかしい。芬蘭において漁業をいとなむ僅かばかりのラップ人

はエナレ湖の近くに住み、春になると海岸漁業のために諾威海岸にゆき、夏至の頃、もとの湖水に歸つて来る。昔、彼等の専業は野鹿の捕獲であつた。

ロシア・ラップ人も大部分は漁夫で、半遊牧生活をなし、ロシア村落に住居をもつものは極めて少い。平生かれ等のさまよふ海岸の位置に依り、ムルマン・ラップ人とテリアン・ラップ人の二つに區別し得る。ツンドラ地方や藪苔地方を彷徨ふ別個の種族たるフィルマン人（即ちフィンマン人）は、コラ半島の北部に住み、その特別の方言やルーテル派的信仰は、瑞典人との永い間の接觸によるものであらう。

ラップ語は芬蘭語と密接な關係があるが、その聲音學は全く異り、一層複雑である。それは主としてラップ人の接觸する諸民族の影響により、全く別種の、相互に理解し難い諸方言に分裂して了つたものだ。ラップ研究の權威ゲ・フォン・チュウベン男は、ラップ語を四つの方言に分けてゐる。またロエンロットに従へば、ノルウェー、カレリア、ロシア諸語の影響をうけ、更に、各地方において幾つもの方言に分れてゐるといふ。ラップ語は多くの語彙を諸・瑞・芬露の諸語より借用してゐる。彼等がその昔、古代ノルウェー語からも借用してゐたことは現代ラップ語のうちにアイスランド語よりも、もつと古いスカンヂナビア語形態の残存することに依つても知ることが出来る。ラップ語の語彙を分析して見ることに依つて、彼等が諾威人に接觸する以前の文明の状態を知ることが出来る。それによると、例へば、ラップ語の中における農業用語、金屬名、鍛冶屋の用語等はスカンヂナビア系のものである。これによつて是等の文化がそれぞれの民族から受け繼がれたものであることがよく解る。

ラップ文語は、餘程以前、傳道團によつて原形を變へられて了つた。學校用書と宗教書の他は、ラップ語で印刷せられたものは少ない。新約聖書が諾威系ラップ語に譯されたのは千八百四十年のことで、聖書全部が同一方言で印刷せられたのは千八百九十五年のことであつた。ロシア・ラップ語に譯された福音書は、マタイ傳の最初の二章にすぎない。ラップ人の民話や民謡は、彼等の言ひ傳へを蒐めて刊行せられたが、その中で古話類似の一は、中央アジアに於けるこの種族の家郷の名残りを保つものであつて、そこにはバイカル湖やアルタイ山脈についても語られてゐる。太陽の娘ニヤッヴィセナの物語は、馴鹿の馴養法についての奇妙な古俗談フオクローに充ちてゐる。

三、身體的特徴　ラップ人の外形的に顯著な特徴は身長の高いことで、平均身長は、男五フィート、女は四フィート九インチである。身體は一般によく均齊がとれ、然し、肢はむしろ短く、又狀になる傾向がある。肌色は暗色だが、美しく、毛髪の色は、ブロードや赤みがかつたものよりも、青味がかつた黒色か、灰色がかつた黒色である。眼は、黒色か、榛實色か、灰色である。身長は低く、ラップ人は、ヨーロッパにおける短頭人種で、その指數は八三である。顔面の廣さにおいて、男よりも女の方がツラン的であるが、何れの性にあつても、眼の開きはせまく、斜形である。鼻は幅が廣く、低い。筋肉はよく發達してゐる。皮膚の一般的特徴も容貌に關係のある脂肪組織の不十分な點は、他のヨーロッパ人と比較することはむづかしい。その皮膚のうすいのも、こゝに起因するのであらう。ラップ人の中では、他の低級種族に於ける如く、人指指ヒトサシが無名指よりも短い。

ラップ人はをだやかな、不快を感じぬ種族で、彼等の間では、暴力罪の發生したことがない。彼等の間に於ける唯一の違法は、その財産たる馴養せられた馴鹿の屠殺である。ロシア・ラップ人は、スカンヂナビア・ラップ

人よりも道徳的には低い。それは彼等が嘔吐きで不信、そして酒好きなのだからである。スカンヂナビアに於ては、ラップ人への酒類の輸入は、千七百二十三年來禁止せられてゐる。ロシア・ラップ人に文盲が多いのに比し、スカンヂナビアでは教育が一般に普及してゐる。

ラップ人は今なほ遊牧民であるが、馴鹿を飼ひ馴らしてから、その住地を變へることが餘程少くなつた。その生活は家長制である。

四、宗教

ラップ人の大多數は名目だけはクリスチャンで、スカンヂナビアではプロテスタント。アではオルトドックスである。キリスト教への教化の試みの始つたのは、瑞典では八世紀であるが、殆んど、十七世紀末まで彼等は公然と偶像を崇拜し、諾威では偶像禮拜は秘かに十八世紀まで續いてゐた。偶像禮拜は今日も尙、恐らく消滅してゐないであらう。舊來の異端的シャーマンの方法で埋葬されたラップ人の墓が千八百二十——二十六年に諾威で發見されたことがある。

五、歴史

ラップ人の歴史に關する資料は、彼等の接觸せる諸民族の文學に表はれた乏しい斷片的記述や、その言語的證據に基づくものだけである。彼等が永い間ヨーロッパの北西に進んでゐたその地理的位置により、ラップ人は、ヨーロッパにおけるツラン族西漸の最初の波を代表するものであることが分る。その言語的證據は西暦第一世紀代における彼等のスカンヂナビア人との交渉を表示するものだ。中世初頭ラップ人は、フィン人から *Skridfinnas* の名を以て區別せられてゐる。その語意は『走行フィン人』で、雪靴(現在の *ski*) から出たものだ。ブレーメンのアダム(十一世紀)は *Scritifinni* の名で、ラップ人の住地を瑞典と諾威の境界地方

に位置せしめてゐる。初期においては東部ラップ人の住地はずつと南へのびてゐた。その南端は十四世紀にはオネガ湖岸にも及んでゐた。十六世紀中葉にはサイマ湖に近い南東フィンランドの北緯六十度以南にも住んでゐた。しかも彼等は諾威と瑞典においては、中世までは、今日の居住地より南下してゐなかつたものと思はれる。

第四節 東フィン族

一、緒言

東芬族は、その居住地がカーマ河畔にあるゆゑ一名カーマ・フィン族とも稱へられ、その主要なるものはベルミヤーク人、ズイリアン人、ヴォチャーク人及びヴォルガ・ブルガル群(或ひはヴォルガ・フィン族とも呼ばれる)の四種族より成る。人口總數約三百萬人、これにヴォルガ・ブルガル族の一派たるバルカンのブルガリア人約三百五十萬人を合すれば約六百五十萬人となる。東芬族の分布區域は北緯五三——六五度、東經四二——五五度間の東部ロシアに散在してゐる。(芬族分布圖參照)。この地域は南西においては西芬族のカレリア人が會つて居住してゐたと言はれるヴラヂミル及びタムボフ管區にまで及んでゐる。東芬族のうちで、ベルミヤーク人、ヴォチャーク人、ズイリアン人等は、その住地がカーマ河畔のベルム地方に密集し、且つ、その言語及び風習が互に近親關係にあるところから、これをベルム族と呼んでゐる。

(一) ベルミヤーク人

ベルム族の第一分派を形造るベルミヤーク人が、實際には、ズイリアン人と同一民族として取扱はれてゐるの

は、その方言の差が少く、お互に『カーマの民』（コミ・モルト）といふ同一名で彼らが呼び合つてゐる點からでも分る。兩族が區別せられたのは單に中世紀末のロシア編年史以來のことだ。往昔、ベルミヤーク人は古代ブルガル人として有名であつた。彼等の國土は——スカンチナビアの古話に従へば——ビヤルマランドの名で知られ、その領土の大部分はカーマ河畔にあつた。千三百九十六年のロシア古文書は次の如く述べてゐる。『カーマ河はベルミヤーク人の全土を取巻く、そして、この河畔には多くの異教徒が住む。この河は南のタタール人の國へと流れ、カザンから七十ヴェルストのところでヴォルガ河に合流する云々』と。

一、交易と交易路

ベルミヤーク人は中世においては大家交易家であつた。彼等は千九十六年にヴォグルカ河（カーマ河の支流）とソスヴァ河（西シベリア）に沿ふてウラル山脈を越えて、ユグリアへの交易路を拓いたと言はれてゐる。當時、裏海からヴォルガ、カーマ、ドヴィナ、ベチョラ諸河の流域に沿ふて北極洋にいたる交易路があつた。この交易路に沿ふて三つの商業中心地、即ち、ヴォルガ河畔の都市ブルガル、コルヴァ河畔のチェルディン、ドヴィナ河畔の Cholmogor 等があつた。ブルガルへ来る商品はベルシャ、ボハラ、アルメニア、アラビア、またある種のもは、遠く印度から運び込まれた。これらの商品の一部はベルミヤーク人に依り、西伯利亞から手に入れた毛皮と交換され、ベルミヤーク人は永い間この重要な交易の獨占者であつた。然し、ノヴゴロドの商業共和國は、十一世紀初頭から、その交易的優位によりベルミアと闘ひ、千百年遂にこれを屈服せしめたが、其後ノヴゴロドが崩壊してから、千四百七十二年にはチェルディンもベルミアも共にモスクワ公のため侵略せられて了つたのである。然しそれにも拘はらず、ベルミヤーク人は、十六世紀末までツァールの配下として民族的面目を保持してゐたといふ。

二、住地及び人口

ベルミヤーク人はウラル西麓のベルム、チェルディン、ソリカムスク地方に住む。彼等はベルム方言のコミ語を話す關係から、現在はコミ・ベルム人と呼ばれ、ラテン字母をもつてその言葉を綴る。人口は千八百九十七年に約五萬人であつたものが、最近では約十五萬人といはれてゐる。その生計は漁業・狩獵・農耕で、農法は今なほ原始固有の方法を保存してゐるが、漸次、ソヴィエト化されつゝある。その宗教は現在キリスト教だが、最初、彼等の間にキリスト教を導入したものは聖ステフェン僧（一三七五—九六年）であつた。元來、希臘正教は不思議・他民族をスラヴ化す魔力をもつ。それがためツラン民族にしてギリシャ・カトリックに改宗したものは殆んど皆スラヴ化して了つた。フィン系残存民族のうちで、ベルミヤーク人は最もスラヴ化され、ロシア化されてゐる。しかし、彼等の服装はロシア人と異つて、多少タタールのところがある。女は特に保守的で、今なほ東洋風を固守してゐる。更に、彼らの葬儀にいたつては、固有の、羊や鶏を犠牲にする遺風を存してゐる。

(二) ズイリアン人

ズイリアン人は北露のベチョラ、アルハンゲルスク地方よりウラルの北へかけて分布してゐる。アルハンゲルスク州においては千八百九十九年に全人口の六十パーセントがズイリアン人であつたといふ。其他の住地としてはウスト・シズルク州（シツラ河畔）とヤリンスク州（ヴィチエグダ河畔）の三分の二の地域で、又、ヴィアトカと

業労働者や牧人としてサモエード人を使用してゐる。

九世紀以來のロシア人との接觸により、ズイリアン人の服装は次第にロシア風となり、又ロシアの田園生活に同化せられ、漸次、遊牧生活を捨てるやうになつた。彼等はロシア農民と同様、丸太作りの家に住み、大村落を形成してゐる。彼等はヴォトカ酒を好む、その上、麦芽から一種のビールを醸造して飲む。

三、宗教および言語

ズイリアン人は、十四世紀後にベルムの僧正となつた聖ステフェンの手に依りキリスト教に改宗し、そして現在はギリシヤ正教の信心深い信徒であつて、彼等の住む殆んど凡ての村落には立派な教會がある。

ズイリアン人の言語は、ベルミヤーク人の言語と密接な關係があるので、彼等は互に自分の言葉で話し合ふことが出来る。又ロシア語からの借用語も多い。又ズイリアン人はサモエード人から馴鹿の飼養法を會得したので、その方面の語彙にはサモエード系のものが多い。

フィン・ウゴル族のうちで、ズイリアン人は、ハンガリー人について、僅少ではあるが、最古の言語的資料をもつてゐる。その資料の多くは十四世紀後半のものであつて、主として、福音書の翻譯で、恐らく、聖ステフェン僧の業績と察せられる。これ等は、一部分は聖ステフェンが古代スラヴ文字から作出したズイリアン文字で書かれてゐる。その他にはズイリアン人は文字も文書も有つてゐない。

(三) ヴォチャーク

ヴォチャーク人はベルム族中の第三分派で、ズイリアン人と密接な關係をもつてゐる。その居住地域はズイリアン人の住地の南部にあつて、大部分はヴィアトカ管區のヴィアトカ河と下カーマ河の流域に住んでゐるが、又ウーファ管區にもゐる。彼等の多くは十六世紀にこゝへ移住して來たものであるが、この地方は氣候もよく、肥沃であるため、自然、その體格も良くなつた。ヴォチャーク人は、普通、身體的に虚弱で、性質は温順で、家族的生活をしてゐる。彼等の知的程度は左程高くない。彼等は農民であると共に、勤勉で巧みな工人でもある。ヴォチャーク人といふのは芬語で、ヴィアトカ人といふのは露語で、彼等自身はウドムルト人と呼んでゐる。その人口は約五十二萬人、その中約四十萬人はウドムルト自治共和國に住んでゐる。

一、言語・宗教・歴史

ヴォチャーク人の言語はウドムルト語と呼ばれ、その近親族たるベルミヤーク人、ズイリアン人の言語の如く、チュヴァシ語、タタール語、ロシア語からの外來語が多く、文字はロシア字母を使用してゐる。

ヴォチャーク人はベルミヤーク人やズイリアン人と同時代に基督教を採用したが、それに就てのハッキリした記録は残つてゐない。今では他の近親族と同様オルトドックス教徒だ。芬蘭の學者カストレーン(一八五一年)は、彼等の間には尙ほシャーマン教徒が残つてゐると記してゐる。

中世紀においてはヴォチャーク人は、ノヴゴロドの移民に依りヴィアトカ河畔に建てられたチュリノフ共和國に臣従してゐると言はれるが、この共和國は千四百五十九年、モスクワ公に依り倒されるまで存続してゐた。又一説には、この共和國は自發的に露帝フェオドル・イヴァノヴィチに歸服し、千五百八十九年までその民族的の

獨立を保持してゐたとも言はれる。また彼等自身の傳説に従へば、ヴォチャーク人の族長は彼等の要塞所在地アルスコイ・ブリゴロドの附近なるカザンカに住んでゐたが、後、そこからタタール人に追はれて現在の地に移住したといつてゐる。

(四) ヴォルガ・フィン族

東芬族中のヴォルガ群は、ヴォルガ・フィン族、或ひは又ヴォルガ・ブルガル群、或ひは單にブルガル族とも呼ばれ、中部ヴォルガ地帯に住み、それは三つの主なる種族から成立つてゐる。ベルム語群がスラヴの影響を多くうけてゐるのに對して、ブルガル語群はタタールの要素を多分にもつてゐる。この對立的現象は兩種族の外形にまで反映してゐる。ヴォルガ・フィン人はもはや遊牧民ではなく、周圍のスラヴ人同様、定住生活を營んでゐる。ゴート史の筆者ヨルダネス（西紀五〇〇年頃生）に依れば、往昔、ブルガル人はポントゥス（黒海の希臘名）の北方に住んでゐたといふ。又アラビアの著者イブン・フォズランに依れば、彼等はヴォルガ中流のカーマ河の落合ふ地點に近い地方に住んでゐたと云ふ。フォズランは九百二十一年にヴォルガ河左岸カザン附近のブルガル人の首都ブルガルを訪れ、それに就いて詳しく報告してゐる。ブルガル人が回教を採用したのは聖年で、彼等の大王國『マダナ・ブルガリア』は八世紀から十四世紀まで存続し、十五世紀にカザンに併合されてしまつた。

ブルガル人の一部は匈奴の歐洲侵入に際し、彼等と共に西進してドナウ河を渡り、五—六世紀の頃バルカン半島のモエシア地方に移り、九世紀に基督教を採用してブルガリアを建國、そこで、人種的タイプのみか、その

固有の言葉をさへ失つて了つた。斯くして、現在のブルガリア國の名稱にのみ、僅かにその起源を語るものを殘してゐるに過ぎない。現在のブルガリア王國は單に十七世紀以來の存在に過ぎぬ。

次に、ヴォルガ・フィン群の主要なる三族、モルドヴィン人、チェレミス人、チュヴァシユ人等に就いて述べてみよう。

1、モルドヴィン人　モルドヴィン人は自身ではモルダワ人又はモルドワ人と稱し、ウラルの西方、サマラ、シムビルスク、ベンザ諸州における中部ヴォルガ地域に住んでゐる。モルドワ人は二つの亞族に分た。即ち、スーラ、モクシャ兩河の流域に住む東部モクシャ族と、オカ河の流域に住む西部エルジャ（又はエルサン）族とで、エルジャ族はヴィアトカ、カザン、ニズニ・ノヴゴロド、ベンザ、サラトフ、タムボフ、シムビルスク諸地方に散在する。

名稱・生活法・宗教・人口・方言

『モルドワ』は彼等の言葉で『人間』といふ意味である。モルドワ人の二亞族は已にルブルクイスに依り、モクセル、メルダス又はメルヅアスの名で擧げられてゐる。モルドワ人の名で彼等のことを記載したヘルベルスタインは、彼等がよき漕手で、定住地をもつた點でチェレミス人とは異り、その住地が肥沃なため夙にその遊牧生活をはなれ、農耕と牧牛に従事してゐたと述べてゐる。往昔は好戰的な殘酷な種族であつたが、現在では、平和で勤勉な農夫で、また養蜂家でもある。その古い風習については現在何物も残つてゐない。彼等のもとシャーマン教徒であつたが、アンナ女王（一七三〇—四〇年）の時代にキリスト教に改宗したと言はれる。そして今では非常にスラヴ化してゐる。現在、人口約百三十五萬人、その中モルドワ自治

共和國に約六十万人居住する。モルドワ語にはエルジャ、モクシヤの二方言があつて、いづれもチュヴァシ語、タタール語、ロシア語等からの多くの借用語を含み、文字はロシア字母を使用してゐる。

歴史

ヨルダネスは、モルドワ人をモルデン人の名で、ゴート族の指導者ヘルマナリクに配下として取扱つてゐるが、其後、どの程度にまで彼等がマグナ・ブルガリア王國に從屬してゐたかは判然しない。又ネストル(十一世紀)はフィン人として彼等を記載し、其他多くの中世の著者も、多少なりとも彼等について記述してゐる。モルドワ人は千四百年以後モスクワのヤロスラヴ・スヴィアトスラヴィチ及びその後繼者により度々襲撃され、その都度これを斥けたが、最後にはその領土の一部を奪はれた。しかし其後モンゴル族の侵入に遭ひ、ロシア人もモルドワ人も共に蒙古に臣従せしめられて了つた。そしてその後、ロシアにおける蒙古の支配が終局をつぐるや、モルドワ人は同族のチェレミス人と聯合して再びロシア人に對抗したのであるが、後、ヴォルガ地方におけるロシアの領有が確立するや、モルドワ族もその勢力下に歸服せざるを得なくなつた。

2、チュレミス人

『チュレミス』とはモルドワ人の呼稱で、『東方人』の意。彼等自らはマラ(人)或ひはマリ人と稱してゐる。彼等は中部ヴォルガ河畔、とくに西岸(牧草地)及びカザン地方に住んでゐる。彼等を『牧草地チュレミス人』といひ、これに對し山岳地方に住む少數のものは『山岳チュレミス人』と呼んでゐる。彼らはともに強健な身體をもつてゐる。彼等はカザンの北部、カーマ及びヴィアトカ兩河に沿つて居住、殊にベルム、ヴィアトカ兩州の南部に多い。彼等はコストロマ、ニズニ・ノヴゴロド、ウーファ、オレンブルグ諸州にも分布し、總人口約四十三萬人、その中マリ自治州に約二十五萬人ゐる。

言語・生活・宗教

言葉はチュレミス(マリ)語で、その方言は牧草地的方言と山岳的方言(或ひは又、西マリ語、東マリ語といはれる)とに分れ、文字はロシア字母を用ふ。チュレミス語はチュヴァシ語、タタール語、ロシア諸語の強い影響をうけてゐる。チュレミス人は遊牧生活を捨て、現在は活動的な農民だ。彼等は敬老の美風を有すると共に崇祖の念も強く、二、三十戸づゝの小村落をつくり、共同生活をいとなんでゐる。永いこと蒙古の支配下にあつたにも拘はらず、回教を保持してゐるが、シャーマン教も潜在的にはある。キリスト教は十八世紀中葉に採用したが、これは名義だけで、一般にはなほ異教徒だ。

歴史

ヨルダネスはチュレミス人のことを、ゴート王ヘルマナリクに依り西紀三百五十年に歸服せしめられた種族としてスヴェムニスカン人の名で記載してゐる。チュレミス人なる名稱はロシア史においては最初ネストルに依り十一世紀に記された。そしてロシアの古文書は、彼等をマグナ・ブルガリア王國の中心的住民だと述べてゐる。恐らくこゝで有名なマグナ・ブルガリア王國の一部を形成してゐたのであらう。蒙古人によりこの王國が瓦解せしめらるゝや、チュレミス人はカザンにゐたタタール汗に臣従した。それ以來、彼等はロシア史において述べられてゐるやうに、常にタタール人に味方し、ロシア人と頑強に闘つてきた。そしてカザン汗の崩潰後においても尙、その敵對をつゞけて來たといはれる。當時、はなはだ野性に富み、殘酷で強慾な種族であつたチュレミス人は、遊牧民としてヴォルガ、ヴィアトカ兩河間の森林地帯をさまよつてゐたといふ。またチュレミス人は曾つてウゴル系諸族と共に生活してゐた爲に、彼等の生活法はウゴル族にも似てゐる。

3、チュヴァシ人

この種族はヴォルガ・フィン族のチュレミス派とタタール人との混血で、その生活

地帯はヴォルガ河の右岸、スラ河畔、カザン、シムピルスク、サマラの諸地方と、それに僅少のものが、サラトフ、ウーファ、オレンブルグに住んでゐる。人口は千八百九十七年に約八十五萬人あつたが、最近では約百十二萬人、その中約六十七萬人はチュヴァシユ自治共和國に居住し、言語はチュヴァシユ語である。彼等は身體的にはフィン人に似て、頭は圓く、顔貌は扁平、そして兩眼は重くない、だが、これは永年に互るタタールの要素の影響に因るものだ。その衣装は全くロシア風となつてゐる。勤勉で、道徳的で、氣質の明るい種族だ。彼等は農民で牧牛者で養蜂家であると共に、漁夫で又獵師でもある。また彼等は十八世紀以來、その大部分がキリスト教徒になつたが、なほ魔法僧を尊敬し、舊來の民族的なるシャーマニズムをも固守してゐる。

第五節 勃牙利の諸民族

一、緒言

ブルガリア族は、元々ツラン系民族であつたことは既に述べた。今から約一千百年前には、ウラルの麓、ヴォルガ河の附近において、東・北・西にはマジヤール、バシキール、ズイリアン、ヴォチャーク、チェレミス、モルドヴィン等のツラン諸族を控へ、また南においては、カザール帝國と隣接してマグナ・ブルガリア國を建設して居た。

ブルガリア人は、其の昔、ツラン系の美しい言葉を持つて居つたのであるが、永い間、スラヴ民族と生活を共にしてゐたため、かれ等と混血し、スラヴ文化の影響を受けること多く、遂に、ツラン系ブルガリア固有の言葉を忘れ、今では、スラヴ語を話し、スラヴ民族の宗教たる希臘正教を信奉して居る。これは恰も、ツングース系

の滿洲人が、自己固有の言語を忘れ、今日、漢語を話し、漢人の風俗習慣を受容れて居るのと同様である。しかし、流石に、彼等ブルガリア人の胸底深く流る、ツランの血の故か、彼等の心、彼等の魂は、常に、ツラン同族の方へ引付けられ、トルコ人やハンガリー人に對しては、特に民族的親しみを感じて居る。

二、勃牙利人

現在、バルカン半島に國をなすブルガリア王國の住民は、決して我々の考へる如く單一なものではなく、いはゆる純粹のブルガリア人は唯だ全人口の八〇%を占めるにすぎず、他は異人種なのである。また、ブルガリア王國がブルガリア人の全部を包含すると考ふることは甚しき誤謬であつて、少くとも國內にゐるブルガリア人よりも多數のブルガリア人が隣接諸邦に散亂居住してゐることを忘れてはならない。人口密度の最も高い地方は、ソフィア、キュステンデル、ズブリツァ、サモコフ等の諸都會を包含する外來分子の僅少な西部中央ブルガリアである。然し、その地方には、尙ユダヤ系住民、少數のトルコ人とジブシーが混入し、また首府ソフィアには、全歐からの外來分子、特に、舊奧洪帝國領土に屬する分子が多く居住してゐることは注目し得る。ブルガリア分子は、西部ダニューブ・ブルガリア(ヤントラの西部)においても可成りその分布が濃厚で、ブルガリア人の比例は、全住民の九〇%以上にも達してゐる。これに反し、ブルガリア分子の稀薄なのは、ルーマニア人の多數居住するヴィチン地方と、ルーマニア人とトルコ人の特に多數居住するニコボル地方の七〇%弱である。

東部ダニューブ・ブルガリアでは、都市人口の大部分をブルガリア人が占めてゐる。然し、それらの地方のうちにも、ブルガリア分子の二〇%以下のケメンラール、オスマン・パサールのあることを忘れてはならない。東部



第 31 圖 ブルガリア王國の位置

中央ブルガリアでは、トルコ人が他へ移住してつたので、ブルガリア分子が俄然優勢となつた。外來分子の混ぜざる純粹のブルガリア住民地帯はイクチマネル、スレドナ・ゴラ、そして、可成り多數のボマク（回教ブルガリア人）の殘存するロドープ地方等である。これに反してブルガリア分子の微弱なのは、特に、ギリシャ人、トルコ人の多數居住する中央ブルガリアの東部であつて、ブルガリア人は、全住民の三分の一以下にすぎない。然し、最近、トルコ人の本國への移住と、それに對するブルガリア人の交代により、このパーセンテージはやゝ高まつた傾向がある。

南部ブルガリアでは、ブルガリア人は主としてその西半部、即ち、ストルマ、メスタ兩地方に住み、また東半部、即ち、アルダ河流域には、多數のトルコ人が居住してゐる。この地方のブルガリ

ア分子は、ボマクだけであると言へる。

ソフィア大學のア・イシルコフ教授によれば、ブルガリア王國の全人口四百三十三萬七千五百十六人（男二百二十萬六千八百八十五人、女二百十三萬八千二百二十八人）のうち、三百四十九萬七千九百七十四人（八〇・六四％）がブルガリア人で、また、ブルガリア語を母國語とする住民の全部を算入する時は、三百五十二萬三千三百六十七人（八一・四二％）になると言ふ。（ブルガリアの人口に就いては、或ひは五百萬人といひ、或ひは六百萬人といふ説がある。）

三、ブルガリア人の體型

ブルガリアには幾多の民族が交錯混血してゐるので、一定の體形を抽象して説明することは甚だ難しい。ところが、我々にとつて甚だ都合なのは、ソフィアのエス・ヴァテフ博士が、三十萬人以上のブルガリア人（兵士、學生、其他の壯年者を主として）に就き、人體計測學の立場から、約二十年間、研究した貴重な資料の存する事である。ヴ博士はその資料に基き、眼・毛髪及び皮膚の色に従つて壯年ブルガリア人を次の三つの型に分類してゐる。

- 一、ブロンド型——碧色の眼、ブロンドの毛髪、白い皮膚……五％
- 二、ブリュネット型——褐色の眼、褐色の毛髪、暗色の皮膚……五〇％
- 三、混合型——灰色の眼で褐色又はブロンドの毛髪、褐色の眼でブロンドの毛髪、皮膚は白色又は暗色……四五％

ブロンド型ブルガリア人は、主に、ダニューブ・ブルガリアとマケドニアの一部で見られる。

ブリュネット型ブルガリア人は、多く、ダニューブ・ブルガリアの中部に、少數のものは、西部中央ブルガリ

アとマケドニアに見られる。

四、ブルガリア人の言語

ブルガリア王國の公用語は、言語學上スラヴ語に屬するブルガリア語であるが、國內で用ゐられてゐる言語は、ロシア語、トルコ語、マジャール語、アルバニア語、ルーマニア語、セルボ・クロアチア語、ドイツ語等の多數に達してゐるが、今は、唯、ブルガリア語に就て簡単に述べる。

ブルガリア語には、非常に多くの方言がある。ブルガリアの殆んど凡べての方言が、色々の點から觀て、他のスラヴ語に類似してゐることは、比較スラヴ方言學から觀て甚だ興味がある。ブルガリア語の顯著な特徴をあげると、次の四點である。

- 1、語尾に依る格變化が消滅し、その代りに、ローマンス語のやうに前置詞が用ゐられる。またルーマニア語やアルバニア語の如く、第三格(與格)と第四格(目的格)が同形となつた。
- 2、動詞の不定法が全くなつた。それで、動詞の原形は、現在直說法第一人称單數に相當する。
- 3、他のスラヴ語には、全然、見られない後綴定冠詞が用ゐられる。例をあげると、(文字は印刷の都合上ラテン字を用ゐた。)

男	性	vol	[牝牛]	vola
女	性	krava	[牝牛]	kravata
中	性	more	[海]	moreto

アンダーラインで示したのが、他國語の定冠詞に相當する。この點も、アルバニア語とルーマニア語に共通するところである。

4、ブルガリア語のアクセントとクワンティタとは、全く、セルビア語と同じと言つてよい。アクセントは上昇アクセント、低下アクセントの二つに分けられ、またクワンティタにも、一、三特筆すべきものがあるが、ここでは省略する。

五、勃牙利人の宗教

ブルガリア人は主として國教たるギリシヤ正教を信奉し、その獨立の教會を有してゐるが、また回教、カトリック教、新教等を信するものも少くない。

回教ブルガリア人は、ボマクと言ふ總稱——ロドーブではアフリヤーニ、マケドニアではトルベシと呼ばれてゐる——で知られてゐる。ブルガリア全國におけるボマクの總數は約四十萬人強である。

回教のブルガリアに入つたのは、餘程古いことで、その最も隆盛を極めたのは、セリム一世の治世(一五二二—一五二〇年)であつた。其後、土耳其帝國ハメド四世とその大宰相ムハメッド・キュブリュリユの時代(一五六—一六六一)に、チェビノ地方で回教が入り、またさらに十八世紀において、其他の地方でも、回教への改宗が盛んであつたとの記録が残つてゐる。多くの場合、ブルガリア人の回教化が企てられる時は、強制と暴力を以てせられた。其故、ボマクと呼ばれるやうになつたといふ。ボマクとは、語原的には、マク(受難、暴力)に由來するものであると言ふ。ここにも宗教受難史の反映がみられるのである。

都市において、ボマクは、トルコ語とトルコの慣習を採用するやうになつた。然し、農村ではブルガリア語、ブルガリア的慣習に對して忠實であるが、然し、この宗教が國民意識を殺しつゝあることは、都市、農村の何處

においても否定することは出来ない。ボマクの多くは、今日においてはトルコ人と殆んど無関係であることを欲し、寧ろ、トルコ人より遠ざからうとしてゐる傾きがある。然し、基督教ブルガリア人に對するボマクの憎悪は餘りに猛烈である。近年、基督教ブルガリア人の支配下にあることを快しとせず、ボマクの多くは、トルコ人と共に小アジアに移住して了つた。

獨立戦争前において、可成り多くのボマクが、オッサム、ヴィット、パネガ、スラット諸河流域の谿谷に住んでゐたが、千八百七十六年代において、また露土戦争に際し、急速に移住して了つた。舊ブルガリア地帯で、最も多くボマクの住んでゐるのは、ロドーブ、ベシテラ、スタニマカ、フィリッポベルの諸地方で、その總數約一萬五千人に達してゐる。チェビノはボマクの中心地にしてブルガリア政府は、ブルガリア精神作興のため、チェビノに學校を建てんと試みたが、その結果は失敗に終つた。宗教が國民精神を打ち負かした生きた例證を我々は茲にもみることが出来る。舊ブルガリア地帯のボマクは總數約二萬一千人で、その全部が農民である。

南部ブルガリアにも多くのボマクが住んでゐる。アルダ、メスタ、ストルマの諸地方、特に、ドエブレ、アハ・チェレビ、エグリ・デレ等には、大約十萬人のボマクがゐると言ふ。

バルカン戦争に際し、チャタルチャを占領したブルガリア軍は、ロドーブ及び他の地方のボマクの大部を、脅迫、強制、或ひは説教者の甘言、または、物質的誘惑等を以て、ギリシヤ正教に改宗せしめ、それぞれの教區に編入せしめた。

第一次世界大戦の終末が、ブルガリアにとつて、餘りにも香ばしからぬ時、此等のボマクは、將來におけるブ

ルガリア精神の擔ひ手として、可成りの期待をかけられる迄にブルガリア化せられてゐたのである。しかし、ワイガントの著書によると、現在、純回教徒としての生活をしてゐるボマクは農村に残存し、都市においては可成り減少してきたと言ふ。

六、ポーロ教徒　ボマクと、全く、對立的立場にあるのは、ブルガリア語でポーロ教徒(バヴリケニ)と呼ばれてゐるカトリック・ブルガリア人である。バヴリケニは、主に、ダニューブ河流域や東部中央ブルガリアの村落——スヴィシトフ、ニコボルや、マリツァ平原——に住んでゐる。以前は、非常に多數のバヴリケニがブルガリアにゐたが、十八世紀末葉にその大部分はギリシヤ正教に轉じ、また、小ワラキアやバーナト地方に移住するものもあつた。

バヴリケニと言ふ名前は、中世アルメニアのポーロ教派との混同から起つたもので、この教徒は、フィリッポベル地方において、ブルガリアに對しビザンチンを掩護せんがために、幾多のコロニーを形成してゐた。近世の或時代、ブルガリアにおいて非常な勢力を有して、而も、國境地方にまで擴がつてゐたボゴミル教徒は、このポーロ教徒と、多くの共通點をもつてゐた。それで、ブルガリア人のうちでは、現在のバヴリケニを、古代アルメニア及びシリアのポーロ教徒のブルガリア化せられた子孫とみるものと、ブルガリアのボゴミル教徒の子孫と見るものゝ二派がある。

ヴァティカン所蔵の古文書——バーナトのブルガリア・フランチェスコ派僧侶の書いたものであると言ふ——によると、今日のカトリック・ブルガリア人は、十七世紀までは、ポーロ教徒であつた。また、ボスニアのフ

ランチェスコ教徒ベテル・フォン・ゾリは、十六世紀末葉にカトリックに改宗したと言ふ。バヴリケニとオルトドックス兩僧侶間の憎悪は、バヴリケニ高等教育機關の排除と共に、バヴリケニのカトリックへの轉教を速かならしめた原因である。

十七世紀において、ブルガリアに於けるカトリック教は可なり強大のものとなり、ブルガリア人の生活においてカトリックのミッションは重要な役割を演じてゐたが、然し、塙土戦争と、西ブルガリアの革命的運動とは、カトリック教徒の迫害を呼び起した。その結果として、多くのカトリック教徒は、ハンガリーに遁れた。千九百三十年におけるバヴリケニの數は、大凡二萬三千人であつたと云ふ。

十九世紀後半におけるギリシャ、ブルガリア間の教會戦争に際し、多くのマケドニア人は、ギリシャ教會と關係を斷ち、カトリックに轉向した。カトリック教徒の多く集つて生活してゐるのは、ククシュ並びにその附近と、イエニジェ・ヴァルダルである。千九百十四年の世界戦争の爆發に際し、反戰的、反獨的なブルガリア・カトリック教徒の多くは、ハンガリーに遁れたが、戦後再び歸國し、バーナート地方と氣候の類似したダニューブ・ブルガリアにコロニーをつくつた。

プロテスタントブルガリア人は、サモコフやロヴェツチに完備した學校をもち、その上に、多くの教會、優秀な説教者をもつてゐるのにも拘はらず、その勢力は可成り弱く、その信徒は僅か六千二百五十四人にすぎない。プロテスタントの最も多く居住するのは、南ブルガリアのラスローグである。

七、勃牙利人以外の諸民族

ブルガリア王國全人口の二〇%強が、ブルガリア人以外の民族であることは

前に述べた。これ等民族の大部分は、過去の各時代において、ブルガリアに移住し來つたもの、子孫なのである。

ギリシャ人は、主に、東部中央ブルガリア、特に、黒海沿岸地方に生活し、純ギリシャ人コロニーとしては、ソソボル、メッセムヴリヤが有名で、混合コロニーとしては、アンキアロ、ブルガス、ヴルナ、ヴシリコ、アクトボル等がある。此等のコロニーの周圍にも、多くのギリシャ人の村落がある。ギリシャ人コロニーの第二群は、マリツァ平原、即ち、フィリップベル、スタニマカとその周圍の三、四の村落に存在する。第三群は下部ツンジャ即ち、カバクリ地方に在る。その昔、南ブルガリアには、可成り多くのギリシャ人が住んでゐたが、近年、その大部分は國外に四散して了つた。多くのギリシャ人は、現今、千九百十五年のトルコ・ブルガリア條約に依り、チモティコ、アドリアノーベルの附近に居住してゐる。黒海沿岸地方には、すでに古代より、ギリシャ人が住んでゐた。フィリップベル、カバクリ、チモティコ、其他の地方に、ギリシャ人が住み始めたのは、中世以來の事である。ギリシャ人が、ブルガリア國內において、永く、その命脈を保つてゐるのは、一に移住せるブルガリア人とガガウス人のギリシャ化の結果と斷言し得るのである。現在、ブルガリア國內のギリシャ人の數は、急速度に減少してきた。千九百年において、ブルガリア國內のギリシャ人總數は六萬九千二百人であつたが、千九百十年には、四萬七千九百三十五人に減少してゐる。そのうちの四千六百九十人はブルガリア語で『サラカチャニ』と呼ばれる遊牧者である。彼等のうちの三三・三三%以外は文盲であると言ふ。

ガガウス人 ガガウス人は、ギリシャ教會に屬してゐるが、その通用語はトルコ語である。彼等は、十三世紀の中葉に、ブルガリアに多數居住してゐたクマーン人の子孫であるが、その大部分は、ブルガリア人やギリシャ

人と同化して了つた。今日、ガガウス人は、ブルガリア・ガガウス人、ハッサル・ガガウス人の二つに分けられる。前者は東部ダニューブ・ブルガリアに住み、後者は黒海の沿岸に住んでゐる。ブルガリア・ガガウス人はトルコ語を通用語としてゐるが、その慣習、歌謡、姓名はブルガリア的であるが、然し、全くブルガリア化してゐるとは言へない。他面、ブルガリア化したガガウス人は、ブルガリア語を通用語とし、もはや、ガガウス人とは呼ばれてゐない。然し、彼等の両親は、尙、トルコ語を用ゐてゐるのである。彼等は其の生活をブルガリア人と共にしてゐる。極度のブルガリア化のために、近時、ガガウス人の数は減つてきた。だが、東部ダニューブ・ブルガリアには、昔はなほ多数のガガウス人（四千七百六十九人）が住んでゐたが、今日では、二千八百二十四人に減少して了つた。彼等はまた、『スルヅチ』と言ふ別名で呼ばれてゐる。

トルコ人 トルコ人はブルガリア國內の外國人中最も多数を占めてゐる。近年間斷なき國外への移住に依り、その数は可成り減少して来たといへ、尙、全人口の一二%を占めてゐる。トルコ人のブルガリア國內に於て最も人口密度の大なる地方は、北・中央・南ブルガリアの東寄り地帯で、この地の凡べての都會に住んでゐる。特に多数トルコ人の住んでゐる都會としてはヴィチン、ニコボル、ルスチュク、ヴァルナ、シュムラ、ラスグラッド、チュミュルチナ、クサンティイ等である。過去において彼等は、略奪と暴虐に依り獲取した都市及び地方を、露土戦争（一八七七一—一八七八年）に際し失つて了つた。

ギリシヤ教徒と同教徒の關係は千八百八十四年に東ルメリアでは七一・五八%對二六・九一%であつたが、しかし、千九百十年には、八三・九九%對一三・八八%に減少した。回教トルコ人の多く住む地方はチルノヴォで

あつて、一八・二六%の回教トルコ人が住んでゐる。

現在、ブルガリア全國のトルコ人總數は、大約五十五萬人で、その内の二十萬人は、多島海沿岸に住んでゐる。然し、トルコ語を通用語とするものは甚だ多く、トルコ人以外に、ガガウス人、アルメニア人とジブシーの一部、ボマク、韃靼人等が、トルコ語を用ゐてゐる。トルコ人には、文盲甚だ多く、文字を解する者三・八六%にすぎない。

ジブシー ジブシーは十五世紀に、トルコを経てブルガリアに渡來した。カ・ライムは、既に千五百七十一年にソフィアにジブシーが住んでゐたと述べてゐる。ジブシーは、今日、全ブルガリアに散在して生活してゐる。そして、彼等の貧しい、不潔な住居は、多くの都市や村落の端れに見出される。ジブシーの多くは、なほ、遊牧民である。基督教ジブシーはブルガリア化し、また回教ジブシーは、益々トルコ化してゆく。その昔、ジブシーの数は可成り多かつたが、今日では混住のため、特に、都會では漸次少數となつて了つた。今日、ブルガリア國內のジブシーの總數は大約十三萬人で、その多くは、コテル、スリヴェン、タタルバサ・ルジク等の地方に生活してゐる。（全人口の四—六%）。

猶太人 ユダヤ人が、バルカン半島に渡來したのは既に古代のことである。使徒ポーロは、アデン、サロニキ其他に、強大なユダヤ・コロニーを建設した。十二世紀中葉に、南マケドニアを旅行したツデラのペンジャミンは、サロニキ、ヅラマにあつたユダヤ・コロニーに就て述べてゐる。中世における、チルノヴォのユダヤ人について文書も残つてゐる。チルノヴォには、なほ古代ユダヤ風の教會の遺跡の多くが散在してゐる。その頃、ブ

ルガリア王イヴァン・アレクサンデルは美しいユダヤ婦人と結婚したのであつた。異教徒に對し甚だ苛酷であつたトルコの支配下から逃れたユダヤ人は、殊にブルガリアに移住し來つた。そして、ゼンは、千五百五十年に『ソフィアには洪牙利ユダヤ人と同様、スバニオル（スペイン・ユダヤ人）が生活してゐた』と記載し、また、ゲルラハは千五百七十八年に、三百以上のユダヤ人がソフィアニ住み、ドイツ語を用ゐて居たと書いてゐる。十六世紀初頭に、フェルチナンドとイサベラに迫害せられた多くのユダヤ人が、サロニキ、イスタンブール、伊太利、セルビアを経て、ブルガリアに移住して來た。これ等のユダヤ人——ブルガリア語で『セファルチム』と呼ぶ——の数は、十七、十八世紀に於て、可成り増加した。ユダヤ人は多く都市に住み、村落には殆んど生活してゐないと云つてよい。近年、埃太利、ロシア、ルーマニアから、多くのユダヤ人——ユダヤ人のジャルゴンで『レヒ・エヴーチイ』と呼ぶ波蘭ユダヤ人——が、ブルガリアに移住して來た。その總數は四萬四千人で、そのうちの、四分の一はソフィアに住み、そして、その五二・九六%は文盲である。

羅馬尼亞人 ルーマニア人は、特にダニューブ河畔の地帯に住んでゐる。彼等は、十八、十九世紀に、ルーマニアの大地主等の暴虐を逃れてダニューブ河を越え、ブルガリアに移住し來つたのである。彼等の多くは、ヴィチン地方に生活してゐる。だが、ルーマニア人の居住地帯はダニューブ河畔の狭い地帯に限られず、ダニューブ河より三十キロも奥地のクラーにまで擴がつてゐる。其他、ルーマニア人の多い地方としては、ニコボル、オレホヴォ、ブレヅナ、ヴラツァがある。

西部ブルガリアの都會や村落には、ブルガリア語で『ツィンツァレン』と呼ぶアロムーン人が混住してゐる。

アロムーン人の多くは牧人で、西部山岳地帯、特に、ピンヅス山脈やグラムモス山脈の山間に多く生活してゐる。現在のブルガリア王國には、約八萬のルーマニア人と一萬のアロムーン人が生活し、その一五・四四%は文盲である。

タタール人は、すでに中世よりブルガリアに居住し、ブルガリア人の生活において、可成り重要な政治的役割を演じてゐたが、今日では昔日の面影なく、唯だ僅かに六千五百八十六人が、ヴァルナ地方に生活してゐるのにすぎない。その大部分が、ロシアから流れ込んだものか、又はその子孫であると言ふ。彼等のうちで、文字を解するものは、唯だ七・七五%にすぎない。

アルメニア人 アルメニア人は今日のブルガリア人の分布する地域には可成り多く生活してゐた。彼等は當初ビザンチン皇帝の命により、ブルガリア人に對抗するビザンチンの楯として、マリツァ平原に移住し來つたのであつた。トルコの支配下となるや、商人、職人として、ブルガリアの都會に移住し來つた。そして、そのうちの多くのものは、其後、トルコの官吏となつた。

第一次歐洲大戰頃から、多くのアルメニア人が、トルコからブルガリアに移住して來た。その總數は一萬三千五百人強で、アルメニア人・グレゴリア教を信奉し、その五五・〇一%が文字を解するのである。

其他の外國人は、尙、五千人ばかり居住してゐるが、そのうち、四千五百人はドイツ人で、都會に主として生活し、またオレホヴォ地方には、バーナート・ドイツ人のコロニーがある。

ブルガリア人は、此等の外國人に對し可成り寛大で、その同化にさへ、餘り努力しないやうに思はれ、それが

今後、何等かの禍根を醸成するのではないかと考へられる。東部ブルガリアでは、凡てのブルガリア人がトルコ語を解し、また、ダニューブ地方では、ルーマニア語を通用語とする。ところが、西部中央ブルガリアや、マケドニア地方では、あまり外國語に好感をもつてゐない。それ故に、少數民族がブルガリア語を學ぶ必要があるのである。

第六節 東ウゴル族

一、緒言

ソ聯邦重工業の中心地は、ドニエプロ綜合企業地帯からウラル・クズバス綜合企業地帯へ、それから最近ではバイカル綜合企業地帯へと次第に東漸しつゝある。その理由は種々擧げられてゐるが、要するに、新資源地の發見に伴ふ軍事的考慮に基くものなることは確かで、現在、ソ聯のマンムート工業の重心點はウラルの鑛山とクズネツの炭田とを連繫する地帯の西シベリアにあることは周知の通りだ。そして、この地方に住む原住民は、ツラン民族のうちのフィン・ウゴル系の小民族なのである。

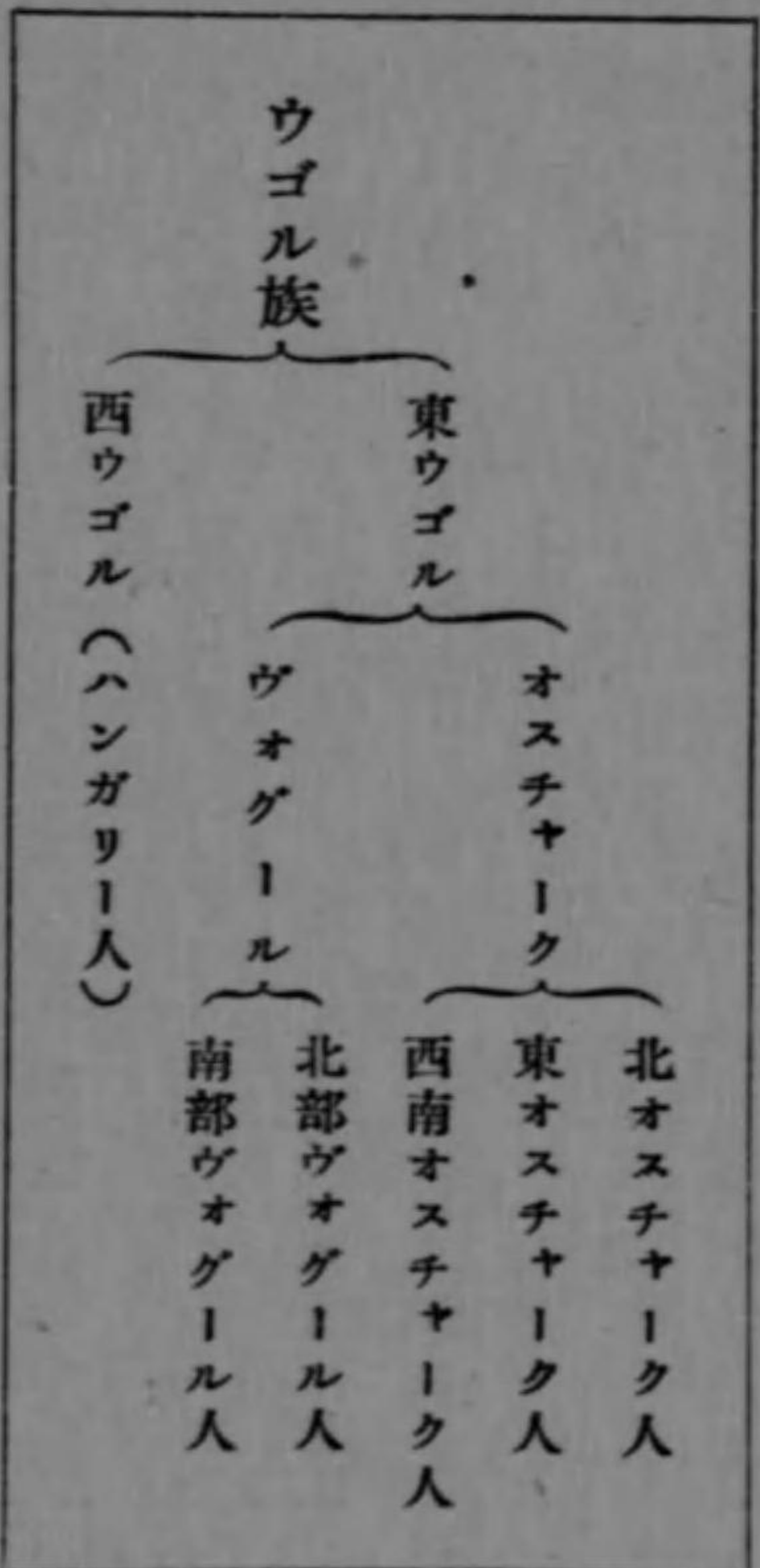
フィン・ウゴル民族は言語學、土俗學、人類學等、その各々の觀點により、自からその分類を多少異にするのであるが、これを文化的、言語學的立場から分類すれば、芬族とウゴル族とに分たれ、ウゴル族は更に東ウゴルと西ウゴルの二つに分ち得る(別表参照)。西ウゴル群は十世紀以上も前に東ウゴルと分離して西に走り、中歐ドナウ盆地にアジア民族の孤島をなして廣大なる地域を占め、ツラン民族の西における前哨として萬丈の氣焰をあげてゐるマジヤール民族(ハンガリー人)こそ即ちそれなのである。東ウゴル群はオスチャーク人とヴォグール人

とで、彼等は主としてウラル山脈の東側の西シベリアに相互近接して住み、オビ・ウゴル人として聯合してゐるが、その數は極めて僅少である。この群はその住地たるオビ、イルティッシェ兩河の河畔における低地帯の名からウゴル族と呼ばれてゐる。この地帯は、北はサモエード人の住地に、南はタタール人の住地に、西はウラル山脈に、東はナチム、アガン、ヴァシュの諸河に依り界してゐる。是等の境界内には、ロシアの編年史や、其他の古文書においても、等しくウゴル人と呼ばれてゐるオスチャーク人やヴォグール人が住むと言つてゐる。史前時代においては、是等の地域の南部には、多くの同血民族が住んでゐた。其中で、勢力のあつたものはウノグール人(後にはウグール人、又はウイグール人と呼ばれた)と、ウンガル人(現代のハンガリー人)とであつた。このウンガル人は、現在の住地たる中部ドナウ平原に定住するまでには、各時代を通じて西漸して來たのであるが、それでは一體、何時頃、ウゴル群がアジアの高原における原始家郷を離れたかと言ふことは判然してゐない。がしかし、恐らく、西曆紀元初頭にウラル山脈地方に到着したものと推定されてゐる。

二、歴史

十一世紀においてはウゴル人は屢々ヴォルガ河畔の種族として擧げられてゐた。しかし、現在のウゴル人に關する最初の信憑すべき記録はネストルに依るものである。彼は千九十六年にウゴル人を、ベチョリア人とサモエード人の南方の隣人として記してゐる。また同記録に依れば、ウゴル人は千八百八十七年にノヴゴロドに上貢してゐた、そして、千二百六十四年にはノヴゴロドの一地方としてユグラが擧げられてゐる。成吉思汗の後裔の時代にユグラは蒙古人に荒らされて苦んでゐたのであるが、このことに就いては千二百四十六年に法王使節として蒙古大汗の許に旅行したブラノ・カルビニに依り書き残されてゐる。彼は、千二百四十二年に

拔都汗の軍隊がモルドヴィン、ブルガル、パシキール等の國々を経て、サモエード人及び北極洋に近き諸族に對して遠征を試みたことを語つてゐる。また千四百九十九年にイヴァン・ヴァシリエヴィッチはユグリアに軍隊を

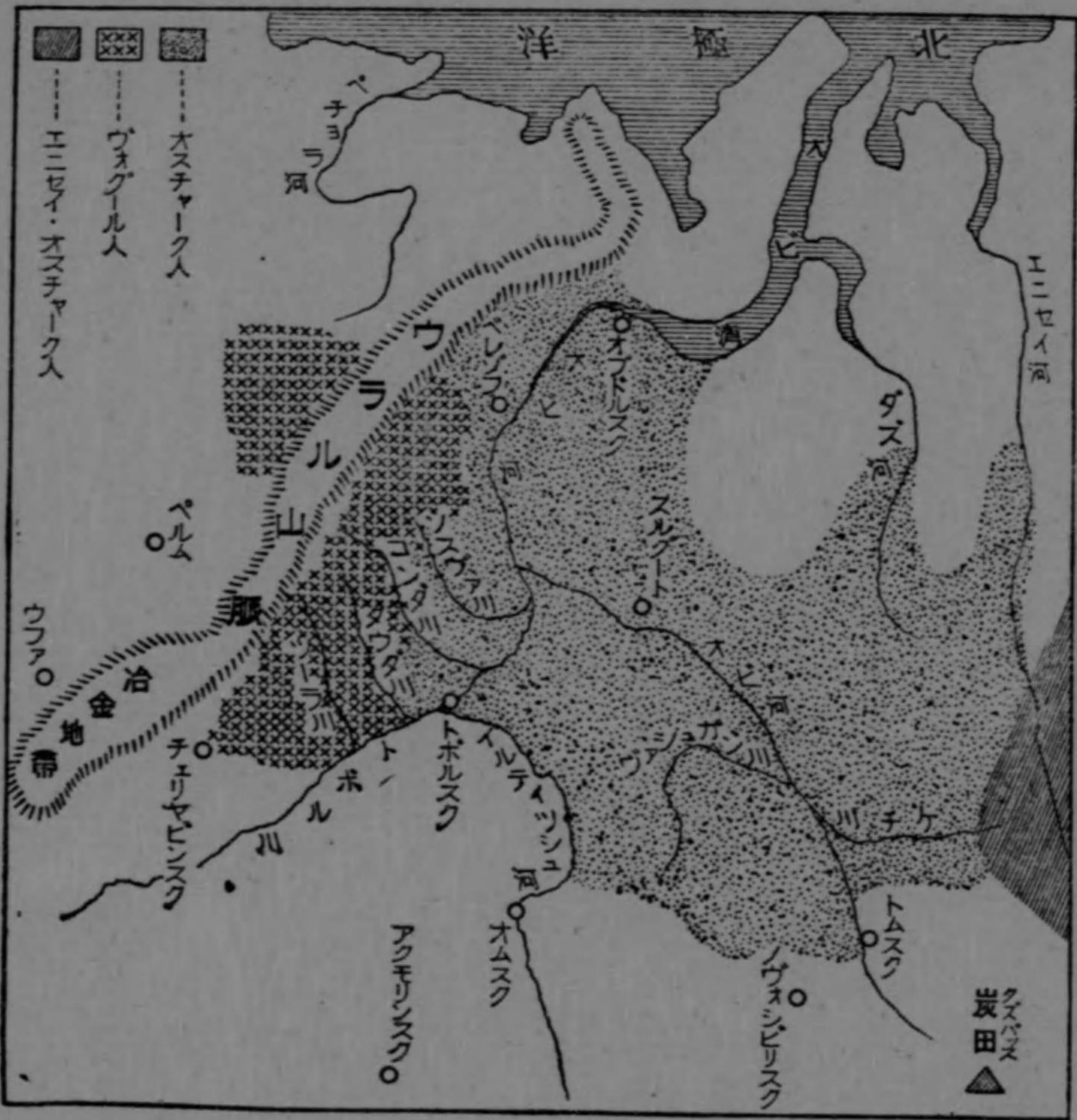


送りロシア領とした。更に千五百七十一年にはタタール人もこの地に新王國を建設したが、それは極めて短命であつた。といふのは、千五百八十年に有名なロシアのコザックの隊長エルマックが現はれてタタール汗を追ひ、西シベリアの全土とともにユグリアをも侵略して了つたからである。

(一) ウゴル・オスチャーク人

一、住地・名稱・人口　オスチャーク人の一派で、エニセイ河の左岸やケチ河の上流にエニセイ・オスチャーク人といふ小族があるが、これはサモエード族との雜種で、殆んど凡てがタタール化して了つてゐる。これに對しウゴル・オスチャーク人は、西シベリアのトボルスク、トムスク兩州のオビ、イルティッシュ兩河と、その支流たるコンダ、ヴァシユガン兩河畔に主として住んでゐる。

オスチャーク人は三群に分けられる。即ち北は、ベレゾフ地方の北オスチャーク人と、スルグート地方並びにヴァシユガン河とチャヤンガ河の支流に至るトムスク地方の南部に住む東オスチャーク人と、オビ、イルティッ



第 32 圖 東ウゴル族の分布

シュ、コンダ諸河に沿ふトボルスク地方の北部に住む西南オスチャーク人(イルティッシュ・オスチャーク人とも呼ぶ)とである。斯く、今日、オスチャーク人の地域は全くアジアに限られてゐるとはいへ、十世紀以前において彼等の領土は、なほ東ヨーロッパにまで延びてゐたのであり、そこからロシア人に依りウラル山脈の彼方アジア側へ、大部分は敗退せしめられて了つたのである。それ故、ロシアの中部地方には、ウゴル系の地名や河川名が今尙残存してゐる。ロシア人の壓迫を蒙らなかつた地域のオスチャーク人は、隣接のズィリアン

人、ヴォグール人、サモエード人等に同化せられて消失した。それでも等がその種族的面影を多少保持してゐるのは、西シベリア地方の住民だけである。

オスチャークといふ名は、右三群の言語において何等の共通性をもつてゐない。オスチャーク人は大抵その部族に河沼の名を冠して呼んでゐる。例へば、アス・ヤフ(オビ河の義)とか、コンディ・ホウイ(コンダ河民の義)等がそれである。このアス・ヤフが訛つてオス・チャークといふ族名になつたのだとも言はれる。ウゴル・オスチャーク人は單にオスチャーク、又はウグラ、或ひはユグラとして知られてゐる。オスチャークといふ名稱はタタール語のウシユチャク(蠻民の義)が正鵠なる語源であるらしく、タタール人が十三世紀にエニセイ溪谷地方に到着した時、エニセイ、オビ兩河の中流地方の諸種族を斯く呼んだのであつた。十一世紀の古代ノヴゴロド年代記のうちでは、オスチャーク人はウグラの名で知られてゐる。古名のウグラ又はイエグラは、今尙、ズイリア人が隣接せるウラル地方居住のオスチャーク人を呼ぶのに用ゐてゐる。オスチャーク人の自稱する一般名はマンスMans(オビ河民の義)である。

現在、ソ聯邦ではオスチャーク人をハント人と呼び、その言語をハント語と稱し、ハント人の數約二萬三千、ハント語を話すものは約二萬人で、彼等はラテン字母を使用してゐる。ウゴル・オスチャーク人は饑餓による幼児の死亡率が高いので減少の傾きがある。

二、身體的特徴・生活・仕事

ウゴル・オスチャーク人の平均身長は五呎三、四吋で、圓い頭をもち、顔面は圓形で扁平、鼻は幅廣で、むしろ扁平の方、頬骨は突出し、暗色の狭い眼、肌色は黄色又は黄ばんだ灰色で

ある。その頭髮は長く、滑らかで、多くは黒色である。鬚はまばらである。近時ロシア人との混血に依りツラン的特徴は次第に減少してゐる。その程度はアジアに住んでゐるにも拘らず、ヨーロッパにゐるモルドヴィン族よりもひどい。彼等の性格は臆病で、お人好しで、親切だ。しかし、文明の惠澤なき地方に住むものは更に正直だ。

ウゴル・オスチャーク人は未だ遊牧民である。ロシアの植民政策の影響を多くうけた南西地方では、漁業期には木製の堀立小屋に住む季節的遊牧民であるけれども、ある地方では已に放浪生活を捨てゝゐるものもある。

北部と東部の地方に住むウゴル・オスチャーク人は、まだ、さすらひの生活を續けてゐる。彼等は冬になると馴鹿の皮で造つたテントか、ある地方では、雪で覆ふた半ば地下に埋れた丸太小屋に住んでゐる。夏には、樺の樹皮で造つたテントに住む。その移住に際しては、馴鹿が彼等の木樁をひくのである。

彼等の冬服は主として馴鹿の毛皮でつくられ、夏服は魚皮からつくられ、又、女の服はいらくさから紡がれてゐる。オブドルスク地方のオスチャーク人の服装は、タタール人の影響で女はヴェールを用ゐてゐるほかは、大體、サモエード人と同一である。

彼等の食物は主に魚肉(夏は生のまゝ、冬は凍らして食す)と馴鹿の肉である。馴鹿の臓物は生食するが、殘餘の部分は調理して用ゐる。彼等は野いちごや杉の實を採集してヴォトカを造り、それを愛飲する。

彼等の生業は、狩獵、漁業、馴鹿の飼養等である。彼等は、冬になると犬を連れ、雪靴を穿き、舊式の燈發銃で大鹿や馴鹿を射る。遠くはなれた地方では、今もなほ弓矢を用ゐる。冬になると、氷に穴をあけて魚を捕へる。農耕に従事するものは極く少ない。

オスチャーク人は、木彫、骨彫、リンネルの刺繍や、飾り玉装飾の如き手藝に巧みである。又、舟形をして、馴鹿の腱を五本張つたドンブラといふ絃楽器（オスチャーク固有のもの）や、金屬線を五本張つた白鳥形の樂器をつくる。そして、これらを用ゐてその獨創的な音樂を演奏するのである。

三、言語・族別・文明

オスチャーク語には三、四の方言があり、そのうちで比較的純粹のものは、スルグートで用ゐられてゐるものである。ベレゾフで用ゐられてゐる方言は、相互に理解し難きまでに、オブドルスクの方言と異つてゐる。オスチャーク人には何等の書かれた記録はないが、傳説と『タルイン・アラ』（タルンの歌）といふ戰爭詩が口傳せられてゐる。タルンは擬人化せられた魔力である。十六世紀において彼等を征服せるタール人との争闘についても何等傳へられてゐないのであるから、況んや、その以前のことは判つてゐない。

オスチャーク人はサモエード人の如く家長制度の下に多くのクラン、即ち氏族に分たれてゐる。この小族は同一血族の者の集合で、結婚は異氏族間に行はれる。是等の小族は遊牧的遠征をなす時には一體をなして移住するが、その際には隣接の諸氏族は共同の族長をもつ。族長の主なる仕事は小族間の調和を保つことであり、この制度はカタリナ二世（一七六二—九六年）によつて認められ、ツァール政府支持の下に第一次歐洲大戰まで存続してゐた。族長権は世襲で、オスチャーク人の史詩によると、この詩の生成時代において彼等は已に長老と絶對權をもつ族長を戴いてゐることを傳へてゐる。この族長のことを彼等の言葉で *Yor, ur, ur* と言つてゐるが、ハンガリー人は今でも主人或ひは旦那のことを *Ura* と言つてゐる。

オスチャーク人の文明は甚だ原始的である。勿論、今では餘程ソヴィエト化せられてゐるであらうが、最近ま

で、彼等は十までしか計算が出来ず、數字も知らなかつた。彼等の間ではサモエード人の間における如く、結婚は新婦の父又は男性近親の手に依つて定められ、新婦に對しては身の代金が新郎から支拂はれる。女子はそれに對して一言も言葉を挟むことは出来ない。ゆゑに彼女は下女同様である。一夫多妻は許されてゐるが、今日では身の代金がたかひので稀有である。死者は森に捨てられる。墓が掘られることはなく、地上に置かれ、たゞ獸皮で覆はれるだけだ。北方の地方では死者をカヌーに入れて埋葬する古式が存してゐる。死者の所有物は凡てその墓のなかに埋められる。それは、死者が生きてゐる時と同じ要求と仕事をもつてゐると考へられてゐるからである。葬祭の時と、死後二、三年目に、その親族は死者の墓に馴鹿を供へる。

四、宗教

オスチャーク人の多くは千七百十五年以來、公けにはロシアのオルトドックス教會に屬せしめられてゐたが、かゝる歸屬はそのシャーマニズム的信仰を動かすことは出来なかつた。ベレゾフ、ダズ兩地方では、今なほ公然と、異教徒として認められてゐる。

總てのオスチャーク人が信する三つの神様がある。その一は『オビの河口から來た老人』で、『魚の神』である。各季節に魚の初獵はこの神に捧げられ、その他多くの犠牲動物が捧げられ、そこに彼が住むと考へられる場所には、また色々の供物がなされる。彼は弓矢と楯をもつと信ぜられてゐる。第二の神様は『鴨の神』で、凡ての鳥の守護神である。第三の神様は『コンダ河の神』で、この神については餘りよく知られてゐない。主なる荒神は戰爭・疫病・悪天候・其他すべての害毒を司る女神タルンである。

是等の神々は擬人化せられ、オスチャーク人は之等を偶像となして彼等のテントの内に祭るか、又は、木像と

してテントの外に立ててゐる。是等の偶像の近くには、必らず、神の幻影を見るシャーマンがゐる。彼等の守護神は即ち是等の神々なのである。

この他にオスチャーク人は家族神をもち、その偶像をテント内に安置する。供物はこれらの偶像の唇に、魚油又は獸血を塗ることであり、なほ供物として魚油又は獸肉を器物に入れてその前に捧げる。是等の供物は、神に對する感謝の表象なのである。

鳥のうちで、スワンと鴨は神秘な力をもつてゐると信ぜられ、獸類の内では熊がそれである。故に、熊が屠られると、その屍は地上に置かれ、人々はその周囲で圓舞をなし、その殺害の辯護をなしつゝ、鐵の銚を教へたロシア人に呪ひの言葉を吐きかけるのである。

シャーマンは世襲を必然としないから、その相續者を自ら選ぶ。シャーマンの服装はサモエード・シャーマンのそれに類似し、馴鹿皮でつくられ、多くの金屬製の小鈴が下げられてゐる。ウゴル・オスチャーク人のシャーマンの用ゐるドラムは、エニセイ・オスチャーク人のものとは異り、卵圓形でなく圓形である。ドラムは、神との媒介をなすシャーマンにとつては必要な道具である。神との會話は、唯、シャーマンに依りてのみなされるが、それには、歌とドラムが必要である。この儀式には、一頭以上の馴鹿の供物が入用なのだ。現在、西南オスチャーク人と北方オスチャーク人の多くは、名ばかりの基督教徒であるから、その結婚式も、キリスト教とシャーマニズムの混合で行はれる。

誓願は、サモエード人における如く、オスチャーク人にあつても、宗教的に重大である。そして熊の前でなさ

れた宣誓は最も神聖であるとせられてゐる。

五、歴史

傳説や民族史詩から大體は推知せられるが、オスチャーク人はその書かれたる史料を。たない。我々の知るところはロシアの編年史に依るものだ。ノヴゴロドの年代記により、彼等がノヴゴロド人と戦つた十一世紀においては、ウグラと呼ばれてゐたことを知り得る。また千三百九十八年においてはヴォグール人に近いものとして擧げられてゐる。またこれら兩種族に就いては、モスコの遠征軍が彼等の國々を侵略した千四百八十三年の年代記にも書かれてゐる。オスチャーク人がロシア人に依りそのヨーロッパの住地から逐はれた時に、西シベリアに集結したのは事實らしい。そして西シベリアではウラル山脈とオビ河の間において、サモエード人と戦つたのであるが、この戦闘に就いてはオスチャーク人の古代戰爭詩のうちに述べられてゐる。この戰爭の結果、オスチャーク人はサモエード人のうちに融合してしまつたのであるが、それでも、オスチャーク人が數百年間占めてゐた地域には、その要塞が残つてゐる。千五百年頃タール人はイルティッシュ河の全溪谷を征服した。又、千五百八十一年にオスチャーク人はロシア人に屈服し、千五百八十六年にはイルティッシュ河口に最初のコザックの植民地が出來、そしてオスチャーク人の四十一村落は全くロシアに臣従するに至つた。其後オスチャーク人は、ロシア人が近接種族を侵略するに際し、ロシア人の味方をした。又ロシアのシベリア侵略時代には、オスチャーク人の地域は今日よりも廣大であつた。また十六世紀においてコザックに依り破られた時の要塞の残骸は、オブドルスク附近に今でも發見される。千八百九十七年頃、南オスチャーク人の村落では尙タール語を用ゐてゐた。そして豚肉禁止、婦人のヴェールの如き回教的風習が支配的であつたが、しかし、その後、ロ

シアの影響が復活してロシアの風習が盛んになると共に、オスチャーク人の男にしてロシア女と結婚する者も多くなり、斯くして、イルティッシ地域のおスチャーク人村落の多くは、ロシア語だけ用ゐる様になり、青年はオスチャーク語を學ぶことを欲しない様になつた。オビ・オスチャーク人がロシア化されたのは、此外に、交易によつて促進されたことは勿論である。オスチャーク人の場合において、我々は、非ツランのロシア人との混婚の他に、ウゴル・サモエード・タタール等の三ツラン民族の部分的混血をも見るのである。

(二) ヴォグール人

一、住地・人口・身體的特徴　この種族はウラル山脈の東西兩側に住んでゐるが、その大部分は、ウラル山脈とイルティッシ、オビ兩河の間で發見せられる。往昔は更に西と南に擴がつてゐた。現在、その多くはコンダ流域を含むトボリスク州に住んでゐるが、東ではイルティッシ、タウダ、ツィラ諸河の近くに、西ではベルム州の境界の彼方へ、北ではソスヴァ河にまで、そして、南ではロスヴァ河にまでびてゐる。彼等はウゴル・オスチャーク人と極めて密接な關係を有し、兩族は一種族として共通の名マンシ Mansi (オビ河が溢水の地域たるマン河の名に出づ)を用ゐてゐる。ヴォグール人をロシア人はウオグリチと呼び、ズィリアン人はオスチャーク、ヴォグール兩族をイェグラ或ひは、ヨグラと呼んでゐる。

ヴォグール人の數は現在約八千、そのうち凡そ二千人はヨーロッパ・ロシアに住む。人口は部分的にはロシア人との混婚により減少の傾きがある。

彼等は、その體格の點でオスチャーク人と多少差異がある。身長は中等以下であり、顔面は圓形で扁平、頬骨は突出し、鼻は幅廣であるが、扁平でない。頭髮は長くて黒く、口鬚は弱く、肌色は暗色である。容貌は著るしくツラン的でない。ヴォグール人はシベリアの諸族のうちで、一番打ち解けないと言はれてゐる。

二、生活・言語・埋葬・宗教　ヴォグール人はオスチャーク人と同様、主として狩人で漁夫である。彼等は馴鹿を飼ふが、僅かな馬をも有してゐる。南部の地方では多少農耕をいとなんでゐる者もある。彼等は半ば遊牧民で、冬はラップ人の如く、淺ましい小屋に住み、秋は劍で鳥獸を捕へる狩人となるのである。彼等はサモエード人、オスチャーク人、ロシア人等と毛皮の交易をする。彼等の食物は主として馴鹿の肉である。彼等は普通ロシア服を着て、いらくさの帯をしめてゐる。

オスチャーク語と密接な關係のあるヴォグール語は、二つの方言に分けられる。それは北部方言と南部方言で、前者はロスヴァ河の上流、北ソスヴァ河とその支流およびオビ河等の地域で用ゐられ、後者は低部ロスヴァ河、ペリンカ河、ヴォグラク河、コンダ河、タウダ河等の地域で用ゐられてゐる南部方言である。現在ヴォグール語を話すものは約五千二百人、彼等はラテン字母を使用してゐる。

ヴォグール人は死ぬと、その死體は戸口から外へ持ち出されない、しかし、窓からか、又は壁に穴をあけ、そこから運び出される。墓場は普通森林である。屍は馴鹿で運ばれ、ボート又は舟形の棺に入れて埋められ、埋葬には固有の祭式が伴ふ。

ヴォグール人は一世紀も前から、名義だけのクリスチャンである。が然し、彼等はなほ古來のシャーマニズム

にも心服してゐる。

第七節 西ウゴル族(マジヤール民族)

一、住地

マジヤール人はウゴル群のうちで、最も大なる、最も文化程度の高い民族であつて、現在ハンガリー人口の最大部分を占めてゐる。彼等の住む國土は、山脈(西北、北、東及び東南におけるカールバート山脈)、河川(ドナウ、ドラウワ、サーウア)の自然的境界により限定されてゐる中部ドナウ盆地における地理的統一體を形成してゐる。マジヤール人の多くは、ナジュ・アルフルド(大平原)とキシユ・アルフルド(小平原)の二



第33圖 黒はマジヤール族の分布

大平原に住み、後者はブダベストの西部及び南西部にあつて六千平方哩を占むる地域で、前者はドナウ河とトランシルヴァニアの間に介在する約三萬七千方哩を占むる廣大な平原である。そこには濕地や不毛の地もあるけれども、大部分の土地は肥沃で、王國のうちで一番豊饒な部分を形成してゐる。この土地は一千年前アジアから水草を追ふて來たマジヤール人が、彼らの遊牧生活に適した土地として占據したところである。東部のトランシルヴァニアにおいては、ルーミアニア人に取巻かれたマジヤール人の民族的孤島がある。いはゆるセーカイの三地方がそれである。

二、名稱

ハンガリー人は自國人をマジヤール Magyar (大地の子等) と稱し、その國土をマジヤール

ヤーン Magyarország と呼んでゐる。日本語のハンガリーといふのは英語からきてゐる。英語のハンガリー、獨語のウンガールン、佛語のオングリーなどの由來については、ある人は匈奴 Hun 説、ある人は Hung 説、ある人は Ung 説(二者ともに舊ハンガリーの州名)など、異説は多いが、それはすべて誤りで、その正しい由來は西暦五世紀頃、ウラル山麓を彷徨してゐた古代ブルガール人の呼稱 Onogur に發し、それが古代ドイツ語、中世ドイツ・ラテン語、中世佛伊ラテン語など變轉混合して、つひに英語のハンガリーとなつたものである。名稱の由來については他に傳說的なものは色々ある。そのうちの一つにハンガリー民族の原始父祖に Hunor(匈奴の祖)と Magor(マジヤール族の祖)といふのがあつた。この Magor が Masyar と變化したものであるといふ如きその一である。

三、人口

千九百十年の調査によれば、ハンガリーの全人口二千八十八萬六千四百八十七人で、そのうちマジヤール語を母語とするもの一千五萬五百七十五人で、約二分の一にあたる。殘餘の人口は主として次の六民族からなつてゐた。

- ドイツ人 二、〇三七、〇〇〇人
- ルーミアニア人 二、九四九、〇〇〇人
- スロヴァキア人 一、九六八、〇〇〇人
- クロアチア人 一、八三三、〇〇〇人
- セルビア人 一、〇〇六、〇〇〇人

これが第一次大戦の結果、人口の過半数を失ひ、千九百三十年の人口調査では総人口八百六十八萬八千三百十九人となつてゐたが、第二次歐洲大戦の結果、北部・東部及び南部地方の失地を恢復したのであるから、今では、恐らく、総人口一千二百萬人位はあるであらう。

四、移民及び人種の問題

千八百九十六年から千九百六年の間に、その住民の百萬以上を失つたハンガリーにとつては移民は重大な問題であつた。千九百六年に海外へ移住した十五萬のハンガリー人中、三分の一はマジャール人であつた。この海外流出の原因は、主として農民層の困窮と、異民族のマジャール化政策に對する少數民族の憤懣に基づくといはれる。移民は主として北米へ流れ込み、今日では百萬以上のハンガリー移民がアメリカにゐる。尙ほ、トランシルヴァニアからルーマニアや、バルカン諸邦へも年々約四、五千人の流出があり、また、ハンガリーからクロアチア、スラヴォニアに向けても農民や労働者が移住し、特に、トリアノン平和條約以來、其他のヨーロッパ各國へも相當數のハンガリー人が流れ出てゐる。

マジャール人の大部分はハンガリー平原に密住し、周囲はスラヴ、ゲルマン、ラテン等の大民族に取巻かれてゐるが、その一部のは所々に分散して、離れ小島をなしてゐるため、至るところで民族問題が起る。いはゆる少數民族問題がそれである。即ちマジャール人は東では、トランシルヴァニア、プロヴィナ、バーナート等におけるルーマニア人、南ではドナウ、サーヴァ、ドラヴァ諸河畔におけるセルビア人、クロアチア人と、西ではブルゲンランド、スチリア地方のドイツ人と、北ではスロヴァーク人やルテニア人と接觸してゐるために、彼

らとの間に混血を生ずると同時に、また人種的・民族的な烈しい軋轢を惹起してゐる。

五、體質的特徴

マジャール人はドナウ盆地へ來てから、先づ二つのツラン的要素、すなはちウゴル人とトルコ人とのアマルガムを形成し、また先住民のスラヴ人や半スラヴ人との混婚により、さらにまたラテン・ゲルマン系の外國移民の來住者と交はつて、そのツラン的タイプを殆んど喪失してしまつた。彼らは現在、中等の身長、よく發育した體軀、鋭切せられた容貌、暗い自信にみちた眼、南歐的な暗色の肌色をもつてゐる。しかも活潑で亢奮し易く、素質は火のやうで、智的である。お人よしで、親切で、社交的で、客好きで、雄辯で、いかも愛國心に燃えてゐる。また彼らは巧みな騎手で、勇敢な兵士でもあり、音楽やダンスが好きで、彼らの間にチャールダーシュといふ民踊があるが、それはのろい運動と敏速な運動の交錯からなる極めて特色に富んだものであるが、一面スラヴ的なところも窺はれる。

六、職業および産業

マジャール人がドナウ盆地へ來たときは遊牧民であつたが、間もなく定住し、ヨーロッパ文明を採用した。そして今では住民の大部分は農耕と牧畜を營んでゐる。ハンガリーは優れた農業國で、ヨーロッパの主要な小麥國の一つである。農産物の主なるものは小麥の他に、玉蜀黍、馬鈴薯、甜菜、葡萄、亞麻、大麻、煙草、果實等にして、牧畜においては豚、牛、羊、馬等である。また湖河においては水産業もあり、鯉、鮒、鱸、鯰等がドナウ河やバラトン湖で獲られる。鑛業としては石炭、褐炭、ボーキサイドの他、鐵や岩鹽も多少ある。工業はその農産物及び畜産物を原料とするもので、例へば、製粉、醸造、麻織、肉類加工、酪類の製造等の外、農具の製造、皮革、硝子、陶器、木綿、羊毛、藥品、煙草、製鐵、石油、製紙等の工業も小規模な

がら存在する。輸出産業としては農具及び電気工業も相當發達してゐる。

七、政體

ハンガリーは建國以來王國であり、現在も立憲君主國である。が然し、千九百十九年の共產革命以來、いまだ國王の選定問題が解決しない爲め、ポリシェヴィキを清掃して元の王制を復興した謂はば維新の元勳とも云ふべきホルティ・ミクローシュ提督が攝政に推され、王位を代行してゐられる。ハンガリーの憲法は英國と同じく不文律であるが、特殊規定の系列により時々修正せられ、強化せられた古文書に立脚するものである。その最も古くて有名なものは、ハンガリーの大憲章たるエンドレ二世の『黄金章』で、ジョン王の英國大憲章におけること七年の千二百二十二年に公布せられたものである。この古い憲法は千八百四十八年の西歐自由主義の影響により、從來の大貴族の過大なる特權を制限し、マジヤール人の民族的優勢を確保するため幾分改正せられたが、しかし、千八百四十八—九年のハンガリーの境國に對する獨立戦争が失敗に歸したため、その目的を達成することが出来なかつた。しかし、其後千八百六十七年にオーストリアとの妥協案が成立し、再び千八百四十八年の改正憲法が復活することゝなつた。近代及び現代ハンガリー王國は大體この憲法の基礎の上にうち建てられ、立法權は二院制の國會に、法律の實施權は責任内閣に賦與されてゐる。

八、宗教

第一次歐洲大戦前には、ハンガリー人の大部分、即ち四九%はローマ・カトリック教徒（マジヤール人、スロヴァキア人、ドイツ人、クロアチア人）、十四%はカルヴィン派教徒（マジヤール人）、十二%はギリシヤ正教徒（セルビア人、ルーマニア人）、十一%はユニテリアン教徒（ルーマニア人、ルテニア人）、七%はルーテル派教徒（スロヴァキア人、ドイツ人）、殘餘の五%は猶太教徒であつた。トリアノン條約後のハンガリーにおいては、カ

トリック教徒が約六〇%、プロテスタントが約二五%、ユダヤ教徒が約五%、殘餘は其他各宗教に屬してゐる者、といふ風であつたが、最近同國は失土を恢復し、ほゞ第一次大戦前の状態に復歸したのであるから、却つて、古い統計が現状に近いかも知れない。

九、言語のツラン的特徴

マジヤール語はツラン語族の他の四分派、すなはちサモエド語族や、ツングース語族、モンゴル語族、トルコ語族などと言語學的に近親である。この言語的近親性を立證するものに、身體各部の名稱や、數詞などがある。近親性の他の例證は、これらの言語においてすべての語は、規則的に母音または一個の子音で始まり、決して他のインド・ヨーロッパ語族にみられるやうな子音群で始ることのないことである。特に母音調和のツラン的特徴は、他の如何なるものよりも、マジヤール語、フィン語、トルコ語等においてみられるのである。さらに注意すべきことは、マジヤール語、バルト・フィン語、ラップ語、ヴォグール語等においては、アクセントが常に第一音節にあることである。フィン・ウゴル語族とトルコ語族間における近親性の顯著な例證は、所屬・所有をあらはす人稱接尾辭の使用である。

マジヤール民族は早くよりアジアの原郷を離れ、一千年も以前に、中央ヨーロッパに建國し、スラヴ、ゲルマン、ラテン等の民族的大洋にとりまかれつゝ、惡戦苦闘を続け、彼らの血と肉は、白人の海に溶け、文化も相當アリア的影響をうけたのである。しかし、その魂と民族語は、決してツラン的・東洋的要素と性格とを失つてはゐないのである。

十、歴史

マジヤール人がアジアからヨーロッパへ移住して來た経緯は、記録歴史前のことゝて茫漠と

して間に包まれてゐる。しかし、比較言語學・考古學・土俗學・神話學等により明らかたところによれば、マジヤール人は最初ウラル山麓に住んでゐたが、他民族の壓迫により西に移り、ヴォルガ河畔において大ブルガリア王國（マグナ・ブルガリア）の近くにマグナ・フンガリアを形成してゐた。そして、ブルガリア王國の崩壊後、マジヤール人はこの地を去り、今日のベッサラビア・ブコヴィナ・モルダヴィア地方に住んでゐた。しかし間もなく、ブルガール人とベチエネグ人とが同盟してマジヤール人を挾撃したので、當時六つの獨立種族に分れてゐたマジヤール族は、偉大なる武將アールバードの統率の下に統合し、カールバート山脈のウエレッケ隘路を通つて、八百九十五年にティサ河の上流に現はれた。そして、こゝで彼らが家郷感を起したといふのは、このカールバート盆地の草原が、中央アジアの草原によく似てゐたからである。この地の先住民は主としてスラヴ人あるひはスラヴ的アリア人であつた。マジヤール人は最初モラヴィア王國（建國八五〇年）を倒し、ついでブルガール人、セルビア人、クロアチア人を、更に南部においてはアワール人を征服し、そして九百六年には全ハンガリー平原を平定したのである。

このツラン民族たるマジヤール人によつてアリア族が征服されたといふことは、ヨーロッパの全歴史に對して大きな變化と影響をあたへてゐる。即ち、カールバート山麓をその搖籃地として起つたスラヴ民族の永い間盤踞してゐた中央ヨーロッパ一帯が、マジヤール族のドナウ盆地への侵入と、それによつて、統一したスラヴ民族地盤を南北に二分したこと、そして、東スラヴ族をして西スラヴ族より分離して、その膨脹發展の道を東に轉ぜしめ、さらに、宗教的・文化的には、スラヴ民族をローマ（カトリック）とビザンチウム（オールドドックス）に二分し

たことであり、そしてその結果、北西スラヴ族のゲルマン化、ドイツ文化を餘儀なくせしめたこと等である。

遊牧民たるマジヤール人が現在のハンガリー國土を占據して以後半世紀間は、剽悍なるマジヤール驍騎兵はヨーロッパの至る所に出沒して掠奪を恣にしたため、西歐のいはゆる戰慄時代を現出せしめた。即ちかれらは、チ



第 34 圖 スラヴ民族の分布

ユーリゲン、バヴァリア、スワビア、ロートリンゲン、ブルグンディ等を荒らし廻つた上に、イタリアを侵し、さらに東ローマ帝國へも侵入してビザンチウムを震駭せしめた。このやうなヨーロッパの恐怖時代は西紀九百五十五年のアウグスブルグ附近のレヒフェルドの戰において、ハンガリー軍がオット大帝により撃破さるゝまで續いたのである。

西紀八百九十六年にアールバード公統率の下にハンガリーの國土を占據してから約百年、マジヤール人の指導階級の多くはローマ・カトリック教に歸依した。そしてアールバードの後裔セント・イシュトワンはローマ法王より王冠を授けられ、基督教の

初代ハンガリー王の祖となつた。彼は自ら西歐文化主義の先頭に立ち、遊牧マジヤール人に農耕を教へて定住せ

しめ、基督教を採用し、それまでの種族組織を廢し、フランク帝國の國家組織に範をとり、その國家機構を根本的に改組した偉大なる功績者であつた。しかし、このアールバード王統は二十九代、四百十二年續いて斷絶してしまつた。そしてその後は、國民によつて選ばれた選挙王が即位したのであるが、その多くはマジヤール人でなく、ドイツ、ポーランド、イタリー等の外國王、あるひはその王族であつた。

(1) 蒙古來 つぎに第十三世紀における重大な出來事としてアジアからヨーロッパへ侵入した民族の嵐は、千二百四十一—二年、成吉思汗の部將拔都の率ひた蒙古族の襲來であつた。ハンガリーではこれをタタールの侵入といつてゐる。蒙古來により殆んど全ハンガリーは灰燼に歸し、マジヤール族の大半は盡殺され、その結果人口は稀薄になつたので、當時の王は、土地を無償で提供して西歐人の移民勧誘に違なかつたほどである。この時、東方からは同じツラン系のタタール族がハンガリー平原へ移住して來たのであるが、彼らは當時尙ほシャーマニストであつたため、基督教ハンガリー人にとつては大なる脅威であつた。

(2) トルコ族の中歐侵入 それからヨーロッパ諸民族を最後に戦慄させたアジア民族はトルコ族である。トルコ族がバルカン半島を通つて中央ヨーロッパへ侵入したのは前後二回に及んでゐるが、その第一回目は、十四世紀の終りから十五世紀の初めであり、第二回目は十六世紀の初めであつた。

第一回目には、ヨーロッパ同盟軍は、當時中央アジアに覇を振つてゐた英雄チムールと同盟し、トルコ軍を撃し、これが撃退に成功した。しかし第二回目には、千五百二十六年モハーチユの敗戦により、遂にトルコの爲めに撃破せられ、ハンガリーの大部分は約百五十年の間トルコの隸屬國となつてしまつた。この時恰かもヨーロッパ

ッパでは、基督教文明の危機なりと稱して、ヨーロッパ救済の美名の下に、ヨーロッパ同盟軍を組織してトルコに對抗したのである。その總指揮官は前オーストリア皇室ハプスブルグ家の祖先であつた。それで、ハンガリーは奥國の援助によりトルコ人を驅逐することが出來たのであるが、その結果は、トルコ勢力に代つてオーストリアの勢力が這入つて來ることは避け難いことであつた。これは恰かも、古い諺の「前門の狼を防げば、後門に虎」の形であつた。

それ以後、最近二百五十年間のハンガリー歴史の中心點は、如何にすれば奥國から獨立することが出来るか、といふ自由戦争・獨立戦争の連鎖であつた。その主なるものとして次の三つの場合を擧げることが出来る。

(3) 對奥獨立戦争 先づ第一はラーコーチ公のオーストリアに對する叛旗である。これは千七百年代の初めに、ラーコーチといふハンガリーの貴族が獨立戦争を企てたが、味方に裏切者があつて、その獨立計畫は失敗に歸してしまつた事件である。

つぎは千八百四十八年のコッシュュートの獨立戦争である。千八百四十八年といへばフランスの二月革命を連想するが、そのフランスの二月革命の影響をうけて、ハンガリーにはコッシュュートといふ志士が起ち、同志を率ゐて奥軍を國外に追放し、遂に獨立政府を組織し、國立銀行を興し、獨立記念の紙幣まで發行したのである。しかし、當時ヨーロッパの大國は、フランス革命思想の蔓延、王國の崩壞を恐れて、奥國の宰相メッテルニヒが牛耳を執つて、ロシア、プロシア、オーストリアの諸帝をかたらひ、いはゆる神聖同盟を結び、各國に彌漫する自由平等の思想を壓迫し、君主制の擁護に努めてゐた際であるから、敗戦に悩むオーストリアは神聖同盟を利用し

て、ハンガリーの革命運動鎮壓といふ名の下に、ロシアの援助を請ふたのである。ロシアは直ちにこれを諾し、大軍をハンガリーの平原に進め、コッシュート軍を粉碎してしまつた。

斯く、ハンガリーは奥軍には勝つたが、意外にもロシアの横槍により戦利を失つたのである。が、これは恰かも日清役後における我國に對する三國干渉の場合とよく似てゐる。爾來ハンガリー人は、このスラヴ・ロシアに對しては憎惡の念に燃えてゐたのである。

(4)日露役と日本崇拜意識の昂揚 この憎んでも餘りあるスラヴ族を、日露役に極東の小國で、しかも自分の兄弟民族の國である日本が、みごとに撃破したのであるから、この勝利をハンガリー人は自分のことのやうに、狂喜したのも無理はない。

日本大勝の報に接した彼等は、すっかり戦勝氣分に酔ひ、提灯行列などをやつて喜んだといふことである。當時子供達は、兵隊ゴッコをするのに、ロシア兵になるものがなくて困つたといふことであり、東郷崇拜、乃木崇拜が昂つて、つひに『東郷會』とか『乃木會』とか云ふものまで現はれた。なほ、その頃生れた男子に、『トイゴ』とか『ノギ』とかいふ名をつける親達も出るといふ熱狂振りであつた。これは事實であつて、現に、自分の知人の間にも『トイゴ』といふ名前の者がある。そして予はこの名前をつけた親から直接その由來をきいたのである。

ハンガリー人の日本に對する憧憬の念は、日露役においてその絶頂に達した。第一次歐洲大戰中に、ドイツの反日宣傳がきいて稍よ下火となつたのであるが、戦後、民族運動、國民運動、ツラン運動の勃興と共に、且つま

た、我々同志の日本文化紹介の効もあり、それがまた彼らの日本研究熱を煽り、そして彼らの日本認識をいよいよ深め、延いては日洪兩國の文化的接近の素地となり、政治的連繫の前提ともなるに至つたものである。

(5)最近の對日感情 この問題については最近ハンガリーから歸朝されたウィン日本研究所長兼ウィン及びブダペスト大學客員教授岡正雄氏の日洪文化協會における講演が、もつとも信憑すべき權威あるものと思ふから、同氏の講演速記の一部を茲にそのまゝ、拜借する。

X

『ハンガリーといふ國は非常に親日的空氣の強い國であるが、これには種々の段階や理由があつたと思ふ。

先づ、その第一の時期は、十九世紀にハンガリーにおいて民族ロマンチズムの運動が起り、ハンガリー人は奥國から離れて、獨立の議會を持ち、獨立の憲法を持つといふやうな氣運が出て來、同時に一つのアジア的な民族意識が勃興して來た。その頃、日本から白鳥先生がブダペストへ行つて講演されたが、これが非常に歓迎されて、同地の學者らは、白鳥庫吉氏が講演したといふことを今でも語つてゐる。また當時日露戦争があつて、その結果が日本の勝利に歸したといふことは非常にハンガリー人に心強さを感じしめ、一段とアジア的な自信とアジアへの復歸といふやうな理念が盛んになり、日本に對する親愛の情が深められた。

次に第二に親日的氣分を強めさせた時期は、第一次大戰後、ハンガリーの捕虜がシベリアへ行つて多くの日本人と接觸し、當時トリアノン條約による失地回復の氣に燃ゆるハンガリー人が、勃興しつゝある日本に對する感情的依存といふやうなことが更に親日的感情を強くした。そのころ今岡氏がハンガリーへ行かれたのであるが、

今岡十一郎氏の名は有らゆる寒村僻地にまで知れ渡り、同氏の名はハンガリーにおいては寧ろ一つのミートス、すなはち神話的人物とさへなつてゐる。もし今岡氏の名を知らなければ、それは潜りの日本人だ。インチキ日本人だと言はれる位、それほど同氏のハンガリーに於ける日本紹介の功績は偉大であつた。

今岡氏がブダペストを去られる迄を第二期とすると、第三の時期は、千九百三十年以後世界の政局が緊迫して來て、日本もヨーロッパに對して文化工作を行はなければならぬといふやうな氣運が起つて來た。そこで三井男爵のハンガリーに對する多額の寄附といふやうなことがあつたが、これは日洪の文化關係において非常に大きな意味をもつたと思ふ。その頃、西郷從吾さんがハンガリーに行かれたが、非常に肌觸りの良い人であるから、到る所において社交界から歓迎され、殊に、婦人等は西郷さんの出るソサエティには喜んで出席するといふ風で、大きな仕事を残されたと思ふ。その後オーストリアがなくなつて、初めて日本の公使館がブダペストに置かれ、かつ武官が駐在されることになつて、劃期的に日洪關係が深まり、日本のハンガリーに對する工作も組織的になつて來た。特に初代の駐在武官であつた若松少將は活躍されて、種々の問題の基礎を築かれたと思ふ。私は千九百三十八年、オーストリアがなくなる一ヶ月前にウインに行つたが、その後同國はなくなり、そこでハンガリーへ行つて仕事をしようと思ひ、若松武官の盡力等もあつて、ハンガリーへ行くやうになつた。ブダペスト大學で私がドイツ語で日本民族學の講義をしても、實はその學問的影響性といふものは大したものではないのであるが、大學のガスト・プロフェッサーとして講義する私の意圖は、ハンガリー人と深く接觸することによつて、日本の文化工作の一助ともならむことを望んだのである。

斯かる歴史的な關係があつて、ハンガリー人は日本人に對して非常に親愛の情を有し、何等の前提なしに日本人には種々参考になるインフォメーションを呉れる。犬も歩けば棒に當るといふが、私のやうな者が行つても可なり有益なインフォメーションを貰ふことが出來た。このやうな親日的氣分はハンガリーの各層を通じてあるのであるが、最近ハンガリー自體の國內問題が複雑化して非常に難かしくなつてゐるので、日本のハンガリーに對する一般的な呼び掛けといふものも非常に困難となり、相手方を區分し、且つ相手方を組織して、その組織された區分に對して適度な働きかけをして行かねばならぬと思ふ。……』

と、岡教授は述べてゐられる。

十一、ツランの呪詛と洪土關係

ハンガリーに「ツランの呪詛」といふ言葉がある。ハンガリー人はアジア的意識をもち、東洋に對して憧憬の念を抱くといふことは之迄屢々述べて來たのであるが、しかし、その歴史的運命は常に東洋民族と死闘を續けなければならなかつたといふ矛盾した悲劇の歴史を持つてゐる。それは同じツラン族のベシエニウ人とブルガリア人に挾撃されたり、蒙古來により祖國を廢墟にされたり、トルコの桎梏下に百五十年間も呻吟したり、また第一次世界大戰にはそのトルコと同盟關係に入らなければならぬといふ數奇な運命の神に弄ばされた。それは決してハンガリー人自身の發意によるものではなく、常にヴァチカンや西歐列強の楯としてハンガリー人が利用されたことである。ハンガリーのツラニストは云ふ。「冷酷なる月の子である白人は過去三百年の間、ツランの兄弟たるマジヤール人とトルコ人とを血闘せしめた。そして兩族が共に衰微し切つた時を見はからつて兩國の分割を畫策してゐる」と。そしてまた、このトルコとハンガリーの二大ツラン民族は、

その地位が互によく似てゐる。それは兩者ともにツラン民族の一員であり、幾世紀間中歐と近東において覇を振ひ、その國家的組織能力を有する民族なることをその歴史により立證してゐることである。またトルコ人もハンガリー人もともに非ツラン族との混血により、その本来の民族的特徴は體質的には可成り失つてはゐるが、しかし、その本来のツラン的言語は保存してゐる。兩國は第一次歐洲大戰前、ほぼ同数の人口(約二千萬)を有し、その五〇%が各々トルコ人或ひはマジヤール人で、他は異人種であつたが、現在はいづれも餘り多くの異民族を包含せず、民族主義的近代國家の性格を現はしてゐる。又兩者とも農牧民で、尙武勇敢なる侍氣質の國民である。兩者は歴史的には仇敵關係にあつたにも拘はらず、民族的には極めて近親で、互に理解と同情をもつてゐるから、現實の事情さへ許せば協同の可能性は十分にある。千八百七十七—八八年の露土戰爭に際し、マジヤール人はトルコ人に對して強い同情を示したが、この感情は日露役に日本に對して現はした感情と同様である。それは千八百四十九年にマジヤール人の對境獨立戰爭に際し、ロシア人の干渉に依りうけた傷手から生れた反露感情からも言へるが、兩民族は言語的・性格的には近いが、しかし、宗教的・歴史的には遠い。

西紀五世紀頃ヴォルガ河附近にゐたトルコ系民族の一なる東ブルガリア人、即ちヴォルガ・ブルガール人は、五世紀の中頃の地方においてマジヤール人と接觸してゐたため、相互に文化的・言語的影響をうけてゐることは確かである。此の外、マジヤール人が九世紀頃ウクライナ地方に國をなしてゐた時、同じく有力なトルコ族の一なるカザール族と同盟を結んでゐたこともある。その後凡そ七百年の後、さらにマジヤール人は現在の位置において再び約百五十年間オスマンリ・トルコ族の羈絆の下に苦しんだことがあるが、その時にも多くのトルコ語

がマジヤール語に混入したのである。故にマジヤール民族は今日の科學に従へば、フィン・ウゴル語族に屬するが、しかし、その言葉には多くの外來語、ことに多くのトルコ語を含有してゐる。

十二、日洪國交關係　ハンガリーとわが國との關係は、昭和十三年公使を交換して以來、同年十一月十五日には文化協定を締結し、ついで昭和十四年一月十日には滿洲國を自發的に承認し、さらに同年二月二十四日には防共協定に参加し、つゞいて昭和十五年十一月二十日には日獨伊三國同盟に加入して獨伊のヨーロッパ再建の大業に協力し、また本年七月二日には汪精衛を主席とする國民政府を正式に承認し、もつて世界新秩序の建設といふ共同の大目標に向つて邁進しつゝある。

十三、日本人に類似の點　それは大體三つの觀點から言ふことが出来る。第一には醫學的立場から、第二には土俗學上から、第三には比較言語學の方面からである。例へば、人類學的立場からこれを觀察してみると、ハンガリー人の骨格は蒙古人のそれと同一である。またハンガリー人もモンゴル族特有のモンゴル・フレッケン(蒙古斑)といふ幼兒の臀部にある藍色の斑點がある。また醫化學的にみても、日本人の血型は支那人のそれとは縁が遠いが、ハンガリー人の血型とは近いと云ふ。また土俗學的にみても、ツラン民族共通の風俗習慣が、今なほ、日本人の間にも、ハンガリー人の間にも殘存するといふのである。例へば、遊牧民時代の遺風、シャーマン教の遺習、東洋的な模様等々。またハンガリーの音樂も極く古いものは東洋的で、ハルモニイよりもメロデーを好む傾向がある。

十四、言語上の共通點

また比較言語學の立場からみると、ハンガリー語は、物の考へ方、思想の表現法、

文章の構成などが、インド・ヨーロッパ語系や、支那語系とは全く異なる膠着語系に屬し、日本語とよく似てゐる。例へば、ハンガリー語で豊臣秀吉といふ姓名を言ひ表はす場合に、ヨーロッパ語の如くヒデヨシ・トヨトミではなく、Toyotomi Hideyoshi と云ふ。年月日をかく場合にも、ヨーロッパ語の如く『ニ於テ・日・月・年』の順序ではなく、『何年何月何日ニ於テ』と、於テが後へ來るのが慣例であるし、また住所をかく場合にも同様で、『何市何町何番地』と、番地が後へ來る。ハンガリー語の *asztalon* は机を意味するが、例へば、『机ノ上ニ』といふ場合には *asztalon* といふ風に、名詞の後尾が變化すること等は、日本語とよく似てゐる。また『私ハ東京へ行ク』をハンガリー語では、*Tokyóba megyek* と書く。この場合、『トキョーバ』の『バ』は日本語の『へ』に該當し、『メジエク』は『私ハ行ク』を意味する。また『彼ハ新聞ヲ讀ム』のハンガリー語は *Usgot olvas* といふのであるが、ウーイシャークは『新聞』であるが、その語尾が變化してウーイシャークトとなると、『新聞を』といふ意味になる。またオルヴァシユは 彼は讀む』を意味する。斯くの如くハンガリー語は日本語と同様、場所・方向等を示す場合には、ヨーロッパ語の如く、前置詞で表現せずに、名詞の後尾變化で表現する。この後尾の變化は日本語のテニヲへとよく似てゐる。而して、動詞の位置は、日本語と同様、自動詞たる他動詞たるを問はず、終りへつづのが原則である。これに反し、支那語はヨーロッパ語と同様、動詞は目的の前へ來る。この點において漢語は特殊な地位を占めてゐる。(ハンガリー語と日本語との關係については大學書林發行、拙著『洪牙利語四週問』を参照せられ度し。)

第八節 ハンガリー文化の性格

去る昭和十四年八月十七日ブダペストにおいて、クーン民族のハンガリー移住七百年紀念祝賀會が催され、ホルティ攝政を初めテレキ首相以下文武百官參列の下に盛大なるツラン講演會が開かれた。先づ司會者としてヴィテーズ・エンドレ・ラーズロー知事の開會の辭について、彼はクーン族のハンガリー國民生活上における位置を明らかにした後、今から一千五百年前匈奴王に登極、『神の劍』としてアジアからヨーロッパへ使はされたツラン民族(フン、アワール、マジヤール、クーン、ベシニウ族等)の大王安ツチラの銅像設計畫の提議あり、萬場一致これを採諾したる後、ジョルフィ・イシュトワーン教授のヤースクーン族の歴史及び言語に關し、またフェツティチ・ナインドル博士はクーン族の文化性について、それはテピカルなブスタ文化であつたことを判定し、またバルトツツ・ラヨシユ博物館長はクーン族の人類學的考察を試み、クーン族はマジヤール族と異なる人種ではないとの學證をなし、最後に、首相テレキ・パール伯はその専門の地政學的立場からマジヤール族、クーン族等がアジアからヨーロッパへ移動して來、これが何故、洪牙利アルフェルド平原に定住するに至つたか、



またクーン族の文化性、ハンガリーの文化的使命等について大要次の如き講演をなし、ハンガリー文化の特質を

明らかにしたる後、マジヤール民族の存在價值はその東洋的アジア的性格にあることを強調した。



第35圖 マジヤール族の西進経路 ①フィン・ウゴル族の推定原郷 ②マジヤール族の原郷 ③レベディア ④エテルケズ ⑤現在ハンガリー國

ールバート山脈の隘路を通過してティサ河の上流に出で、ティサ・ドゥナ兩河の間に蟠る大平原、いはゆる今日の

アルフェルドに定住するに至つたものである。そして此處から西方へは進まなかつた。蓋し、それはこの地がこれまで通つて来た地帯と地理風土が同一であり、またここが遊牧民の住むユーラシア大陸を貫くステップ草原地帯の西における最後の地であつたからである。

西へ西へと進んだマジヤール族の後から、他の一つの民族がつづいて来た。それはマジヤール族の如く森や林の縁を辿らず、つねに草原の眞中を走つて西進し、わがハンガリー國においてもブスタ平原の中央に腰を下し、今も尙ハンガリー大平野において農牧を營んでゐる。これが即ち來住已に七百年になるクーン民族なのである。

二、風土と文化 人は地上の生物であつて土地を離れて生活し得ないことは植物と同様である。土壤が植物の生成を左右する如く、土地はその住民の生活方法を決定する。それは單に外部的、物質的、生活方法を定める許りでなく、内面的思想世界、すなはち、視界も、認識界も、感覺界も、すべての精神世界は、その人の住む土地と深い關係がある。我々マジヤール人が、森林地帯の住民スラヴ族のために襲撃もされず、そしてかれら先住民の間に融解もしないで今日あり得たのは、我々マジヤール人の後方ブスタ平原にクーン族が蟠居して、マジヤール族の背後を確保してくれたからに他ならない。この點においてクーン族はわがマジヤール祖國のために大なる歴史的使命を果たしたものと云ひ得る。

三、遊牧民の文化的使命 沙漠の船として駱駝がある如く、中央アジアの渺茫たるステップ草原の海にはツラン遊牧民の船として千里を走る馬がある。海洋民族は初め海岸に都市を建設し、そこから次第に奥地へ奥地へと進んで行つたのであるが、荒寥たるステップにさすらふ遊牧民は、晝も夜も、夏も冬も、ただ家畜の保護に

抑しまなければならなかつた許りでなく、隣接異民族の襲撃に對する防衛・謀略・政略・折衝等にも執掌しなければならなかつたのであるから、自然、かれ等の間には政治思想が發達して來た。往昔、ツラン遊牧民は中央アジアの草原から支那へも流れ込んだ。その際、彼ら遊牧民は中央アジアの文化を支那へ、支那の文化を中央アジアへと運んだ。同様にインドへも、メソポタミヤへも、東部ヨーロッパへも種々な文化や政治思想を携へて行つた。彼等は野蠻未開にして文化なき原始森林の中へも文化を運び、文字、國家組織、純化された道德及び宗教觀念を傳へて、いはゆる『文化の運搬人』となつたのである。斯くして中央アジアの草原は、曾つては文化の伸張場となつて人類幾百萬人の間へ、東西南北の四方へ向つて、文化の放射をなす中心地となつたのである。

四、ハンガリー文化の特質

都市文化は石造建築の多くの文化的遺物を後世に残した。これに對してステ

ップ文化は、残念乍ら、物質文化の遺蹟の見るべきものが至つて少ない。ステップ文化には有形的表現は少い、がしかし、彼らには深い思想がある。遊牧民は遠隔の地を望み遠い將來のことを慮り、鋭敏な天象地象の觀察者でもあるが、また言葉少く、神祕的などころすらみられる。従つて彼等の僅かばかりの藝術品には、ステップの動植物や天體や、この世・あの世の生活などの表現が強く、彼らの藝術として表れてゐるのである。

我々マジヤール人も亦、斯くの如き思想世界を此處へ持つて來たのである。曾つて中央アジアのステップ文化の中心都市における王侯の宮殿は、文化の運搬人たるツラン遊牧民により、四方八方から持運ばされた色々な文化の中心點であつた如く、今日も尙、我々マジヤール人は、カールバート山麓において種々な外國文化を尊重し吸収しつゝある。十九世紀の文化も、二十世紀の文化も、ヨーロッパ文明も、アメリカ文明も、皆これを尊重

し採用し、マジヤール人の思考方法に従つてそれを利用し、それを自分のものとなし、之にハンガリーのな性格と内容を與へてゐる。

斯く、我々マジヤール人は、外國文化から色々と學ぶのであるが、しかし、それに依つて我がマジヤール文化が決して他のものとなるのではない。ハンガリーの古い發掘物を見ると、ゴート、バロック、エムバイア等々、種々な様式のものが見出される。そして將來一千年後、若し、考古學者が今日われわれの有つ寺院・宮殿・彫像等を發掘するならば、更に他の異つたスタイルの美術品を發見することであらう。然しその時と雖も、われわれの精神は決してゴートでも、バロックでも、エムバイアでも、其他の何物でもないのである。我々は今、機關車・飛行機・電信・電話・ラジオ、其他種々な外國の文化財を利用してゐる。更に今後も亦、ハンガリーの心臓部を形造る不毛の曠原アルフェルドを工業化し、文化化するやうな日が必ず來るであらうが、その時、一番注意しなければならぬことは、『精神は不變なれ！ 魂は常にマジヤールに止め！』と云ふことである。蓋し、精神はその屬する土地に根を下してゐるからである。この精神的な價值財寶はマジヤール民族の存續する限り、どこまでも尊重し維持しなければならぬ。これを維持し保存し發展させることが、我々マジヤール人の生命なのである。故に將來、文明の利器をもつて、わが民族、わが都市、わが村、わが部落を施設し飾る様な場合には、それがつねにマジヤール精神から離脱しないやうに心掛けねばならぬ。蓋し、物を支配する精神がマジヤール精神であり、物にマジヤール魂が内在するならば、その作品はマジヤール式の物と言ひ得る。即ちわれわれは、輸入品をマジヤール精神により濾過し、これをマジヤール精神をもつて内容的に豊富ならしめ、そしてマジヤール品として再

生産し、これを更に世界へ再輸出することが出来るからである。

五、アッチラの銅像 今日祝典の意義は外でもない、わがマジャール國の心臓部アルフェルド平原に根を張つてゐる所のあの民族の根をもつと尊重し、好愛し、保育することなのである。我々はこの根から生えた樹木であり、枝である。我々はこの樹木を守り育て上げなければならぬ。樹木はその繁茂に必要な養分を常に地下の根から吸収してゐる。民族もまた同様である。

斯くの如き意味において、これら多くの根の中の最大なるものを象徴するツラン民族の王侯中の大王とも謂ふべきアッチラ將軍の記念像を建立することは、時局柄、極めて意義あることと考へる。然し、これは國家がイニシアチヴを採るべき事業ではなく、マジャール民族、マジャール社會が發起して成すべきものと考へる。斯くの如き記念碑を、大膽に誇らしく、首都の中心に建立することは、この國土、この民族を今日あらしめたものは他でもない、確固不拔のアジア精神であることを、世界に向つて誇示することなのである。予は數年前、フランスの最大新聞の一たるフィガロに、『予はアジア人なり而して予はそれを誇りとす。』と書いたことがあるが、一體、何故に我々は之をもつと大膽に、もつと卒直に言ふことが出来ないのか。それによつて何も我々の文化が低いとか、或ひは少いと言ふ譯ではないではないか。只、われわれの文化は有形的表現を持つことが少い。が然し、それはより古く、より精神的、より内容的、より象徴的なのである。それが何故誇りとし得られないのか。この矜持こそ、我がマジャール民族を強固ならしめ偉大ならしめ、且つその存在價值を肯定せしめ、そして今日この盛大なる祝典を催さしむるに至つたものと考へる……と。

ヨーロッパ民族の大海中に、アジア民族の孤島をなすハンガリー國首相テレキ・パール博士の右の言葉は、アジアの盟主日本國民にとつても示唆に富む言葉であると考へる。

第九節 ハンガリー人と我國との關係

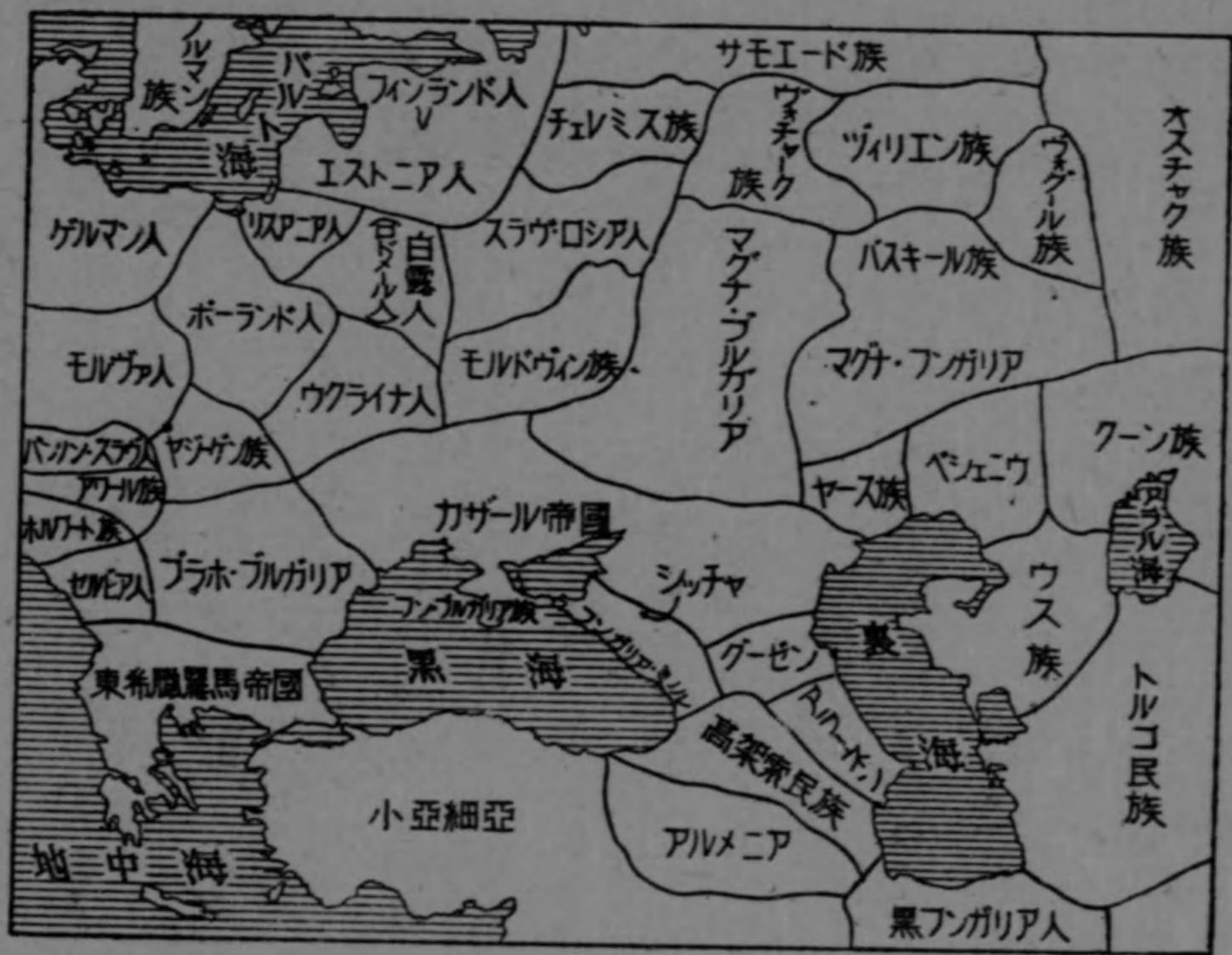
一、東方よりの光を仰ぐ民族的翹望 ハンガリーが東洋、わけても日本に憧憬するやうにな

つたのは、いつたい何時頃、どんな動機から來たものであらうか。

『兄弟なき民よ、血統の不明な漂浪の民よ!』と西歐白人に罵られたハンガリー人は、昔から己が血族、己が原始故郷、その發祥の地を探し索めたいといふ要望に飢えてゐた。そのために彼等は孤兒のやうに陰鬱な眼を常に東方に向け凝視しつゞけてゐた。この止み難き民族的翹望が、十三世紀頃あの敬虔なるハンガリーのドミニクス僧侶達を驅つて東方諸國を遍歴せしめたものである。

その中の一人のユリアーヌスといふ僧侶は千二百三十六年ドニエール河の上流に住むモルドヴィン族の國土に到達した。彼はこの國を『大洪牙利國』だと思つてゐた。その後ハンガリー王マーチャーシュ一世(一四五八—一四九〇年)は、ヴェロネズ人の法王ピウス二世に奉つた『南路見聞録』に基き、どうかして東方に住むマダナ・フンガリア人と連絡をとりたいたいものと苦心したが、遂にその目的を達することができなかつた。この見聞録に據ると、アジアの地、スキートの國に一つの野性的な異教徒が住んでゐる。かれらの言葉はパンノニア(ローマ人はハンガリー地方をかく呼んでゐた。)に住むマジャール人のそれとよく似てゐるといふのである。マーチャー





第 36 圖 約千百年前に於ける東歐のツラン民族分布状態

シュ王はこれに基いてスキートの國、異教徒の住む地に學者を派遣し調査せしめたところ、ヴェロネーズ人がマグナ・フンガリア人だと思つてゐた土着人はマジヤール人と言語的近親關係にあるフィン・ウゴル民族中のヴォグール人、オスチャーク人等であることが後になつて判明した。

二、祖先の發祥地を模索 ハンガリーにおけるフィン・ウゴル語族の比較研究に最初の暗示と糸口を與へ、その同族と發祥の地を探し索むべく該民族に關心を喚起せしめたものは、千七百七十年に出版されたヨハン・シャイノウイチの『マジヤール語とラップ語の言語表現の類似』といふラテン語の著述である。

シャイノウイチはこの書において、ハンガリー語とラップ語とはその單語、その文法形式がよく似てゐることを實證せんと努めてゐる。しかし、

シャイノウイチは言語學者ではなく、天文學者であつた。彼はジェスイット派の僧侶にして天文學者なるマキシミアン・ヘルに伴はれてラブランドに旅行した。その際、ラップ語と母國語との間に類似點が數多あることを發見して、上述の著述をなしたものである。

同族とその發祥地を探索しつゝ、遠き異郷に科學のために殉じたハンガリーの愛國者にケレシ・チョーマ・シャインドルがある。彼は千八百二十年西蔵に入つて、チベット語を研究し、遂に彼地の僧院で客死した。またレグイ・アントンは千八百三十九年に北部ロシアの探險旅行をして、そこに七年間滞在し、フィン・ウゴル語族の研究資料を數多蒐集して歸つた。ヴァームベリ・アルミンは千八百六十三年に、同じく、ウイファルヴィ・カロイは千八百七十六年に、デチ イエノエ伯は三度も南露及び中央アジアへ探險旅行を行つた。

その他セーチェニイ・ペーラは地理學者ローチ・ラヨシュを伴ひ千八百七十七年に、同じく地理學者のプリンツ・ジュラは千九百八年に、シエベク・イムレは千九百十三年に、いづれもマジヤール族の兄弟姉妹を探し求めて、海外千里の極東にまで研究の旅をつづけて行つた。このほかに、多くのハンガリー人は、ツァール時代の官僚的煩瑣や、自然の障碍や、困苦缺乏と闘ひつゝ、祖先の發祥地を模索してユーラシアの大曠原を流浪したのである。

その中で、こゝに強調しなければならぬ學者は、フンファルヴィ・バルとブーデンツ・ヨゼフであらう。この二人は屢々バルト沿岸を旅行して、フィン・エスト語の研究資料を蒐集し、フィン・ウゴル民族の科學的研究に多大の貢獻をなした。フンファルヴィの著作の中で最も興味あるものは、千八百七十四年に出版された『ロ

シア東海岸地方の旅行記』であらう。

三、ツラニズムの思想

前世紀の終り頃、ハンガリーに於てはヴァームペーリ及びその門下の研究の結果は、ハンガリー人はトルコ・タタール民族に最も近いものと思はれてゐた。しかるに今世紀になつてから、ハンガリー人は——言語的にみて——寧ろ、フィン・ウゴル族に近いといふことが分明してきた。この學術的成果は、フンファルヴィイやブーデンツの蒐集した言語學的資料に據つたものである。しかしながら、これをさらに近世的純粹比較言語學の立場から精密に科學的に研究して、最後の決定を與へた功績者は、ハンガリー側においては、ブダベスト大學の言語學名譽教授シーニエイ・ヨーゼフと故ゴムボーツ・ゾルターン博士、フィンランド側においては、アークヴィスト、パーソネン、セーターレー、ヴィッヒマン、レットウンネン等の博言學者、エストニア側においては、ウエスケ、アンデルソン、マルク等の碩學者である。

かくの如く、東方民族群のうちで、最も西に突出したアジア民族の前哨として、また政治的に最も自覺したツラン民族群の肢體としてのハンガリー民族は、ツランの血を分つアジアに残つた同族弟妹の間に、同胞たることの自覺を喚起せしめねばならぬといふ愛國的・學術的・同族愛的感情から發して、約三十年前、いはゆるツラニズムの思想がハンガリーにおいて生れたのである。そしてこのツラニズム思想を通じて、その言語的及び血縁的關係をたどり、東へ東へと探し求めつゝ、つひに日東帝國にまで及んだものと思はれる。

四、洪國のツラン運動

ヨーロッパ文學に十八世紀の中葉頃現はれたツラン Turan といふ文字は、イラン高原から北にひろがる曠大無邊のステップ地方に對する古代イラン人の使用せる呼稱である。當時この地方に

ツラ Turan といふ遊牧民がゐた。これに對してイラン Iran はアーリア人の居住地であつた。元來、ツラン運動はアーリア運動に對して起つた平行的水平運動で、アーリア運動は前世紀にいはゆる人種理論家や政治家によつて主唱されたものである。ツラン運動はツラン民族間における言語的・人種的・歴史的・政治的相似性や相關性を基礎として、同族間の相互扶助・共存共榮を目的として生れたものである。ツラン同族の間における言語學的・地理學的・人類學的相似や近似性の觀念は、ハンガリー國民の各層にわたり古くから深く根ざしてゐる。ハンガリー民族がいはゆるツラン民族と血統上の關係があるといふこの歴史的感情が、ハンガリー・ツラン運動の基礎となつたものである。ツラニズムの思想はトルコ民族の間にも汎トルキシズムの思想として相當強く動いてゐる。その程度は幾分弱いが、スラヴ化したツラン・ブルガリア人の間にも根を下ろしてゐる。

五、初めて我國へ漂着したハンガリー人

最初に日本を訪れたハンガリー人はベニョフスキー・モリーツ (一七四一—一八六年) といふハンガリーの志士の伯爵であつた。

彼は千七百六十年の末頃、ハンガリーと同じ運命の神に弄ばされてゐたポーランドの獨立運動に義勇兵として参加し、戦ひに敗れてロシアの捕虜となり、カムチャッカに流されたが、流刑地の囚人と共に暴動を起し、ロシア船セント・ピーターポール號を奪ひ、その地で知合となつた戀人アフナリシヤを伴ひ、太平洋の荒波と闘ひつゝ南航し、千七百七十一年にわが四國の土佐の海岸に漂着したのである。その後、八十年を経た千八百五十一年には、黒船がわが國を騒がさうとする新日本の黎明期であつたのであるが、これに先立ち、土佐の藩主山内家に歡待されたベニョフスキー伯爵は世界の大勢を説き、またロシアの東方侵略政策の恐るべきことを力説したの

は興味ある事實であつて、このことは山内家の記録にも、また林子平の『海國兵談』にも傳へられてゐる。

ベニョフスキー伯はその後、フランスの援助を得て千七百七十三年マダガスカル島に渡り、同地の土人を征服してフランスのために植民地を獲得し、後、一度祖國に歸り、再びマダガスカルに渡り、土民の反亂にあつて戦死するに至つたのであるが、一時歸國中、パリで著した『自叙傳』二巻の中には、日本の風俗習慣がかなり正確に描かれてゐる。この本は有名なハンガリーの小説家ヨイカイ・モールに依つてハンガリー語にも譯されてゐる。

六、我國に來朝せる主要ハンガリー人

次いで、我國を訪れたハンガリー人はユダヤ人ベッテルハイム・ベルナートである。彼はもとハンガリーの醫者であつたが、失戀のため本國を去つて米國に移住し、キリスト教の宣教師學校を卒へてから、千八百四十六年我國に來り、九年間在任して布教に従事し、その傍ら聖書の日本語譯を完成したのである。彼はまた、米使ベリー來朝の際には通譯の勞をとり、日米和親條約の締結における蔭の協力者でもあつたが、千八百五十四年にベリー提督と共に米國へ歸つた。米國人は彼の偉大なる功績を認め、今から十五年前、彼が最も永く住んでゐた琉球に、その記念像を建立したといふことである。

次いで千八百九十年代には、現、ンガリー王國攝政ホルティ・ミクローシュ殿下が、また奥匈帝國の青年海軍士官であつた頃、來朝せられたことがあるが、その時、わが國が非常にお氣に召され、當時記念として腕に日本娘と侍の顔を入墨され、それが非常な御自慢で、御機嫌のいゝ時は、腕をまくつて見せられるのである。私も宮廷で二、三度拜見したことがある。

日露戰爭中、同じく奥國軍艦で觀戰武官として來朝したボゾーキ・デジュといふ海軍の軍醫がある。この人

も非常な親日家で、歸國後、麗筆をふるつて『日出づる國』といふ我國の紹介書を著はしてゐる。その中で、東郷元帥をはじめ、その他の將軍と會談したこと、日本武士道や婦道、子供の行儀・躰や、地方人の純朴さなど、徹頭徹尾、他人ごとと思はれないほど、我國のことを賞め讃へてゐる。

その後、東清鐵道の建設に備はれてゐたハンガリーの土木技師セントガリー・アントルが滿洲から渡日して數ヶ月横濱に滞在し、關東地方を觀光したことがある。彼もまた大の親日家で、現在ブダペスト日洪協會の副會長、主として、日本の音楽や民謡を研究してゐる。

なほツラン民族運動家として我國においても知られてゐるバラートシ・パログ・ベネデクは、既に日露役前および世界大戰の前と後の三回にわたつて我國に來朝し、『大日本』といふ浩瀚な日本紹介書を著はしてゐる。

この外、最近來朝したハンガリー人では、學者、新聞記者、畫家、音楽家、辯護士、スポーツマン、旅行者など多數ある。

七、日本人の訪洪と日本紹介

一方、日本人でハンガリーを訪れた者は、日露戰爭前後から多少ある。それはウィーン駐在のわが外交官、留學生、旅行者等であつたが、わが商人にしてハンガリーの地を初めて踏んだ者は、千九百十年頃英京ロンドンで開催された世界大博覽會の折、出品者がその賣れ残り品をブダペストで賣捌き、珍らしい邦品に對する非常な人氣を博したことがある。

最近、とくに日本に對する關心を昂揚したのは、予が在洪中、昭和二年と同三年の二回に亘つて首都ブダペストで開催せられた國際見本市に——わが關係當局の援助を得て——日本部を設けたところ、兩回とも非常に好評

を博し、出品の殆んど全部を賣り盡すといふ盛況を呈し、當時、遺憾なくハンガリー人の親日振りを發揮した。これが端緒となつて、邦品もポツ／＼とハンガリー人の間にもはやされるやうになつた。

このやうな親日的雰圍氣にあるハンガリーへ、昭和六年の春、畏れ多くも

高松宮同妃兩殿下が、歐洲御巡遊の途次光駕遊ばされ、朝野の熱狂的御歡迎を受けさせられ、兩國の國交に多大の御貢獻を遊ばされたことと、更にまた、同年帝國美術院主催のブダペストにおける日本畫展覽會による日本文化の紹介とは、最近における日洪關係中特筆すべき事柄である。

八、親日的な動因

ハンガリーは親日國であるが、何故ハンガリー人が親日的なりやは種々な觀點から見ることが出来る。

予はその主なる原因を次の四點において認める。

(一)、ハンガリー人はその民族發祥の地がアジアであつて、われ／＼日本人とは多少血縁的關係があるとの信念をもつてゐる。(二)、ハンガリーは我國と同様、スラヴ民族の膨脹發展とは利害が相反する。(三)、ハンガリーは中央ヨーロッパにおいて民族的孤島をなし、且つ大國間に介在して異民族に苦しめられた悲惨なる歴史的经验をもつてゐる。(四)、ハンガリーは歐洲大戰後の民族自決主義によるトリアノン平和條約により、領土の三分の二以上と人口の過半数を隣接諸國に割讓せしめられたため、西歐白人によるこの慘酷なる強制條約は、アジア民族に對する繼子扱ひなりとの反感を抱いてゐる。

其他、大戰中の友邦國までが平和條約により洪國の一部を奪ひ取つたことが、特にハンガリー人の異民族に

對する反感を昂めたものと思はれる。これに反し、日本はシベリア出兵の際、ハンガリーの捕虜を親切に取扱つたことや、その他千九百十九年のハンガリー共產黨政府の首腦者の大部分が異人種ユダヤ人であつた關係から、他人に裏切られたる感じを持ち、反つて、ツランの同族、就中、その盟主と仰ぐ日本及び日本人に對する憧憬の念となつて現はれたものであらう。

またハンガリーの學校では日本人を模範國民として教へてゐるのであるが、これは日本國民が古き傳統を重んじて皇室を尊崇し奉り、祖先を崇拜すると同時に、しかも進歩的であるといふこと。例へば、精銳無比なる海の荒鷲や無敵艦隊があるかと思へば、古武士の如く肚の坐つた將軍もあり、隼人の如く慍悍なる兵隊もゐるといふのである。殊に教育は普及して文盲は殆んどない。日本人はすべて熱烈なる愛國者であり、勤勉であり、勇敢である。また日本人は精神的にも肉體的にも清潔好きであるといふやうなこともその原因となつてゐる。殊に、ハンガリーの女學校においては、日本の女性をほめ讃へてゐる。

九、ツランを慕ふ動因

ハンガリー人は云ふ。個人に存在の使命ある如く、民族にも、國家にも存在の使命がある。ハンガリーの中央ヨーロッパにおける歴史的使命は、西歐文明の防衛者として、楯の役目を果たしたことであつた。若しハンガリーが、アジアから絶えず寄せては返す『蠻族』の怒濤をカールバート山麓において毅然として喰ひ止め得なかつたとしたら、恐らく、キリスト教文明は、今日の如く發展してゐなかつたであらう。……實にハンガリーは、その意味において、西歐文明の擁護者であつたのだ。先きの第一次歐洲大戰にも、ハンガリーは、國際條約や國際道徳を遵守して、全國民は最後の血の一滴に至るまで奮闘をつゞけて來たのである。

にもかまはらず、友邦は我々ハンガリー人を見捨てた。同盟隣國は我々ハンガリー人を騙して祖國をモギ取つた。ユダヤ人は内部において裏切つた。そして遂に、我々ハンガリー人を乞食同様にして了つたのである……。

そしてまたハンガリー人はいふ。
セント・イシュトワーン王は、建國と同時に西歐の基督教を國教とし、ヨーロッパの政治、法律、教育制度を採用し、その文化的、經濟的資源をすべて西歐に求め、ヨーロッパの社會團體、ヨーロッパの利害關係圏に順應し、加入せんと、あらゆる努力を拂つたにも拘はらず、一千年のヨーロッパ生活の経験は、ハンガリー人をして矢張り己れは東洋民族の一つなりとの自覺の念を愈々強からしめたに過ぎなかつた。特に國難に際會した時、運命の大試煉に遭遇した時、ことさら自分達は兄弟すらも無い天涯の孤兒だといふ感を深からしめた。彼らにとつて、最後の試煉ともいふべきものは、千九百二十年六月四日のトリアノン平和條約であつた。該條約によりツラン・マジヤール民族は領土の三分の二、人口の過半数を、無慙にも、隣國のアーリア人に讓渡すべく餘儀なくされたのである。……と彼等は言つてゐる。

斯くして彼等ハンガリー人の中には、ツラン同族に對する憧憬の念が湧然として勃興したのである。そして彼等は、同じ血、同じ肉に繋がるツラン同胞を高らかに讚美してゐるのである。(拙著『ハンガリー民族詩』参照)

第十節 洪國ツラン同盟の檄

ハンガリーに於ては、ツラン民族運動は第一次世界大戰前から行はれてゐたが、戦後、屈辱的な條約をもつて

不正義が強ひられ、次いでクーン・ベレー一派の猶太人を中心とした共產革命の難に遭遇して以來、民族運動は頓に旺盛となつた。そして種々な旗幟のツラン民族運動團體が出現し、互に鎬を削つて主義のため戦つて居る。それ等を色彩別に大觀すれば、概略、次ぎの如く分類することが出来る。即ち、文化的國際親善運動を主とするもの、例へば半官的『洪牙利ツラン協會』、宗教的色彩を帯びたもの例へば『ツラン一神協會』、社會的政治的色彩の濃厚なるもの例へば『ツラン民族同盟』、『ツラン突擊團』および



洪國ツラン同盟の印

『洪國ツラン同盟』等である。茲に紹介せんとするペーカシ・ジュンジ女史は『洪國ツラン同盟』の理論主導の重鎮で、ハンガリー豪農の娘、齡四十年前後の働き盛り、若い時から熱烈なツラニストで、自費をもつて『戦の道』と題するツラン雑誌を刊行し、文化運動に社會運動に華々しく闘つて來た、云はゞ、ツラニズムのために殉すると云ふ民族愛・祖國愛に燃ゆる珍らしい型のモダン婦人である。去る昭和八年女史はあらたに大仕掛なツラン民族運動を提唱し、檄をツラン世界に飛ばし、數十頁に亘るメモランダムをもつて我が國二三要人へも呼び掛けて來た。次ぎに紹介するペーカシ女史の『日本國民に訴ふ』の一文は、右メモランダムの序文とも云ふ可きものの大要であるが、克く、洪牙利ツラニズムの思想を如實に反映し、ツラン運動とは何かを説明してゐる。

『われわれハンガリー人は過去一千年來、中央ヨーロッパのカルパト盆地に生活して居るものゝ、その魂

と自覺においては常にアジア人であつた。このアジア魂を我々の誇りとする洪牙利ツラン民族運動團體の名において、私は、我々の常に敬慕して止まぬ極東の兄弟民族たる大日本國民に訴へる。

茲に述べることはハンガリー政府筋の意向を反映するものでもなければ、また半官的『洪牙利ツラン協會』の公けな意見でもない。だからと云つて、私の提言は全然價値なきものと速断しないで、御一讀の上は、同族將來の運命に就いて、篤と御考慮を煩はし度い。蓋し、私の提言は日々の現實政治に關係するものではなく、同族の將來の運命、その政治および社會機構等に關するものであつて、その據る所は最も信頼するに足る歴史的事實、即ち、ハンガリー國民の世代より世代へ傳はるところの民族の聲であり、國民精神の發露であるからである。

現在、ツラン同胞の多くは、あの廣大無邊なユーラシア大陸において、ポリシェヴィズムの壓制下に呻吟しつつある。その中の或る者は祖國を挽ぎ取られ、他の者は外國の利益の枷に嵌められてその自由を失つて居る。

わがハンガリーの隣國たる東歐に住む諸民族の血管には、その地理的・歴史的關係からしてツラン民族の血が多量に流れて居る。されば將來、この共通の種族的・民族的自覺が振ひ興される時、彼等もまた、我等と手を携へ、共同の目標に向つて闘ふであらうことは、諸種の事情から推して略ぼ明瞭となつた。然し、悲しい哉、現在彼等は、西歐の使喚に依り、西とも東ともつかぬ不純な、信頼し得べからざる混合思想たる、汎斯拉ヴ主義に魅せられ、無自覺にも盲動しつゝある。

われわれハンガリー人は、永い間、種族的・民族的・文化的に東洋と西洋との接觸點において孤軍奮闘を續けて來た。であるから、東洋のことも我々には能く分る。現に新世界への生みの惱みにもがきつゝあるさまも、ま

た世界の重心が西洋から東洋へ向つて移動しつゝある大きな文化的・政治的地滑りについても、他の西歐諸民族よりも早く我々は豫知して居たからこそ、將來に對する準備工作として、同族の間に民族的自覺を促す可くツラニズムの運動を起し來たのである。

由來、東洋民族は、西歐白人の如く能動的攻撃的であるよりは、寧ろ、受動的內省的な生活に傾く關係上、創造能力は多分に有してゐても、それを思ふ存分發揮して敵を壓服することが出来なかつた。それゆゑ、西歐の機械文明華やかなりし時代において、われわれ東洋人は、彼等白人により搾取利用される計りで、むしろ悲運の立場にあつた。然るに、この常勝無敵であつた機械文明も今や行詰り、すでに廢頽期に這入つたとさへ言はれる。蓋し、極端なる物質主義、極端なる生産の機械化、極端なる社會機構の機械化は、却つて、生ける人間の有機的生活を壓迫し、生物を窒息せしめるからである。すでに無機物化した文明は屍も同様、時と共に腐爛し、毒素を發散して生ける物を毒せずには措かぬ。そして遂ひにはその生命をも斷つに至る。西歐物質文明の腐爛廢頽的產物であるポリシェヴィズムにしろ、國際的マンムート・カピタリズムにしろ、ともに生ける靈魂を壓殺し、極端なる物質主義により偽價値をもつて眞正價値に代へ、凡ての生ける個性を單一化せんとするものに他ならぬ。

由來、東歐のアジア的民族は、異人種の文化たる西歐物質文明とびつたりしなかつたことは歴史に照らして明らかである。従つて、この文明が機械文明を得意とする西歐諸民族におけるよりも、かれら東歐のアジア的民族において、ヨリ容易に、ヨリ速かに腐爛崩潰し始めた事は寔に當然のことであつて、この腐爛廢頽の速度を促進したものは、實に、功利的インターナショナルリズムを生活の根城とする猶太族であつた。このことは既

に前世紀末において判明して居つた。同時にまた、アジア的精神の族長主義的農業生活は、かれら猶太族の得意とする國際資本主義とは無關係に存立し得るため、彼ら猶太族の世界征服的企畫に對し最大の障碍であることも明瞭になつて居た。されば、東洋的族長主義的農業生活形式は、かれら國際主義者に取つては未來永劫而も最大の仇敵である。然るにかれら國際主義者は、東歐のアジア的農業民族の肩に、その異質不消化な物質文明を彌が上にも積み重ね、遂ひにロシアにおいて西歐文明の『腐爛バチルス培養所』を建設するに成功したのである。

然しながら、西歐は既にこの劍呑な國際主義者の陰謀に氣付き、それが防衛手段を講じたため、疾患は漸く快癒に向ひつゝある。今日、西歐におけるあの熾烈なる民族主義、國民主義の擡頭は、取りも直さず、西歐諸民族の民族的覺醒であつて、その仇敵たる國際主義者の陰謀・壓迫・殘骸を振ひ落さうとする自衛行動に他ならぬ。我我ハンガリー人もまた、この西歐の甦生を心から喜ぶものである。蓋し、これは總ての國家に取つて危険なる國際主義的流行病の終焉を意味するものだからである。然し乍ら、我々が眞の甦生を圖るためには、われわれ自身で新生活の原理を創建す可きであつて、西歐のものを受け繼いで、それに依つて更生すると云ふことは出来ないのである。東歐及びアジア復興のための新生活道は、ただ、ツラン傳來のアジア精神を明徴ならしめることに依つてのみ達成し得られる。われわれハンガリー人は、ツラン人種の祖先たるスキイト族、匈奴族、蒙古族等の歐亞に跨る大版圖の極西部におる云は、國境哨兵である。われわれツラン西部邊境の前哨は、常に、その顔と眼を、日出づる東方民族の彼方、あの偉大なる統一的ユーラシア大民族の東部邊境を護る日本民族の方へ向け、凝視しつゞけて居るのである。

日本・洪牙利間の地理的距離は如何に大なるにもせよ、畢竟、われわれはツラン民族の運命共同體である。況んや、極東の富裕な日本も今日では幾千條の經濟的利害の糸によつて西歐の資本主義と繋がりを有し、かなりこれと密接な關係にある事故、西歐資本主義の崩壊は直に極東の國々にもその影響を及ぼさすには措かぬ。また西歐的・物質的・世界征服的・社會主義的毒素の傳播も、更には蘇聯邦と界を接する國々に侵蝕せんとするポリシエヴィズムの思想的・政策的影響と同様、深甚の注意を拂はねばならない。また極端に民族主義的に鎖國しつつある西歐の國民主義も亦それ自身において、東洋のために決して有利なものではない。また西歐が自己の手足の自由を束縛せられつゝある國際金融資本主義の重壓を振ひ落さうとすればする程、この國際金融主義者の壓迫及び組織破壊的バチルスは、われわれ東洋民族の頭上へ雪崩れかゝつて來ることも殆んど必然的である。

われわれハンガリー人は、我々の體内に喰入つてゐる極端なる西歐思想を調節するためにも亦、アジア的ツラン的強烈なる國粹主義的思潮は必要なものである。ゆゑに我々は欣んで東洋思想を受入れ、更にこれを西歐諸民族の間にも宣揚せんとさへ思ふのである。また日本は、その生活利益を、例へば、若し將來西歐列強から政治的に遠ざかつた際といへども、なほ對歐貿易を持続せんがためには、歐洲において新たに信賴し得べき連絡者を必要とするであらう。と同時にまた、彼地に到達するために最も安全なる連絡通路が絶對的に必要である。ヨーロッパにおけるこの連絡者の任務は我々ハンガリー人が引受けるであらう。また東亞と西歐とを繋ぐ唯一の安全確實な連絡通路は、ツラン同族の居住地帯の他には無いのである。即ち、その順路は、同胞の祖先、ツラン民族の偉大なる人物アツチラ、成吉思汗、チムール等が、悍馬に鞭打ち亞細亞の中心から歐羅巴の心臟ハンガリーまで闊

入した。あの祖先傳來のツラン大道こそ、我々の歐亞連絡の正道である。されば、目下の我々の急務はこの大道を開拓するために、先づ、富士山とカールパート山脈とを繋ぐ文化的橋梁を築くことより切なるものは無いであらう。

フジヤマからカールパートに至るこの老なるツラン民族地帯の大部分においては、現在、東方民族主義を毒するポリシェヴィイズムの分解的破壊作用が死の舞踏を演じつゝある。若し將來、それが崩潰し廢墟に歸した曉には、我々は動機不純なパン・スラヴィズムや、デモクラシーの復興と、西歐の植民政策や、功利主義的技工生活の復活を防ぎ、生氣潑刺たる眞の人間生活の更生を圖らなければならない。これはツラン西部國境の哨兵ハンガリーの利益であると同時に、東亞安定の擁護者たる日本の利益でもある。この人種的にも地理的にも、將たまた人生觀においても統一せる、廣々とした原始産業地帯が、惜しい哉、われわれの自由活動の舞臺から切離されてゐるため、ツラン西部邊境の小民族たるわれわれハンガリー人も、東亞の大民族たる日本人も、ともに雄飛すべき舞臺から鎖されて居る。即ち我々は、民族的發展のための前提條件たる空間が制約されてゐるのである。我々は狹隘なる國境内に悲惨なる生活を爲す可く餘儀なくされ、自由な活氣ある眞の生活を営むことが出来ないのである。

東洋と西洋とを結ぶこのツラン地帯は一つの完全なる統一體であるから、支離滅裂の混沌状態に放つて置いてはならない。それは組織的永續的生活の連續的統一體であらねばならぬ。それがためには、總てのツラン民族は團結しなければならぬ。ツラン民族の生活は組織的でなくてはならぬ。そしてそれは氣品あるツラン傳統に根を張るツラン精神の發露でなくてはならない。

東歐は人種的にも思想的にも東洋でもなければまた西洋でもない。この混合民族は西歐の指金によつて生れた

東とも西ともつかぬ汎スラブ思想を拐り棄て、全然、西歐に合體するか、或ひは、祖先傳來のツラン精神に復歸するか、今や、二つに一つを決すべき轉換期に到達して居る。而してこの後者を選ばんと努め、最も民族的に覺醒しつゝあるものは、我々マジヤール人である。我々は自分達の亞細亞の兄弟を『蠻族』など、輕侮したり、かれらの民族的蹶起、かれらの精神的復興を、西歐白人におけるが如く、危惧の念をもつて眺むるものでは決してないのである。

ツラン民族の廣大なる居住地域において、その生活は統一的で、文化は共通である。このツラン文化の發展を促がすために、その傳統的原始産業、一般的小工業および國民的基礎に立つ大工業等を發達せしめなければならぬ。そのためには、魂の無い寄生的存在である、あの巨大なる株式組織も、カルテル組織も共に、ポリシェヴィイズムと同様、われわれの仇敵である。ただ兩者の異なるところは後者はテロルに依つて人間生活を壓殺するのに對し、前者は限り無き競争組織により人間生活を壓迫し、總ての眞正價值を紙に替へ、投機によつて絶滅し、生産者と消費者との直接連絡を絶ち、經濟生活の外的及び内的の正しい調整を破壊し、未だ國際的信用組織網に織り込まれざる村落生活を、根柢から覆へさうとするものである。舊ツァール帝國においては、かれら國際主義者は、ポリシェヴィイキ暴力革命によつて先づ傳統的・族長的・ツラン的文化を壊滅しなければならなかつた。蓋しこれは、自然的自治的原始産業者に人為的工業化の足枷を強制するために、不可欠な道程であつたからである。このポリシェヴィイキ革命は、たゞに農業國の生活を破壊したばかりでなく、これと有機的に關聯して、自然的に發達した眞正の國民的工業國をも崩壊せしめて了つた。

然し、如何に相互依存關係にある工業地方と雖も、その度を越えて發展膨脹する時は、すでにそれ自體活ける有機的世界組織の一部分ではなく、荼毒的腫物と化する。斯くの如き潰瘍が、恰も現代世界危局の原因となり來つたのである。

日本から洪牙利に至るツラン人種の世界は、人種的立場から觀ても、また民族精神の立場から觀ても、はたまた地理的及び經濟的立場から觀ても、まことに都合よき統一體である。若し是等の民族が一致協力して、その種族的民族的性質・世界觀・傳統等に従ひ、その獨自世界の政治的及び經濟的特殊關係を愈々發展せしめ得るならば、現在の功利主義的國際協調主義より生れ出でたる國際聯盟より、ヨリ自然的な、ヨリ強固な、皇・王道的なツラン國際聯盟が誕生し得るであらうことを、私は信じて疑はない。そしてこれが、國際關係の動搖常なき不安状態を防ぎ、そして、世界平和の基礎ともなるであらう。……この宏大にして豐沃なる農業圏の生産物は、ただに西部邊境諸民族の需要を充すばかりでなく、東亞の發達せる工業に必要な原料をも充分に供給することが出来るであらう。

またツラン民族は、歐亞に跨る廣大なる地域に離ればなれに散在して居るにも拘はらず、その世界觀が殆んど一致してゐることは眞に不可思議な現象である。この共通なツラン精神から、近き將來において、一つの新しい文化、新しい經濟組織、新しい政治組織が生れ出づるであらうことを私は確信する。さらに欣ぶべき現象は、反ポリシェヴィキ、反バン・スラヴ的ロシア人の間にもまた、われわれと同様の思想を抱懐する者を見出すことである。これはツランの復興が如何に東歐及びスラヴ人の間にも歓迎せられつゝあるかの一つの證左に他ならない。

斯くの如く、今や、ユーラシア大陸においては、新しい精神世界、新しい經濟世界、新しい政治世界が生れ出でようとし居る。この機運を促進して同胞の運命を開拓するためには、我々ハンガリー人の小さな物質的及び精神的力だけでは充分ではない。こゝに、われわれは極東の兄弟から何分の協力と援助を懇請する次第である。しかし、我々の仕事は前にも述べた如く公けのものではなく、國民的の文化運動である。同族の救護、人類文化の物心兩面の發展を促がすと云ふ神聖なる使命達成のためには、どうしても我々は、ツランの盟主と仰ぐ日本國民と常時連絡を保持することが肝要である。この目的のために、われわれ西部ツランの統率者をもつて任ずるハ

ンガリー國民は、東部ツランの指導者、偉大なる日本國民からの常設的ツラン代表を、成る可く速に當地へ派遣せられんことを切望してやまない次第である……』とベーカーシ女史は言つてゐる。

第十一節 洪國ツラン同盟と我國との關係

一、我國における最初のツラン運動 去る四月三日悲劇的自殺を遂げた洪國首相テレキ・パール伯は、千九百二十年七月十九日から千九百二十一年四月十四日迄つづいた第一次テレキ内閣を組織して、共產主義絶對排撃と排猶太主義を標榜し、これに多少ツラン主義を加味して起つた人である。元來、洪國ツラン同盟は當時テレキ伯支持の下に、彼の親友ブダベスト大學教授、現洪牙利ツラン協會々長チヨロノキ・イ



エノエ博士を盟主とし、多くのツラン的志士を網羅して生れたものである。當時、本同盟はツラン諸國と同胞的
 聯契を積極化せんとして、北歐の芬蘭、近東の土耳其、極東の日本等へ全權使節を派遣したのである。わが國へ
 はバラートシ・パログ・ベネデクと云ふ志士の土俗學者が來朝して、我が國有識層一部の支持を得、予も舊知關
 係から彼に協力して東京において『ツラン民族同盟』を組織し、我國におけるツラニズム運動に關する第一聲を
 あげたのである。がしかし、當時わが國においては、マルクシズムの階級闘争に盲溺せる輩多くして、種族・民
 族等の闘争は認めないといふマルキスト派により、ツラン運動等は、夢想者の幻として冷かに取扱はれ、たいし
 た反響も見出されなかつた。かくて洪牙利ツラン使節バラートシ教授は、一年餘り本邦滞在の後、失意の態で歸
 國したのである。また他のツラン國へ使ひしたる全權等も、機未だ熟せず、豫期の成果を齎さずして歸洪したと
 いふことである。其後、英國が本運動を嫌惡して洪國政府に干渉した爲め、テレキ内閣は内外問題の難局に遭遇
 し、遂に桂冠するの止むなきに至り、該運動も自然沈衰するに至つた。元來テレキ伯は有名な地政學者で、永い
 間、經濟科大學の總長であつた。そして彼の思想はツラン的であり、従つて、日本に對しては相當理解をもつて
 ゐた。千九百三十九年二月、第二次テレキ内閣の成立、そして間もなく洪國ツラン同盟の改組、ツラン民族世界
 聯盟再組織の企圖等々、すべては偶然の出來事といふものゝ、寔に奇縁といふべきであつた。然るに、今や、こ
 の最も有力なるツラン主義者亡し。嗚呼！

二、ツラン民族世界聯盟

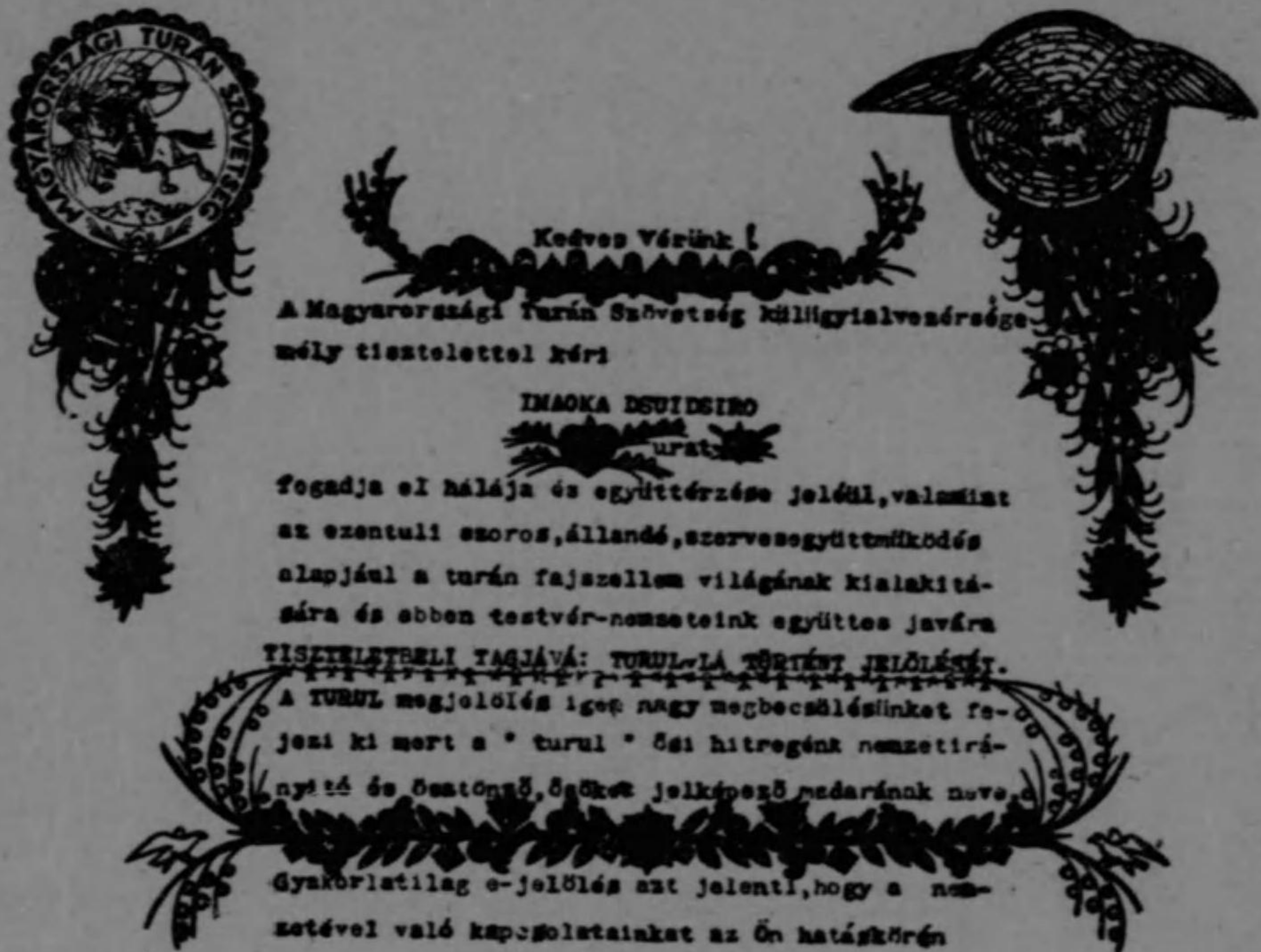
洪國ツラン同盟とは何ぞ、その意圖するところは何かを、最も理解し易く説明
 するものは、昭和十四年の春、同盟より予に宛てた次書翰と、同年十月東京において開催せられたる『アジア

防共懇談會』宛、送付して來た『大アジア建設の道』と題するメッセージである。ツラン民族運動の何たるかを、

彼自らの言葉をもつて物語るものとして、これをも次
 に紹介する。

洪國ツラン同盟よりの書翰

マジヤール民族の神話に従へば、ハンガリーが國難
 に遭遇し、人間の理性と意思をもつてしては、遂に
 打開し得ない時、すなはち、國家が右すべきや左すべ
 きやの迷路に陥つた時には、必らず、チョダサルヴァ
 シュといふ靈獸(鹿)が現はれて、マジヤール國民を
 その危機から救ひ出し、新しき使命と目標を授けて光
 明の世界へと導いたのである。またわがマジヤール民
 族の原始祖フノール(匈奴の祖)とマゴール(マジヤ
 ル人の祖)の二人の兄弟は、其昔、中央アジアのツラン
 草原から文化の光を求めつゝ、西へ西へと同胞を率ゐ
 て走つたのであるが、今や、われ／＼の歴史は一大轉



洪國ツラン同盟の書翰

換期に到達した。即ち、わがマジヤール民族の進むべき方向は西を捨て、東へ、わが祖先發祥の地、東方ツランの郷土を指して復歸することゝなつた。然るに、防共に結ばれたる日本は、皇道の大旗を翳して大陸を西へ西へと急いでゐる。西と東、そして防共の固き契りと共に、この二人の太陽の御子、民族の兄弟は、防共の絆、ソ聯の邊境を辿りつゝ、何時か再びその手を握る日が来るであらう……。

親愛なる血の同志よ！

X



靈鳥ツウルル (註参照)

洪牙利國ツラン同盟は、貴下を吾等の同志共鳴者として、また東亞におけるツラン運動の功勞者として深甚なる謝意を表すると共に、今後一層、吾等の組織的活動の中心協力者となり、ツラン民族精神の昂揚、ツラン精神文化世界の建設のため、並びに、ツラン同胞國民の共通利益のため御盡力あらんことを切望して、今般、本同盟名譽會員、特に、在外最高顧問「ツウルル」に推舉せしに付、何卒御承認あらん事を懇願する。ツウルル顧問への推舉は、貴下に對する本同盟最高敬意の表明である。蓋し、わが建國の神話において、ツウルルはマジヤール國民を指導し、激勵し、而かもわが先祖を表象する靈鳥の名稱であるからである。而して貴下をツウルルに推舉せる實際的意義については、即ち今後、貴國民と本同盟との關係は、貴下權限内においては總て貴下を通じ、或ひは貴下の忠言に従ひ、或ひは貴下推薦の個人また

は團體とのみ連絡を保持せんと欲するものである。従つて今後、本同盟より貴國民に對する總ての委任・委託或ひは書類の發送等は一切貴下を通じて、或ひは貴下指定の方法により送付すべきに付、當方に對しても貴國人の紹介、或ひは貴國ツラン諸團體より當方宛の書類其他の物品に關しても、凡て貴下を通じ、或ひは貴下の推薦によりてのみ送付せしめられんことを冀望する。ツラン兄弟同志の敬禮を以つて。ブダベスト市、千九百三十九年一月十二日、洪國ツラン同盟。

(註) 洪國の 神武天皇に該當するアールバード王がマジヤール族を率ひてウラル山麓より西征の途にいた時、道なき
茫漠たる大原野において、靈鳥ツウルル Turul はその路導として、マジヤール軍の進撃を妨からず授けたと傳へられて
ゐる。故に、靈鳥ツウルルは云はばハンガリーの金鷄である。

X

そしてこのツウルル全權委任狀には長い副書があつて、それには次の如く書いてある。

洪國ツラン同盟は今から十八年前創立されたのであるが、内外の政治的壓迫や其他の障礙に妨げられ、今日まで思ふ様に活動することが出来なかつた。最近漸く機運が熟し、ハンガリーの朝野にも民族主義が叫ばれるに至つたので、わが同盟も過去の經驗に鑑みて改組し、新しき陣容をもつて出發することゝなつた。そして本同盟の本來の目的を達成する爲めに、世界中のツラン同胞國家、同胞民族團體、及びツラン的諸團體に一人宛の名譽會員を選び、その人を通じてその地方の各團體と連絡し、その人にその方面における活動の全權を委任することゝ

なつた。この全權を託された人が言ふところの『ツァルル』である。これにてハンガリー國のため、またツラン運動のため多大の貢献をせられたる貴下が、斯くの如き意味におけるツラン民族世界聯盟の日本創立委員としての名譽會員、すなはち、東亞における最初のツァルルの就任を受諾さるゝならば、本會の光榮かつ欣快とするところである。

元來、洪牙利ツラン同盟の創立者は、東は太平洋沿岸から、西はカールバート山脈に至る歐亞兩大陸に亘つて分散するツラン民族の間には、潜在意識的に未來を約束する一つの民族心理・民族意識が澎湃として漂ふてゐることを感知し、これを組織化せんとして本同盟を創設したものである。そして將來、各民族の間に存在する同系民族團體と提携して、ツラン民族世界聯盟を結成することを豫見してゐたものである。故に、洪國ツラン同盟は云はば來るべき汎ツラン民族聯盟の一創立委員として生れたものである。

最近ハンガリーにおいても、また他のツラン民族國家においても、民族主義が非常に昂揚されて來たことは事實であるが、然し、統一的、精神的、汎ツラン的文化運動は未だ嘗て何處からも提唱されることがない。然し、ツラン民族の統一的世界組織の必要なることに就いては、何人もこれを否定するものはない。しかし、この組織は、單に東歐或ひは亞細亞だけのものではなく、ユーラシア全體に亘るものでなければならぬ。今や、大民族主義、汎大陸主義の時代は既に到來しつゝある。民族覺醒の問題は元來わがツラン民族の間から生れたものである。それにも拘はらず、その實現に至つては、ツラン民族圏において最も悲しむべき状態にある。

われわれツラン民族はアーリア民族の眞に忠實なる伴侶ではあるが、然し、如何に良き友人と雖もアーリア民

族はわれわれツラン民族に魂と精神を與へることは出來ない。また、われわれの精神生活に適するヨリ良き世界を創造してくれるものとも考へられない。

ツラン民族圏においてはツラン的人生觀、ツラン的魂、ツラン的趣味、ツラン的リズムの生活、より多彩なる精神文明を發達せしめねばならぬ。われわれの原始共通の民族性は今日もなほ至るところに認め得られる。即ち、ツラン民族圏においては價値の基礎は土地である。生活は眞實の精神的及び肉體的の價値そのものにして、生活の推進力は自由の天地に育つ個人の勞働である。また權利及び所有權の觀念についても、單に空間的に個人及び國家をその主體として認める許りでなく、時間的に血統及び靈の統一體をも認める。例へば、家族、氏族、宗族等をもその權利の主體と考へる。従つて社會的及び個人的の要求は瞬間的なものではなく、子孫末代に及ぶものと考へる。團體生活はパトリアルヒ的で、家庭の神聖、傳統の尊重を根柢とし、各人に適するような機構とし、而してそれは人爲的組織體に非ずして自然的組織體である。人間を大衆的に、また機械的に單一化するに非ずして、各人の長所を充分に發揮せしむるものでなければならぬ。

洪牙利ツラン同盟は斯の如きツラン世界の建設を目的として設立され、今もなほその事業を繼續してゐる。若しわれわれがこの運動を繼續しないならば、ツラン民族は西歐物質文明のために、或ひは霸道的アーリア民族の爲めに遠からず吸收され、消え失せてしまふであらう。かくすれば、ツランの甦生を求め、こゝも出來なければ、又ポリシェヴィズムの泥沼から脱却することも出來ないであらう。そして世界の平和も、世界の改善も、ここに至つては絶望の外はないのである。

ツラン民族圏の西端に住むマジヤール民族は、異民族精神の如何に危険なるものなりやを最も強く感ずると共に、わが民族性の本質が西歐のそれと全然異なるものなることを體驗上よく知つてゐる。それ故にこそ、ツラニズムは我がハンガリーにおいて最も鮮かに結晶したのである。

ツラン民族といふのは、これ迄ウラル・アルタイ系として知られてゐた民族ばかりではなく、その古代文明を創造せし民族の後裔をも含むのである。例へば、スメール族、匈奴族、スキート族等もこれに屬する。其他、東亞の大文化民族でも含むことは勿論である。すなはち、單にアジアの自覺せるツラン民族群團ばかりでなく、東歐の諸民族、その中には既に西歐文明、西歐の血、西歐の言語をも受容れてゐるものをも含んでゐることを承知せねばならない。

マジヤール族はその傳統に従へば、其昔、西と東に離れ離れになつた兄弟族を探し索めつゝ西進し、祖先の遺領を繼承せんとしてツラン原野から現在の地へ移動し來つたものであると言ふ。現在の地には曾つてスキート族が住つてゐて、スキート帝國はこゝから遙か東方へ擴がつてゐた。われわれの兄弟族たるフン族もアワール族もすべて、この消え失せたスキート族の民族精神を振ひ興さうとして西征の途にいたのである。が然し、それはすべて無駄であつた。そして最後に、マジヤール族が同じ使命をもつて此地に到來したものである。この第三の兄弟民族たるマジヤール人がカールパート盆地に來てから既に一千年も経過する。この間、西歐のため靈肉とも具者同様に傷けられたのである。それにも拘はらず、わがマジヤール民族はその固有のツラン精神とアジア魂を堅持しつゝ、ヨーロッパ民族の大海中に民族的異彩を放つてゐる。

われわれマジヤール人は建國一千年後の今日、やつとオーストリアの羈絆から脱却し、その民族的使命を自覺し、すでに忘れられたる兄弟族を再認識し、愚かなる眠りを續ける同胞に對し、次の如く呼び掛けてゐるのである。

我々は東方の同族の膝下へ還らう！

アジアの深淵なる原始創造精神のもとへ！

東にはツランの太陽がすでに昇りつゝある

同胞よ！ あの輝き昇る東洋へ！

このことは、我々マジヤール人の偽らざる氣持である。この氣持はハンガリーにおいて、われわれと共に永い間、ツラン運動のために奮闘せられた貴下には、能く、理解され得るところであらう。

元來、われわれの運動は政治を超越したものである。即ち、ツラン民族の間に精神的の統一世界を見出し、そこに東洋的精神のいはゆるツラン文化圏を建設しようとするものである。故に、われわれは、同族の間に存在する種々なる運動團體の何れと連絡すべきやに就いては極めて慎重なる態度を採つてゐる。同族の者ならどんな人でも、どんな思想家でも受け容れると云ふ譯にはゆかぬ。われわれの大使命を理解し自覺して、神の賦與した民族精神を體得し、これを光被することの出来る人のみがツウルクに選ばれるのである。

斯くの如き個人、斯くの如き團體を見出したる場合にのみ、洪國ツラン同盟はそれと連絡し、その人をわが同盟の名譽會員としてツラン民族世界聯盟の組織準備委員として協力を請ふと同時に、これを全的に支持するので

ある。尤も、この支持は現在のところ單に原則的なものに過ぎない。が然し、すべての運動の基礎となるものは堅實なる理論と、道徳的の支持にあることを忘れてはならない。

アジア防共懇談會へのメッセージ

我等と血を分つ同志よ！

此度東京で開かるゝアジア防共懇談會の精神に副ふならば、洪國ツラン同盟の名において、同封メッセージを参列アジア諸民族の代表に傳へるとともに、ツラン民族精神がアジア民族反共運動、すなはち、世界新秩序の建設運動に如何に重要なものであつて、而も、ツラン民族の覺醒は、アジアの爲めであるばかりでなく、全世界の利益であるかといふことを理解せしめて貰ひ度い。ハンガリーにおいても、今から二十年前には、ツランの何物なりやを理解しようとしなかつた自由主義者達も、今では、大ハンガリーの復興は、ツラン・マジヤール民族の自力更生に、外なしとの信念に到達するに至つた。また各民族の更生は、統一的大民族主義的世界觀において結束するに非ざれば、あの怖るべき西歐の世界的破壊力に對抗することは出来ない。富士山からカールバート山脈に至る間におけるツラン民族の覺醒奮起なくして、ポリシェヴィズムを殲滅することは不可能なことである。

我らと血を分つ兄弟よ！ その昔、遠く西に分れた匈奴族の後裔たるマジヤール國民は、極東の同胞諸民族に對して、魂と心の籠つた温いメッセージを送る。我がマジヤールの詩人達は、今もなほ「神聖なるアジア」につ

いて嘆美してゐる。そして「アジア人のアジア」の復興を胸に畫く時、われわれの心臓は歡喜に高鳴る。

我等の同胞よ！ われわれの切なる願は、アジア的自覺を持つツラン民族の一兄弟が、アジア防衛の尖兵として中歐カールバート山麓に、儼として西方を監視してゐることを考へて貰ひ度いことである。そしてまた、カールバート山脈から遙か東方、アジアの心臓部に繋る地帯には、匈奴族の血と魂と傳統をもつ民族が、至る所に息を貪つてゐることを考へて貰ひ度い。そしてまた、そのところどころには、本來の母語や民族的自覺を失つて異民族のそれを受繼いでゐる同族の點在することを忘れてはならない。

我々ツラン・マジヤール人は、これらツラン同胞の腦裏に潜むアジア的自覺を振ひ興さうと思つてゐる。そしてまた、この分散して支離滅裂になつた原始ツラン精神を綜合しようと思つてゐる。斯くして綜合統一せられたる民族的自覺を通じて、もつて大アジア精神の復興の道を建設しようとしてゐるのである。

我々マジヤール人は、一千年來、カールバート盆地において、偉大なる先祖の民族的自覺を醒ますべく努力し來つたのであるが、遺憾ながら、それは成功しなかつた。しかし、それでもわれわれは、民族的孤兒でもなければ、また無縁者でもないことだけは、我がマジヤール國民に植付くことが出來た。われわれは異人種異精神のヨーロッパ民族の大海中に、アジア民族の孤島をなしてゐるのである。それにも拘はらず、アジア民族としての自覺は、建國以來つねに把持し來たのであつて、これはわれわれマジヤール人の誇りとするところである。

最近、西歐においても民族主義が頻りに昂揚せられて來た。この西歐の民族的自覺は、今や、燎原の火の如く燃え擴がらうとしてゐる。若し、今にしてツラン・マジヤール人の民族的自覺が、世界最大にして最古の民族精

神たる歐亞を繋ぐツラン精神により、他の總ての同族的自覺と連繫し、結合するに非ざれば、西歐の民族主義はいよいよ氾濫し、遂には、我が小さきツラン前衛部隊を呑み盡して了ふ時が来るであらう。若しこゝに、われわれの試みが失敗に歸したならば、今後、一體、誰が、どの民族が、東洋と西洋との精神的理解の橋渡しの役を成し得るであらう？。

我々ツラン・マジヤール人は、事態をこのまゝにしておくことを許さぬ。元來、われわれマジヤール人は、ツランによつてこの地に送られた。故にわれわれは、ツランと共に、ツランの爲めに、ツランの前哨として此處に頑張る。しかし、ツランはアジアの心臓である。

ヨーロッパは決してアジアと別個の大陸ではない。従つて、ヨーロッパには不動の國境といふものはない。ユーラシアは一體である。もし、こゝに住む各民族が健やかで平和な生活を欲するならば、全住民は擧つてユーラシア大陸からポリシェヴィズムの病菌を排除して、健全にして自然的なツラン民族精神を復活せしめねばならない。元來、凡ての民族は固有の民族精神をもつてゐる。我々マジヤール人にはツラン民族精神がある。しかし、東歐全體にもそれが沈睡する。スラヴ民族精神は既にポリシェヴィズムの微菌によりいたく侵蝕せられ、その回復は相當困難であるが、他の東歐諸民族の大部分は、いつかツランの自覺に還る日が来るのであらう。

西歐には霸道的アーリア思想があり、東歐には道義的ツラン思想が潜在意識的にある。故に、アーリア精神はユーラシアの西部半島、すなはち、本來のヨーロッパにおいて支配的地位を占むべきだ。しかし、カールバート山脈から東は決して彼等の領分ではない。思想的精神的アジアの範圍は、アジア民族精神の擴充するところであつて、西においてはツラン・マジヤール人の住むカールバート盆地にまで及ぶべきだと我々は固く信ずる。我等と血を分つ兄弟よ！どうか、このことを能く理解して貰ひ度い！そして我々のこの思想を、この考へ方を、アジア諸民族の間に宣布して貰ひ度い！そして我々マジヤール人を、アジアの爲めに闘ふ東洋民族の西における弟妹として、眞實に、明らかに——西歐アーリア人の面前においても——大膽に、卒直に自認して貰ひたいと云ふことである。

そして、アジア民族精神の爲めになさるゝ闘ひにおいて、我々マジヤール人を除者扱ひにして貰ひたくない。蓋し、我々マジヤール人は、その數において比較的に少いとはいへ、新秩序建設のための聖戦において、一役引受けんことを望む者であるからである。

我々がこの使命を達成することは、單にアジアの利益であるばかりでなく、全世界の利益でもある。われわれの建設せんと欲する新秩序の世界は、より正義で、より眞實で、より調和的で、より幸福な世界であることを確信する。

われわれは、先づ、思想において大アジアを建設し、然る後、「アジア人のアジア」の實現を期せんと欲するものである……。(マジヤール國ツラン同盟)

第十二節 巴爾幹の言語と民族問題

一、緒言

『バルカンには全歐洲を爆碎するに足る爆弾が常に準備せられてゐる』との言葉は、常に我



第 37 圖 バルカンに於ける諸民族の分布

我のうちに、バルカンに關する新たな關心を生む。實に、バルカンは地理的に、民族的に、宗教的に、また政治的に、最も錯雜した地帯で、古來、ツラン、スラヴ、ゲルマン、ラテン諸民族の永遠の闘争場であり、いはゆる少數民族問題の發祥地でもある。ボスニアの僻村サラエボの一弾が第一次世界戦争を爆發せしめ、また千八百七十一年以來、歐洲におけるすべての戦争がこの地帯において勃發

し、また今次大戦勃發前にも、現状維持派と打破派の兩陣營が防衛と進攻の鎬を削つて、戦争前夜の如き緊迫した光景を展開してゐた。斯く、バルカンは歴史的にみても歐洲の噴火口である。

この噴火口の淵源を探究するには種々な觀點から成し得られるであらうが、然し、歴史の何れの時代、また、何處にあつても、異民族 異言語 異宗教の何れか、紛争の重要な素因を形成してゐると言ふことは、争はれ

ない事實である。殊に、近代における世界の動きは、多く民族國家としての動きである。民族とは人種が違つても、同じ文化を持つものであれば、同一民族と見做し得られる。文化とは、極言すれば、言語が同一であれば、それは、文化を一つにしてゐる同民族と云ひ得る。蓋し、言語は人間の發明した最も大きな文化財の一つであるからである。斯くも重要な言語を捨象して民族問題を考察することは、音なき音樂の存在を要求する以上に困難なものであらう。エリアスベルグの云ふ『ソヴェート・ロシアの革命の脈打ちを知ることに出来るものは、ロシア語を解する者だけである』との言葉の如く、バルカンにおける諸問題を理解せんとするには、先づ、バルカンの如何なる言語が、如何に分布し、如何に錯綜してゐるかといふことを知らなければならぬ。

二、言語と民族 新たに言語を知得することは新しい世界の獲得であり、文化の様相を更に深刻に我々に教ふるものである。言語はその話者と分離した別個の存在ではなく、話者の活動の所産なのである。それ故、言語の歴史は話者の歴史である。この意味において、言語を離れては如何なる文化問題も、民族問題も——またバルカンの諸問題も解決することは出来ない。人間を意識的に結ばしめ、更に、人間を社會的存在たらしむる文化の要因として言語の重要性を度外視して、問題は成り立ち得ない。言語が、斯くの如く、人類集團生活の文化的所産である限り、そこに、話者の氣質の反映することも見逃し得ない事實である。バルカンの如き諸民族の交錯する地點の考察において、民族の氣質を反映する言語を離れて論旨を進めることは、重大なる誤謬を來すものと言はねばなるまい。

然らば一體、バルカンなる地帯には、如何なる言語、如何なる民族が包含せられて居るか。それには先づ、バ

ルカンの地理的範圍を定める必要がある。だが、こゝでは、バルカン民族と密接不可分な關係にある中歐の一部をも加へて、舊チェッコ・スロヴァキア、ハンガリー、ユーゴ・スラヴィア、アルバニア、ブルガリア、ルーマニア、ギリシャ、トルコの諸國を包含する地帯として考へたい。

この地帯には國の數よりも、遙かに多くの小民族が群居してゐる許りでなく、なほ、漂泊の民、ジプシーとユダヤ人がこれら定住民の間を、うようよと遊ぎ廻つて居る。

滿洲國の僅か三分の二ほどの地域に、これだけ多くの國と民族と言語とが混在するのだから、バルカン半島の民族的混亂の状態もほゞ察知し得られよう。この地帯にはスラヴ、ゲルマン、ツラン、ローマンス語等々の諸要素に屬する民族が錯綜し、そこに、外面的には國際的諸紛争を醸生し、内面的には、その國語の混亂が、バルカンの至る所、そして、至る時に惹起せられつゝある。またそれが、民族の鬭争として、また文化や政治の諸問題として具體化せられてゐる。例へば、チェッコ・スロヴァキアに於けるチェッコ語、スロヴァキア語、マジャール語、ルテニア語、ドイツ語等々の多言語状態が、今日まで、如何に多くの不便、紛争、文化發達上の支障を來してゐたかは、チェッコの歴史を一瞥しても了解せらるゝ處である。舊チェッコ大統領マサリックなども死に至るまで、この多言語状態に痛く悩まされて居た。千九百二十年チェッコ國會に於ける公用語撰定に關する議論進行中の混亂状態の如きは、その生々しい實例である。

三、バルカンの言語 何れの地方においても、民族の錯綜、文化の交流がある限り、言語の混淆の生ずるのは止むを得ない。バルカンの凡ての言語は、何等かの程度において必らず混合語なのである。相接觸した言語

はすべて——その様式は異なるも——相互に影響し合ふものである。従つて、今日バルカンにおいて使用せられてゐる言語は、すべて純正な形態で、存在してゐるものではないことを忘れてはならない。この際、特に注意すべきことは、或る國語が混成語となるのは、その國民の學ぶ外國語が混成語となるのではなく、却つて、外國語の影響をうけるその國民自身の母國語の方が混成語となるのである。

バルカンの言語の大部分は、言語學的に、インド・ヨーロッパ語族に屬してゐる。即ち

- 一、アルメニア語——現今のアルメニア語は、トルコ語とイラン語の影響を可成りうけてゐる。
- 二、ギリシャ語——現代ギリシャ語と古典ギリシャ語との間には非常な差異がある。このことは後に述べる。
- 三、アルバニア語——近代のアルバニア語は、ギリシャ語族とイタリック語族の中間に位するイリリア語を起源とするものらしい。

四、ルーマニア語——バルカンにおける唯一のローマンス語である。

五、ドイツ語

六、スラヴ系諸語

(イ) 東スラヴ語——ロシア語、ウクライナ語

(ロ) 西スラヴ語——チェッコ語、スロヴァク語、ポーランド語

(ハ) 南スラヴ語——ブルガリア語、セルボ・クロアチア語、スロヴェン語

以上の他、ツラン系のトルコ語やハンガリー語があり、また、これ等の間を、猶太人のジャルゴンやジプシー

語等の方言が、横断的に縫ふてゐるのであるが、今は、スラヴ語と、ギリシャ語と、ローマンス語を主として述べ、他の言葉に就いては別の機会に譲る。

四、スラヴ語 スラヴ語ほど相互に近似性をもつ言葉は少ない。その形態において、その語法において、實によく似てゐる。一のスラヴ語を理解する者にとつて、他のスラヴ語を理解することは左程困難ではないと云ふ。スラヴ語相互間の文法的構成の近似性は、ゲルマン語、ローマンス語におけるよりも更に顯著である。唯だ正字法、聲音學上の少し許りの差異を除外すれば、全スラヴ語は同一の形態をとつて、我々の前に現はれて來る。スラヴ語は、その近似性により、五つのグループに分けることが出来る。

- 1、ロシア語群
- 2、チェッコ・ポーランド語群
- 3、ユーゴ・スラヴィア語群（イリル語、スロヴェン語、セルボ・クロアチア語等）
- 4、ブルガリア語群
- 5、ルサチア語群

ポーランド語は、モラヴィア、シレジア、スロヴァク等のスラヴ方言と共に、チェッコ語に最も近い。チェッコ、ポーランド兩國人は、何らの困難なしに、相互に各々自己の言語を用ゐて理解し合ふと云ふ。

セルビア語とクロアチア語とは全く同一言語であつて、その差異はたゞ文字の上のみに存する。これに就いては後に述べる。

ルサチア語は、純然たるバルカンのスラヴ語とは見られない。然し、可成りその影響をバルカンのスラヴ語に及ぼしてゐることは事實である。ルサチア語は主として、プロシヤ及びザクセンに於て使用せられ、低地ルサチア、高地ルサチアの二方言に分類せられる。その發音は可成り他のスラヴ語とは異つており、母音の相互變化さへ存在し、會話の際には、一寸スラヴ語の感じがない。だが、眼で見た時には、矢張り、スラヴ語であることが一目瞭然する。

スラヴ語は、その影響をうけた文化・宗教により、二種の文字が用ゐられてゐる。ギリシヤ文化即ち、ビザンチン文化の影響をうけたもの（ロシア、セルビア、ブルガリア）は、ギリシヤ文字の變形であるキリル文字を用ゐ、他のもの、即ち、ポーランド、チェッコ、スロヴェン諸國は、ラテン文化とヴァティカンの影響をうけ、その使用文字はラテン文字に多少の修飾を加へて用ゐて居る。

バルカンにおけるスラヴ語として重要なものは、チェッコ語とか、ポーランド語ではなくして、寧ろ、ブルガリア語とセルボ・クロアチア語の二つに過ぎない。クロアチア語は、只だユーゴ・スラヴィアにおいて從屬的のものであるから、その叙述は省略する。

五、セルボ・クロアチア語 セルビア人とクロアチア人とは、全く同一の言語、即ち、セルボ・クロアチア語を使用してゐる。けれども、等は各々セルビア語と稱し、クロアチア語と稱し、別個の言語と主張して譲らないが、それには、重大なる文化的・宗教的な理由があるからである。セルビア人は東方よりビザンチン文化の影響をうけ、宗教的にはオールドドックス教徒であり、その國語をキリル文字で記してゐる。これに反してクロア

チア人は、西方よりローマの文化を輸入し、カトリック教を信じ、その國語をラテン文字で記して居る。斯くして、一個の國語が二種の文字で記され、且つ、別個の言語の如き外觀を呈する様になつたのである。それ故に、今日のユーゴ・スラヴィア王國では、この兩語とも公用語として同權とせられてゐる。元來、セルビアとは「スラヴ」の轉訛であつて、ユーゴとはセルビア語で南の意。ユーゴ・スラヴィア國は、北のスラヴに對して南のスラヴ民族國家といふ意味である。

六、勅牙利語

ブルガリア語は、スラヴ系諸語のうちで重要である。聖徒キリル・メトヂウスは、聖書を古代ブルガリア語、即ち、當時のサロニカ附近の方言に翻譯した。この翻譯が大モラヴィア公國に齎らされ、スラヴ文字發祥の因をなしたのである。今日のオルトドックス公教會では、今尙、この古代ブルガリア語を禮拜用語として用ゐてゐる。中世において、古代ブルガリア語（教會スラヴ語）は殆んど全スラヴ民族の共用語となり、ロシア人、セルビア人、ブルガリア人のみならず、ルーマニア人やレット人にさへ用ゐられ、またトルコのイスタンブールにおいては、實用語であつたとも傳へられてゐる。

今日のブルガリア語が、文語として確立せられたのは、千八百五十年以降のことであり、その形態は古代ブルガリア語とたいぶん違つてゐる。（ブルガリアの諸民族参照）

七、ローマンス語

西紀前四世紀頃、イタリア半島では、ウンブリア、オスク、ラテンの三語が話されてゐた。ウンブリア語とオスク語は時の経過と共に消滅し去り、たゞラテン語のみが用ゐられる様になつた。ラテン語の隆盛は、ローマの政治的統一と共に擴まり、またその分化は羅馬帝國の分裂、没落と運命を共にした。そ

のラテン語の一方言たる卑俗ラテン語から生れた諸語を一括して、ローマンス語と云ふ名を言語學者は與へてゐる。この語群に屬するものは、イタリア語、プロヴァンス語、フランス語、スペイン語、カタラン語、ポルトガル語、レト・ロマン語、ダルマチア語、ルーマニア語等で、そのうち、バルカンで現在使用せられてゐるのは、ダルマチア語とルーマニア語の二つであるが、こゝに關係のあるのはルーマニア語だけであるから、たゞ、それに就いてのみ述べる。

八、ルーマニア人とその言語

ルーマニア人はラテン民族と自稱するも、殆んど、スラヴ民族と思はれる點が多い。それ故、アーデルングはその著書において、ルーマニア人はスラヴ民族なりと斷定してゐる位である。ルーマニア人の起源については、今なほ諸説紛々として定説がない。或者は、舊ローマ帝國の領土にその起源を求めんとする。それに従へば、ロムニア（ルーマニア人は自國を斯く呼ぶ）とはローマ人の後裔の居住する地を意味すると云ふ。今日のルーマニア人は、古代ローマの屯田兵と先住民のダチア人との混血兒なりと云ふ。また或人は、ルーマニアはバルカンの原住民族なりと云ふ。その他にも異説は多いが、こゝには省略する。

ルーマニア人は、人種的言語的に極めて不純な民族であつて、その言語たるルーマニア語も、ローマンス語のうちで最も混亂せるものである。勿論、ルーマニア語の語格變化や動詞の活用には、ローマンス語の匂ひをもつてゐるが、その語彙のうちに含まれた純ローマンス語系のは、僅かに二百語にすぎず、重要な語彙は、すべて外來語と言ふ、奇怪な現象を來して居る。言語學者エフ・ヴィマザルに依れば、その外來語の比例は、凡そ、次の如くであると言ふ。

